

ドクトル

金杉英五郎 纂著

科学

下

朝香屋書店発行



耳科學下

目次

第十編 鼓室ノ疾病	二二七
解剖	二二七
生理	二三七
第一章 鼓室成形異常	二四一
第二章 鼓室ノ出血	二四二
第三章 鼓室ノ損傷	二四四
第四章 急性加答兒性中耳炎又急性鼓室加答兒	二四五
第五章 慢性加答兒性中耳炎又慢性鼓室加答兒	二六一
第六章 急性化膿性中耳炎	二八一
第七章 慢性化膿性中耳炎	二九六
第八章 實扶的里性中耳炎	三〇九
第九章 中耳化膿ノ發續症	三一〇
(一) 化膿性膿膜炎	三一
(二) 腦膿瘍	三一

(三) 竇靜脈炎及血栓	三一四
(四) 顛顛骨骨瘍及骨疽	三一五
第十章 鼓室新生物	三一八
(一) 耳茸	三一九
(二) コレスチアトーム	三二四
(三) 肉腫	三二五
(四) 骨肉腫	三二五
(五) 骨新生物	三二五
(六) 囊腫	三二五
(七) 癌腫	三二六
(八) 結核	三二七
(九) 狼瘡	三二八
(十) 梅毒	三二八
第十一章 鼓室硬變	三二八
第十二章 鼓室神經痛	三三一
第十三章 乳嚙突起外骨膜炎	三三三

第十四章 乳嚙蜂窠炎	三三五
第十一編 迷路ノ疾病	三三九
解剖	三三九
生理	三四八
第一章 迷路成形異常	三五二
第二章 迷路ノ貧血	三五四
第三章 迷路ノ充血	三五五
第四章 迷路ノ出血	三五六
第五章 急性迷路炎又急性內耳炎	三五七
第六章 慢性迷路炎又慢性內耳炎	三五九
第七章 中毒性內耳炎	三六一
第八章 メニール氏病	三六四
第九章 迷路ノ骨瘍及骨疽	三七一
第十章 迷路ノ新生物	三七二
第十一章 聽神經成形不能	三七三
第十二章 聽神經炎	三七四

第十三章 中樞性聽神經纖維ノ障害……………三七五

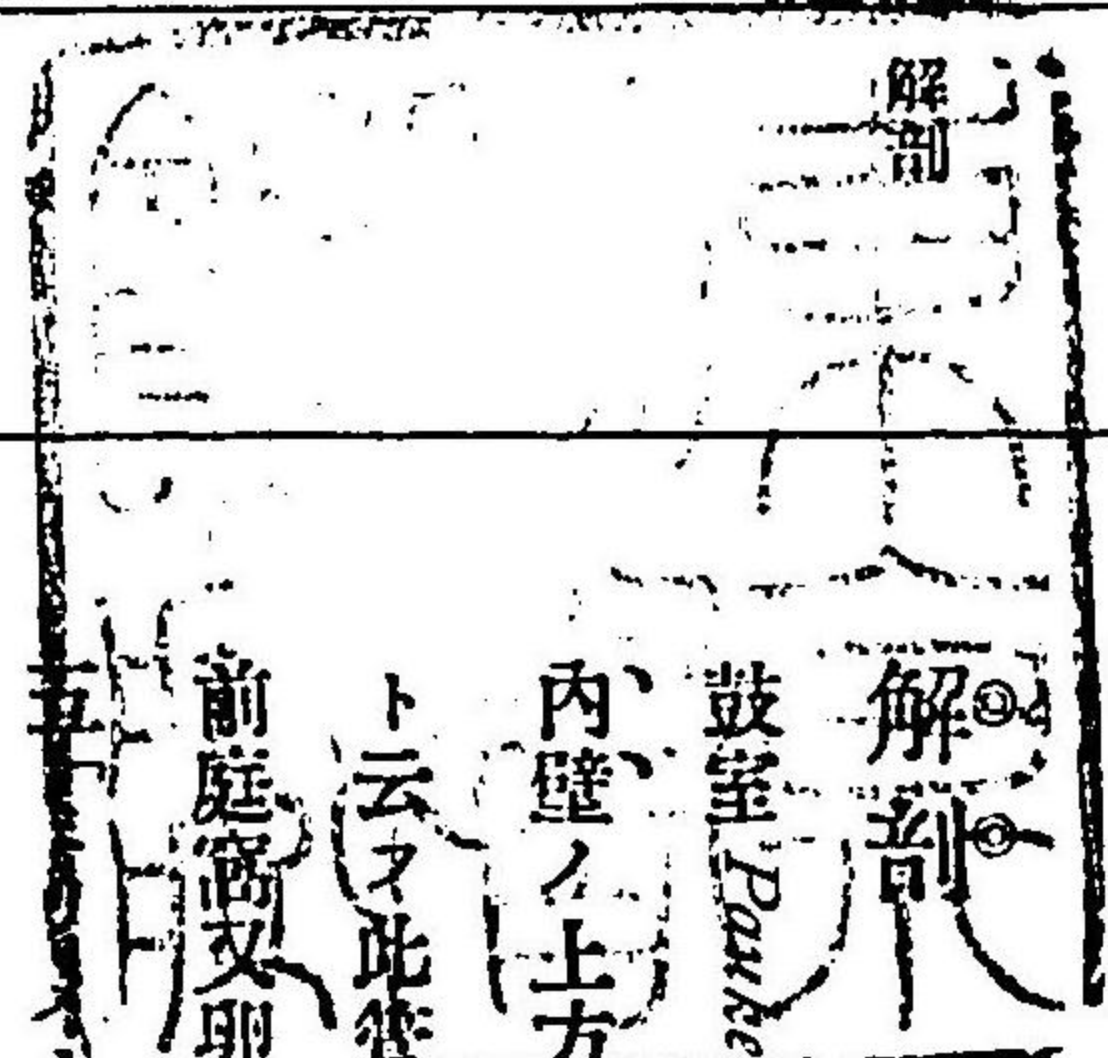
雙啞……………三七九

耳科學下目次 大尾

耳科學下

德鐸 金杉英五郎 纂著

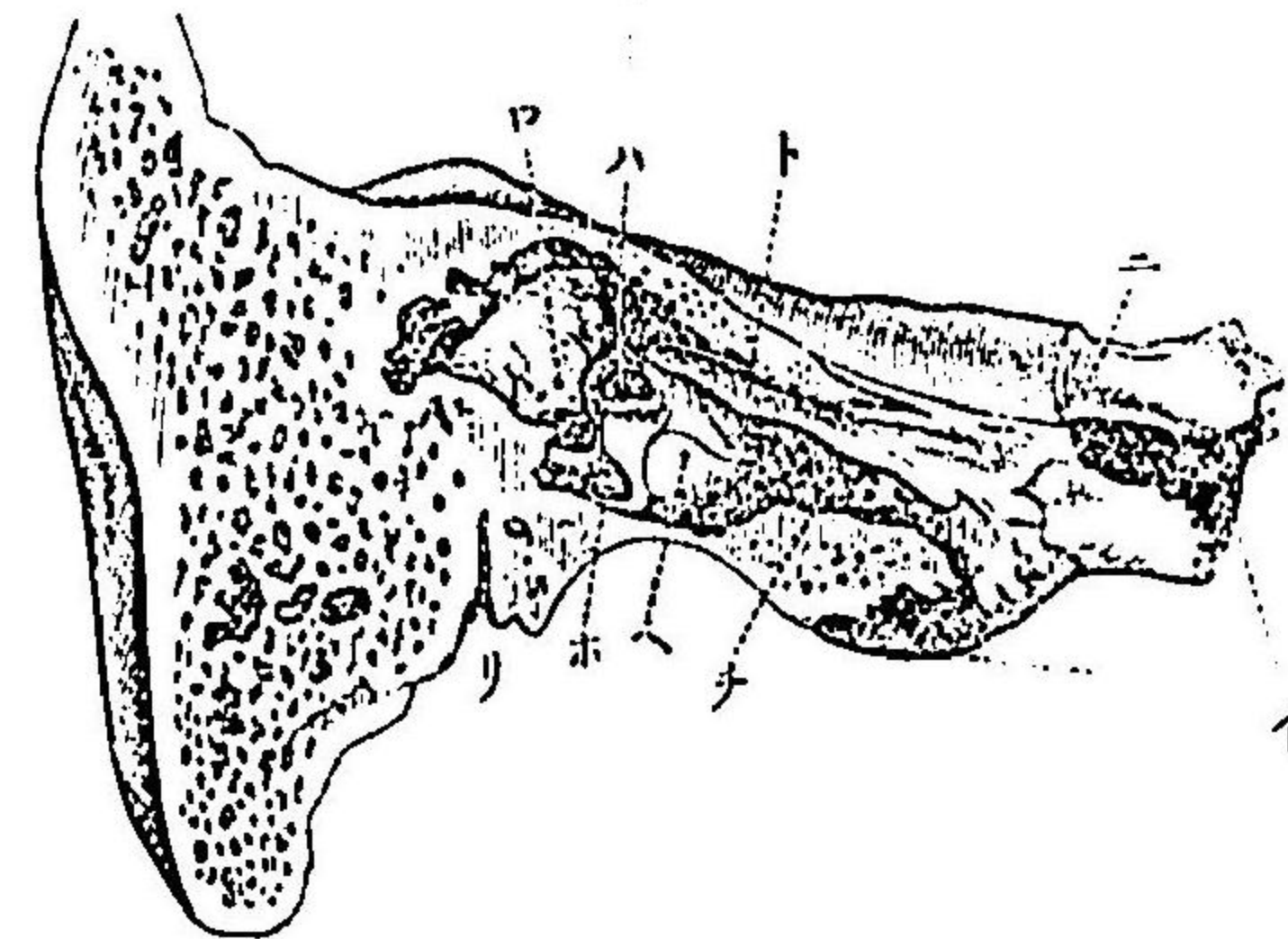
第十編 鼓室ノ疾病 Krankheiten der Paukenhöhle.



鼓室(Paukenhöhle) (Cavum tympani) ハ内外上下前後ノ六壁ヨリ成ル
内壁ノ上方ニ半管狀(稀ニ溝狀)ヲ呈スル者アリ之ヲ鼓膜張筋管(Canalis tensoris tympani)
ト云フ此管ハ匙狀ノ突起ニ終ル又其突起ハ時トシテハ小ナル管ニ變スルヲアリ
前庭窩又卵圓窩(Fornix vestibularis) ハ其長サ平均三「ミリメートル」幅大凡一、
五「ミリメートル」アリテ或ハ水平ニ或ハ後上方ヨリ斜ニ前下方ニ向フ
卵圓窩ノ後下方ニ正圓窩アリ之ヲ蝸牛殼窩(Fornix cochlearis)ト云ヒ膜ヲ以テ閉鎖セラ
ル之ヲ正圓膜一名第二鼓膜ト云フ正圓窩ハ深ク窩中ニ安置セラル、者ナリ
正圓窩ト卵圓窩トノ間ニ方リテ一ノ穹窿アリ蝸牛殼ノ第一回轉ニ對應ス之ヲ鼓室岬

Promontorium と名ツク鼓膜ノ膺ヲ距ルヲ殆トニ「ミリメートル」ナリ
 外壁ハ即チ鼓膜及ヒ周圍ノ骨縁ヨリ成ル其廣サハ人々ニ由リ種々一様ナラズ
 上壁即チ鼓室ノ天蓋ハ内方ニ在ル骨板乃至鼓室骨ヨリ成リ外方ヨリ鱗狀部ノ地板鼓
 室骨ニ延長ス兩骨板ノ結合部ヲ岩鱗破裂ト名ツケ小兒ニ於テ著明ニ之ヲ見ルベク高年
 ニ至ルニ從ヒ漸次合一ス

圖九十四第



- 鼓室内ノ關係ヲ示ス
- (右側)
- (イ) 頸動脈溝
- (ロ) 錐體狀隆起
- (ハ) 卵圓窩
- (ニ) 三叉神經四股
- (ホ) 正圓窩
- (ヘ) 岬
- (ト) 鼓膜緊張筋溝
- (チ) 歐氏管骨質部
- (リ) 顔面神經管

下壁ハ即チ鼓室底ニシテ岩様骨
 下面ノ狹葉ヨリ成ル之ハ各人ニ
 從ヒ形狀及厚薄ヲ異ニス從テ底
 面ハ或ハ平坦ニ或ハ凸面ニ或ハ
 凹面トナル
 前壁ハ上方ニ筋喇叭管アリ小骨
 板ヲ以テ二部ニ區別ス上ハ鼓膜
 張筋下ハ喇叭管ニ當ル鼓室前壁
 ノ一部ハ頸動脈溝 *Canalis carotis*

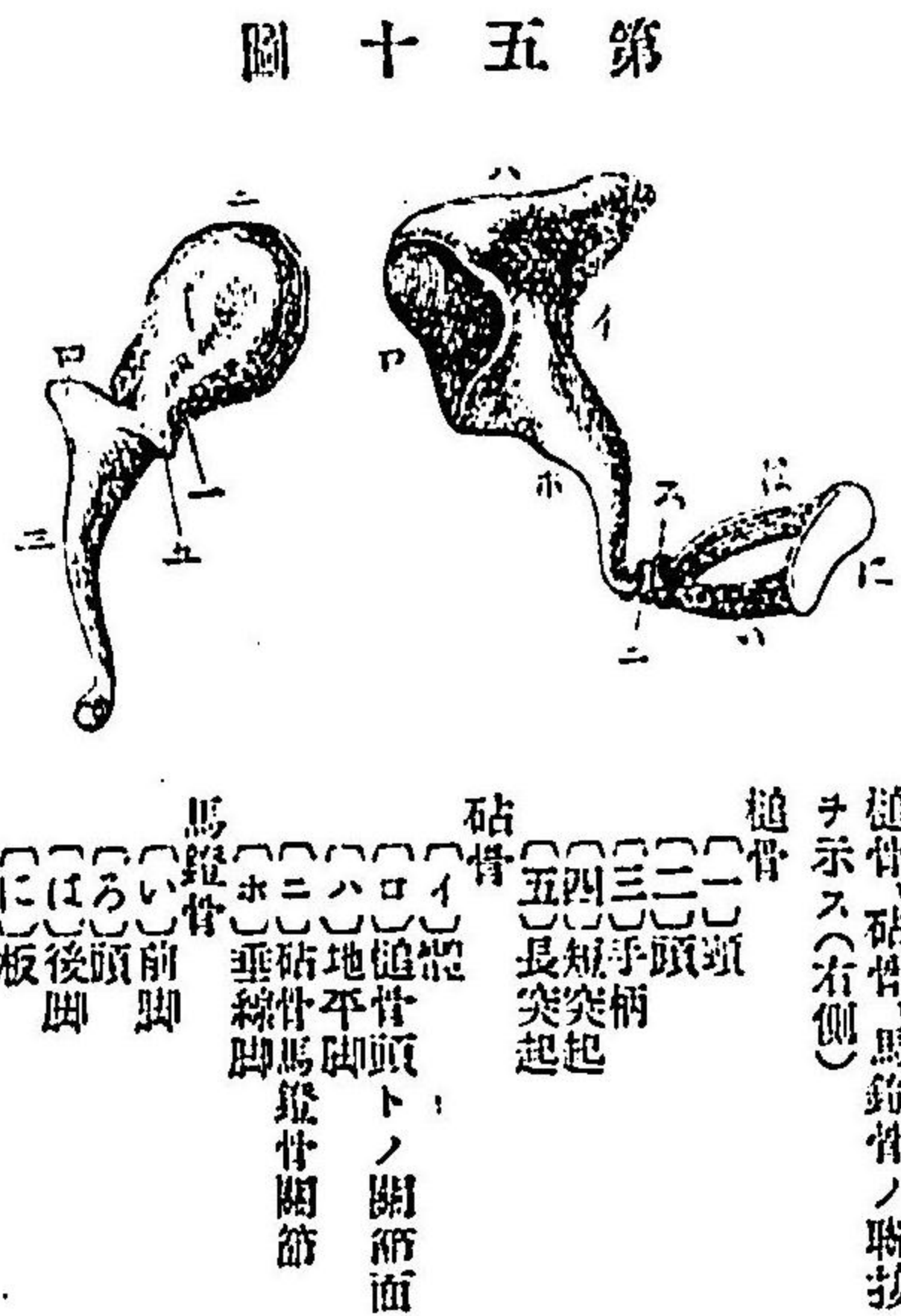
小聽骨

此ノ後壁ヨリ成ル後壁ノ上方ニ當リテ一孔アリ乳様突起ノ蜂窠ノ入口ヲナス(乳嘴蜂
 窠口 *Aditus ad cellulas mastoideus*) モルガンニー氏ニ依レハ此開口部ハ緻密ナル粘膜ニ
 由リテ鼓室ヨリ區別セラレ乳嘴蜂窠口ノ周圍ハ蜂窠狀造構ヲ有スル骨壁ヨリ成リ内下
 方ニ小ナル錐狀突起アリテ鼓室ニ向テ外方ニ突出ス
 鼓室ノ大小 トレールチ氏ニ依レハ鼓室ノ長徑ハ鼓室口ヨリ乳様突起ノ蜂窠マテ殆ト
 十三「ミリメートル」最大高徑ハ十五「ミリメートル」鼓室口ノ所ニテ五乃至八「ミリメー
 テル」内壁殊ニ鼓室岬ヨリ鼓膜迄ノ最小距離ハ二「ミリメートル」鼓室ノ喇叭管口ノ部ハ
 其幅三乃至四、五「ミリメートル」アリト云フ

小聽骨

鼓室ニ三箇ノ小聽骨アリ槌骨 *Hammer* 砧骨 *Anvil* 馬錠骨 *Stapes* 是ナリ而シテ槌骨ハ
 鼓膜ニ馬錠骨ハ迷路ニ連ナル者トス
 小聽骨ノ联接
 小聽骨ハ各自互ニ联接スルノミナラズ鼓室ノ各部ニモ結合ス即チ槌骨ト砧骨ト
 馬錠骨トハ關節ニ由リテ結合スル者ナリ

槌骨ハ鼓膜ト結合スルノミナラス又鼓室ノ外壁前壁及上壁ト連ナル槌骨頭ヨリ外壁ノ鼓膜ノ上方ニ至ル地平ノ纖維束アリ横槌骨韌帶又ハ外槌骨韌帶 *Ligamentum transversum mallei* s. *Ligamentum mallei externum* ト云ヒ此韌帶ノ最後方ニアル纖維束ヲ後槌骨韌帶 *Ligamentum mallei posticum* ト名ツク之ヨリ前方ニ前槌骨韌帶 *Ligamentum mallei anterioris* アリ此韌帶ト前記ノ韌帶ト共ニ槌骨中軸帶ヲ成ス前槌骨韌帶ハ槌骨頭ヨリ起リ長突起ト共ニ前方ニ向ヒグラセル氏破裂ニ達ス



第十五圖

砧骨體ハ上砧骨韌帶 *Lig. incudis superioris* ヲ以テ鼓室上壁ト連合ス上砧骨韌帶ハ上槌骨韌帶 *Lig. mallei sup.* ト同シク其長サ及ヒ太サニ種々ノ差アリ砧骨地平脚ハ弛キ纖維(乃チ後砧骨韌帶 *Lig. incudis posterius*) 或ハ關節横連合ニ由テ鼓室後壁ト連ナル而シテ關節横連合ニ由テ連ナルキハ

槌骨、砧骨、馬鐙骨ノ聯接ヲ示ス(右側)

- (一) 頭
- (二) 頭
- (三) 手柄
- (四) 短突起
- (五) 長突起
- (六) 砧骨

筋

地平脚ハ鼓室壁ノ窩狀ノ陷沒部ニ安置セラレ、者ナリ

馬鐙骨ト卵圓窓トノ連合ニ就キテ注意スヘキハ馬鐙骨板ノ軟骨様端ト卵圓窓トノ韌帶ヲ以テ結合スルコアリ之ヲ輪狀韌帶 *Lig. annulare* ト云フエイゼン氏等ノ検査ニ據レハ是レ遠心的ニ走ル彈力纖維ヨリ成リ其廣徑ハ後極ヨリ前極ニ至ルニ從ヒ次第ニ増加スル者ナリ

筋。

(一) 鼓膜張筋 *Musc. tensor tympani*

頸動脈管ノ前口喇叭管軟骨部ノ上壁蝴蝶骨ノ顯露翼ノ一端ヨリ起ルトレールチ氏ノ說ニ由レハ此筋ハ喇叭管張筋ト結合スル者ニシテ即チ鼓膜張筋ノ腱カ喇叭管張筋ノ内へ入ルコアリ或ハ筋ト筋ト互ニ結合スルコアリ

鼓膜張筋ハ鼓膜張筋管内ヨリ鼓室内ニ現ハル而シテ鼓膜張筋管ト喇叭管トノ間ニ小骨板アリテ兩管ヲ區別シ其末端ハ匙狀突起ニ終ル鼓膜張筋ハ鼓膜張筋管内ヨリ始マリ一小部ハ匙狀突起ニ附着シ大部ハ圓柱狀或ハ廣幅ナル腱ト成ル此腱ハ匙狀突起ノ所ニ於テ槌骨手柄ニ向ヒ頓ニ外方ニ屈折ス其屈折部ハ骨壁ニテ包マル、アリ又外方ノ纖維組

織ヲ以テ圍マル、コアリ槌骨ニ附着スル部分ハ匙狀突起ノ解剖的位置ニ從ヒ種々ノ差アリ乃チ其方向ハ或ハ内方ヨリ外方ニ向ヒ或ハ斜ニ向フ手柄附着部ハ其幅通常〇、七乃至一、〇「ミリメートル」アリ

(二) 馬鏡骨筋 *Musc. stapetius*

馬鏡骨筋ノ筋腹ハ錐體突起内ニ在リ錐體突起ノ尖端ニ於テ薄弱ナル腱ニ化シ錐體突起孔ヨリ鼓室内ニ現ハレ馬鏡骨ニ附着ス腱ノ附着點ハ常ニ馬鏡骨頭ノ關節唇ノ後端ニ在リ稀ニ此附着點ヲ距ルコ、五乃至一、〇「ミリメートル」ノ所ニ於テ馬鏡骨頭ニ附着スル者ナリ

粘。膜。

鼓室ハ顚毛上皮ヲ有スル菲薄ナル粘膜炎ヲ以テ被ハルトレールチ氏ノ説ニ鼓室ノ前部殊ニ喇叭管開口部ニ多クノ腺ヲ見ルモース氏ハ初生兒ニ就キ迷路壁上ニ絨毛ヲ見シト云ヘリ又粘膜炎下ニハ骨膜炎ナシ故ニ粘膜炎即骨膜炎ナリト見做スベシ

槌骨ヨリ前方グラーゼル氏破裂ニ延長スル粘膜炎皺襞 *Duplicator* ハ其方向腺内ニ存スル諸器ヲ包藏ス(槌骨長突起、前槌骨韌帶、内鼓室動脈、鼓索) 此粘膜炎皺襞ト鼓膜トニ由リ下

粘。膜

方ニ開口スル腔ヲ形成ス之ヲ鼓膜ノ前巾囊ト名ツク又槌骨ノ後方ニ膜アリ鼓膜ノ後端及上端ヨリ下方ニ向ヘル凹面ヲ以テ起始シ前下方へ槌骨手柄ニ附着ス此膜ハ其高サ殆ント三乃至四「ミリメートル」幅殆ント四「ミリメートル」アリ前巾囊ノ如ク鼓膜ト共ニ下方ニ開キタル腔ヲ形成ス之ヲ鼓膜ノ後巾囊ト名ツク是レ即チ鼓室ナリトス

血。管。

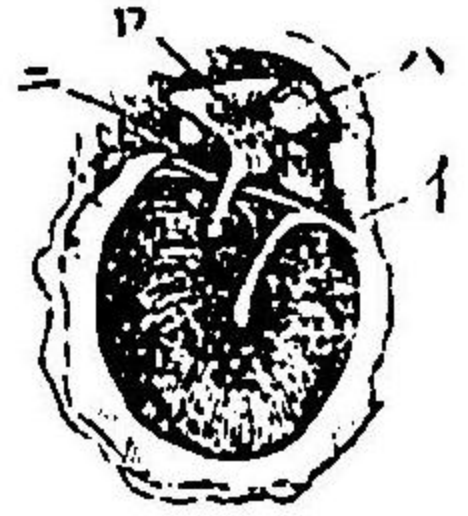
血。管

血管ハ多數ニシテ近隣ノ血管ト吻合ス外聽道ノ血管ト連合スル者ノ他ニ腦膜及鼓室天盖ノ者ト吻合シ正圓窓卵圓窓及ヒ骨壁ニ由リテ迷路ノ血管ト連合シ又乳嘴突起及咽頭粘膜炎(喇叭管ヨリ)ノ血管ト吻合シグラーゼル氏破裂ニ由リテ下顎叢ト吻合ス

動脈ハ外頸動脈及ヒ内頸動脈ヨリ來ル外頸動脈ハ上行咽頭動脈ヲ以テ小枝ヲ鼓室前部鼓膜張筋ニ分佈ス耳後動脈稀ニ後頭動脈ヨリ莖乳動脈ニ分佈シ其經過中フアロビー氏管ヨリ鼓室及馬鏡骨筋ニ一枝ヲ分ツ莖乳動脈ハウイデアン氏動脈ノ一枝及時トシテ後頭動脈ノ小枝ト交通ス其他尙吻合枝アリテ前鼓室動脈ハ莖乳動脈ト吻合ス馬鏡骨動脈ト淺岩様部動脈トノ吻合アリ内頸動脈ヨリ鼓室ニ二三ノ小枝ヲ分佈ス就中前鼓室叢ハグラーゼル氏破裂ヨリ鼓室ニ達シ終ニ莖乳動脈ト吻合ス

内頸動脈ノ最大枝乃チ中硬腦膜動脈鼓膜張筋動脈ニ分岐シ尙淺岩様部動脈ナル一枝ハ莖乳動脈ニ吻合シ他ノ一枝ハフアロビー氏管裂口 Hiatus canalis Fallopiiニ吻合ス中

圖一十五第



鼓室腔ヲ後面ヨリ示ス
(一) 槌骨
(二) 砵骨體
(三) 槌骨頭
(四) 錘骨ノ内膜

硬腦膜動脈ハ經過中一枝ヲ分チ鼓室天蓋ヲ經テ鼓室ニ分佈ス鼓室ハ顛顛動脈ヨリグラゼル氏破裂ヲ經テ一小枝ヲ受ケ内頸動脈ハ一枝ヲ鼓室ノ前壁及鼓室岬ニ送ル

靜脈ハ一部ハ硬腦膜靜脈ニ一部ハ喇叭管叢及ヒ下顎叢ニ開口ス此下顎叢ハ恐クハグラゼル氏破裂ヲ經テ鼓室ニ通スルナルベシ靜脈ノ小枝ハ頸動脈管内ニテ頸動脈ヲ圍擁スル靜脈ヨリ來リ此靜脈叢ハ海綿竇ノ連續部ト見做スベク又鼓室靜脈叢ト淺岩様部竇トハ恐クハ交通スル者ナルベシ

神經

神經ハ三叉神經、顔面神經、舌咽神經、交感神經等ヨリ來ル、三叉神經ヨリ來ル者ハ内翼狀神經ノ一枝ニシテ鼓膜張筋ニ分佈シ其第二枝ヨリ耳神經節ヲ經テ此筋ニ分佈シ又此神經ヨリ鼓室叢ノ一枝ヲ送ル者ナリ顔面神經ハ其膝狀屈曲部ノ後方ニ於テ(乃チ膝狀神

局部解剖的關係

經節 Ganglion geniculi) 蝴蝶口蓋神經叢ヨリ大淺岩様部神經ヲ受容シ以テ短枝ヲ鼓室叢ニ送ル之ヲ鼓室叢ノ交通枝ト名ツケ顔面神經膝狀叢或ハ其近部ヨリ分岐シ下方ニ走リ鼓室ニ入ル顔面神經ハ下方ニ經過スル中、一小枝ヲ馬鐙骨筋ニ送り尙進シテ顔面神經管ノ下端ヲ横行スル迷走神經ノ耳神經ト吻合シ而シテ莖乳孔ヲ出ツル前ニ鼓室索ヲ出ツ鼓室索 Corda tympani ハ銳角ヲ以テ顔面神經ヨリ分レ鼓室ノ後壁ヲ通過シ鼓室ニ入ル而シテ後鼓室巾囊ノ内葉ノ遊離端部ニ於テ上方ニ向ヒ此葉ノ把柄ニ附着スル所ニ於テ再ヒ上方ニ向ヒ砵骨鉛直脚ト槌骨頭トノ間ヲ通シ其際槌骨頭ニ密着シ而シテ前方ニ走リグラゼル氏破裂ヲ經テ以テ鼓室ヲ出デ三叉神經ノ舌神經枝ト結合ス

鼓室ノ局部解剖的關係

鼓室ノ小聽骨及ヒ壁ノ鼓膜ニ對スル局部解剖的關係ハ人々個々相異ナリ槌骨短突起ハ

鼓膜ノ上縁ニ甚ダ接近スルコアリ或ハ稍、深ク下方ニ存在スルコアリ然ル時ハ之ヨリ頸ニ移ル部及ヒ頸ノ一部ヲ見ルヲ得ヘシ砧骨ノ後方ナル砧骨鉛直脚ハ屢、槌骨把柄ノ下半部迄甚シキハ把柄ノ下三分ノ一ニ達スルコアリ或ル場合ニハ砧骨脚ノ下端ノミ鼓膜ノ上縁ニ一小點トナリテ顯ハル、者アリ尙ホ甚シキ時ハ砧骨脚ハ全ク鼓膜上縁ヲ超ヘテ存シ鼓膜缺損スル時ハ視診上其ノ後上界ニ顯ハル、者アリ砧骨脚ノ槌骨把柄ニ對スル位置ハ一定セス鼓膜後縁ニ於テ或ハ近接シ或ハ離隔ス馬鏡骨ハ鼓室内ニ高ク位スルヲ以テ外聽道ヨリ見ルコヲ得ス若シ深ク存在スル時ハ馬鏡骨頭及ヒ砧骨ノ鉛直脚ト馬鏡骨トノ關節結合部ヲ鼓膜ノ後上界ニ見ルヘク又其兩脚或ハ少ナクモ其ノ後脚ヲ明カニ見ルヲ得ベシ又屢、馬鏡骨ヨリ後方ニ連續スル腱索ヲ認ムルコトアリ腱ト馬鏡骨後脚ト誤認セザルヲ要ス後者ハ前者ヨリ見ルコト少ナク容易ニ區別シ得ベシ何トナレバ脚ハ馬鏡骨ノ頭ヨリ後内方ニ彎曲スル故ニ視界外ニ存在シ腱ハ地平ノ經過ヲ以テ鼓室ノ後壁ニ著シク見得ル者ナリ鼓膜缺損スル時鼓室ノ内壁ニ於テ下方ヨリ上方ニ注視スル時匙狀突起 (*Præ. cochlearis*) ヲ發見スベシ圓窩ハ馬鏡骨ト共ニ人々個々其局處解剖的變化ヲ有ス

生理

脚 *Tronchium* ハ槌骨把柄ノ遊離端部ニ於テ之ヨリ前方ニ或ハ後方ニ且ツ外方ニ突起ス鼓膜後下縁ニ屢、鼓室内壁ノ窩狀陷沒部ヲ見ル正圓窩ノ窩是ナリ若シ遙ニ後方ニ退存スルハ外方ヨリ視ルコヲ得サレバ然ラサレハ鉛直ニ位スル正圓窩ハ正圓膜ト共ニ外聽道ヨリ見ラルベシトハ巴ニクラメル氏ホルトリニ一氏ノ注目セシ所ナリ鼓膜下半部ノ穿孔アレハ鼓室底及ヒ骨蜂窠ヲ著明ニ認ムベク而シテ多クハ前壁ニ方ツテ喇叭管ノ鼓室口ノ一部分ヲモ見ルコヲ得ベシ

生理

鼓室ノ主ナル官能ハ鼓膜ヨリ來ル音波又ハ其他種々ノ方法ヲ以テ鼓室ニ達セシムル音波ヲ迷路ニ輸送スルニアリテ音響ノ傳導ハ一部ハ小聽骨ノ關節連鎖ニ由リ一部ハ空氣傳導ノ媒介ニ依リテ行ハル、者ナリボリゼル氏ハ小聽骨ニ依リ行ハル、音響傳達ニ就キ始メテ試験的ニ證明シテ曰ク小聽骨ハ其全部トモ振動シ且音波ハ槌骨ヨリ馬鏡骨ニ至ルニ從ヒ次第ニ微弱ト成ルブツク氏ハ砧骨運動ハ槌骨ニ半バシ馬鏡骨運動ハ又砧骨ニ半バシ即チ馬鏡骨ニ於ケル音波ノ強度ハ原音ノ凡ソ四分一ナルコトヲ實驗セリボリゼル氏ニ依レハ小聽骨振動ハ低音ニ弱クシテ高音ニ強シ然ルニ非常ニ高キハ再

ビ運動ノ度ハ減退ス

ヘルムホルツ氏ノ試験ニ槌骨ト砧骨トハ恰モ時儀ノ連鎖狀關節ノ如ク聯接スル者ニシテ其齒輪ハ關節ヲシテ一方ニ運動セシムルヲ得レモ反對ノ方向ニ運動セシムルハ固ク嵌合シテ毫モ運動スルコトナシ之ニ同シク槌骨モ砧骨ヲシテ外方ノ運動ヲナサシムルコトハ甚タ僅微ナレモ内方ニ運動スルハ微動ト雖モ砧骨ニ應スルコト甚タ著明ナリトス槌骨ノ運動ハ後及ヒ前槌骨鞴帶ヨリ成ル即チ帶ノ軸ニ從テ運動スル者ナリ(軸帶)鼓膜張筋ヲ切斷スレハ軸帶ハ弛緩ス而シテ鼓膜及槌骨把柄ノ外方運動ヲ拒抗スル纖維ハ乃チ上槌骨鞴帶及把柄ヨリ後巾囊ニ延長スル纖維ナリ砧骨ノ鉛直脚ハ絶ヘス馬鐙骨小頭ヲ側方ニ向テ壓スル故ニ若シ砧骨馬鐙骨關節ヲ切斷スルハ槌骨ハ前庭ニ向テ加ハル者ナリ小聽骨振動スルハ馬鐙骨板上端ハ前庭ニ嵌入スルコト下端ヨリモ深シリマン氏ノ說ニ輪狀鞴帶ハ其幅狭キハ馬鐙骨板ノ運動ニ障礙ナケレモ其幅廣ケレハ馬鐙骨ノ振動ニ多少ノ障礙ヲ與ヘ之ヲシテ其調節ヲ得セシムウエーベル、リール氏ノ試験成績ニ由レバ輪狀鞴帶ハ其他尙自家振動ヲナス者ナリト云ヘリ小聽骨振動ノ外尙正圓膜モ顫動アリ之ハ馬鐙骨板ノ卵圓窓ニ顫動スルニ因スルコトアリ或ハ空氣ヨリ傳導スルコトアリ

卵圓窓ニ於ケル馬鐙骨板運動ノ正圓膜ニ及ボス影響ハ馬鐙骨板上前庭ニ壓下スルハ其壓ハ迷路ニアル液ニ加ハリ正圓膜ニ波及シ膜ヲシテ鼓室ニ突出セシム之ニ反シテ若シ馬鐙骨板振動ノ一定度ニ於テ鼓室ニ向テ外方ニ運動スルハ卵圓窓ハ蝸牛管内へ沈下スベツォルド氏ノ試験ニ由レハ鼓室内空氣濃厚トナルハ鼓膜及馬鐙骨何レモ一樣ニ運動スル者ナリ

鼓膜張筋ノ作用 鼓膜張筋ハ名ノ示ス如ク鼓膜ヲ緊張スル作用アリヘンゼン氏曰ク鼓膜張筋ハ其攣縮スル時ニノミ聽取作用ヲナス者ニシテ例之動物試験ニ就キ見ル如ク連字ノ始マリニノミ收縮作用ヲナスカ如シトボツケンダール氏ニ由レハ一ノ持續性音學的ノ作用ハ又之ニ對スル持續性ノ筋收縮ヲナス者ナリト而シテ同氏ハヘンゼン氏ト同シク低音ヨリハ高音ニ於テ強キ筋收縮ヲ見タリト云フボルラック氏モ亦音學的作用ニ由リテ反射的ニ鼓膜張筋ノ攣縮ヲ來シ而シテ兩蝸牛殼ヲ破壊シ延髓ヲ切斷シタル後ニ攣縮止ミタルヲ見タリト云フ

鼓膜張筋攣縮スルハ槌骨把柄ハ前外方ヨリ後内方ニ運動シ短突起ハ下方並ニ少シク前方ニ傾ク(グルーベル氏ハ同時ニ後方ニ回旋スト云ヘリ)此把柄部ノ回旋ハ前槌骨鞴

帶ニ由リ妨害セラル故ニ此靭帶ヲ鼓膜張筋ノ拮抗物ト見做スヘキナリ
 鼓膜、槌骨把柄及ヒ各小聽骨間ハ密接ニ聯合スルカ故ニ今鼓膜張筋收縮スルキハ小聽
 骨ノ連鎖ハ鼓膜ト共ニ内方ニ運動シ從テ馬鐙骨板ヲ卵圓窓内ニ深ク壓入ス、サレハ鼓
 膜張筋收縮ニ由リ鼓膜及小聽骨ノ緊張ハ増加スレモ運動ハ減退スル故ニ迷路液ニ勢力
 ヲ及ボスコ從テ薄弱ナリトス斯ク傳導力減退シ音ノ強度薄弱トナルヲ以テ鼓膜張筋ハ
 迷路液ノ強制ナル震盪ノ矯正者ナレハ強キ音力ニ對シテ其功ヲ顯ハス者ナリトストイ
 ンビー氏ノ説ニ據レハ此矯正作用ハ強音ノ發スルキ不隨意ニ爲ス處ノ鼓膜張筋ノ收縮
 ニ關係アルハ喇叭管ニ連レル筋ノ收縮ニシテ就中著シキハ鼓膜張筋ト喇叭管張筋トノ
 連合ナリトスナタン氏ボリゼル氏等ニ由レハ欠伸スル時重聽及自覺的聽感ノ徵候ヲ來
 ス所以ハ欠伸作用ニ由リ喇叭管張筋ノ收縮ヲ來シ鼓膜張筋ノ共働作用ヲナサシムル故
 ナリ喇叭管張筋ノ鼓膜張筋ニ及ボス影響ハウルバンチツチ氏ノ説ノ如ク僅ニ頸筋ヲ緊
 張スルカ或ハ單ニ頭部ヲ運動スルモ已ニ著明ニ聽覺ノ定量的及定性的ノ變化ヲ來シ或
 ハ自覺的聽感ヲ發ス
 馬鐙骨筋ノ作用 馬鐙骨筋收縮スルキハ馬鐙骨板ノ前端ハ卵圓窩ヨリ舉上シ後端ハ深

ク前底内ニ侵入ス而シテ輪狀靭帶ノ一部ハ軸帶トナリテ靜止ス此活栓運動ニ由リ馬鐙骨
 頭ハ砧骨鉛直脚ヲ外方ニ壓シ續イテ把柄及鼓膜ヲ外方ニ運動セシム故ニ馬鐙骨筋ヲ鼓
 膜張筋ノ拮抗筋ト名ツクトインビー氏ニ據レハ馬鐙骨筋ハ耳ノ埋伏筋 *Lanschmuskel* ト
 見做スベシ何トナレハ卵圓窓ヨリ馬鐙骨板ヲ舉上スルカ故ニ其振動力ヲ容易ナラシメ
 外方ニ於ケル微小ノ音モ能ク其顫動ヲ來ス故ナリトサヴルト氏ハ微音ニテ鼓膜ノ弛緩
 シ高音ニテ其緊張セルヲ説ケリ
 ペチヂクト氏ニ由レハ鼓膜ノ知覺神經ハ腦及ヒ殊ニ延髓ノ循環ニ反射作用ヲ及ボス者
 ナリト云フ

第一章 鼓室成形異常 *Bildungsanomalie*

鼓室ハ全ク缺如スル者アリ或ハ骨質閉塞若クハ唯裂口狀空隙ノミヲ存スル者アリ局部成形
 異常ニ就テハ顔面神經管外壁、迷路窓、鼓室岬其他諸部ノ成形不能ヲ見ルヲ決シテ稀ナラズ
 又鼓膜緊張筋溝ノ全ク缺如セル者アリ
 鼓室ノ複生セル者ハカッセボーム氏 *Casselman* 及ヒバルコウ氏 *Barkow* 等之ヲ複頭畸兒ニ

就テ實驗セリト云フ

鼓室出血

第二章 鼓室ノ出血 *Haemorrhagen in die Paukenhöhle.*

原因

〔原因〕鼓室ハ充血増進スル時若クハ血管栓塞ヲ來ストキハ容易ニ其表質及ビ實質ニ出血シ易キ者トス是レ鼓室末梢動脈ハ側枝運行少ナク或ハ全ク缺如スルニ由ルナリ

鼓室血管ノ栓塞ニ因スル鼓室出血ハ心臟内膜炎ニ由テ來ルモノ最モ多クトラウトマン氏 *Tranmann* ハ爲メニ鼓膜、小聽骨、鼓室岬、鼓室底等ニ點狀乃至痲豆大ノ數多ノ出血ヲ生セシ者ヲ實驗セリト云フ

其他鼓室出血ハ種々ノ外傷潰瘍、噴嚏、高度ノ靜脈鬱血、嘔吐、百日咳、耳ノ骨疽及ビ骨瘍、フライト氏病、咽頭實扶的里、白血病、毒蛇咬傷、月經不調、月經時、中耳及ビ鼻咽腔ノ急性炎症等ニ因テ發スル者ナリ又時トシテ顯著ノ原因ヲ發見スルコト能ハザルコト屢々之アリ

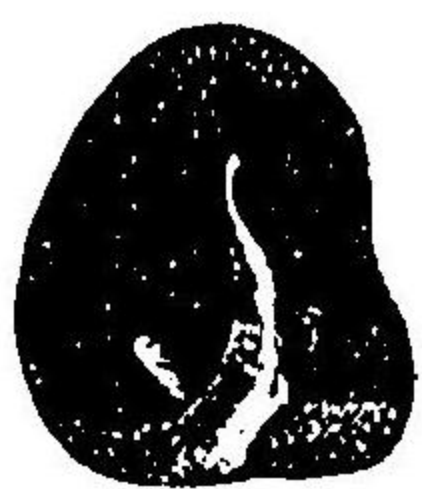
ヘンヂンゲル氏 *Hedinger* ハ多血性ノ一男子突然劇シキ鼓室内出血ヲ起セシ者ヲ報導シ (*Apoplexie des missieren Ohrs*) ハチヂクト氏 *Benedict* ハ一患者ノ斜方窩障害ノ症候ト共ニ鼓室出血ヲ起セシ者ヲ報導シ是レ中樞疾患ノ爲メニ血管運動神經障害ヲ惹起セシニ由ル者ナル

症候

ベシト云ヘリ

〔症候〕鼓膜損傷セザル者ニ於テハ、鼓室出血ノ爲ニ重聽、耳鳴、壓迫ノ感等ノ自覺症候及ビ鼓膜不透明ニシテ銅灰色若クハ暗紅色ヲ呈シ出血多キ時ハ鼓膜ノ後界及ビ上界ニ殊ニ著シキ變色ヲ來シ甚シキニ至リテハ囊狀ヲ爲シテ外聽道ニ向テ突出セルヲ見ルコトアリ

第五十二圖



鼓室出血

鼓膜既ニ穿孔若クハ脫失セル者ニ於テハ血液ハ外聽道ニ向テ流出シ間々膿汁ヲ混スルヲ見ル又兼テ疼痛ヲ伴フ者アリ鼓室壁ヲ檢スルニ大小種々ノ血管侵蝕セラル、ヲ見ルコトアリ

耳ノ骨疽及ビ骨瘍ニ由テ屢々微弱ナル出血ヲ來シ或ハ頸動脈、頸靜脈、橫竇其他貴重ノ血管壁破壊ヲ來シ鬼籍ニ上ル者アリモース氏及ビスタインブリユゲエ氏ハ一梅毒患者梅毒性骨膜ノ侵襲ヲ來シ歐氏管硬骨部及ビ頸動脈管等ヲ侵シ次テ頸動脈出血ヲ起シタル者ヲ報シヘスレル氏ハ内頸動脈侵蝕ニ因スル出血ヲ報道シ其他フグイエル氏 *Hugnier* ハ上下岩様竇及ビ内頸靜脈ノ出血、ボエケエ氏 *Boeke* ハ頸靜脈及ビ上下岩様竇ノ出血、クウン氏 *Kuhn* ハ顳額骨瘍ニ由テ上岩様竇出血ヲ起シ死セシ者、ツ、ウ、フ、ル氏 *Zaufal* ハ一患者ノ耳出血ニ由

ヲ斃レタル者ヲ剖檢セシニ横竇ノ血栓サントリニ一氏靜脈ノ侵蝕ニ加フルニ兩靜脈末端ノ閉塞セル者ヲ見、ジヨリー氏 *W. J. J.* ハ成書ニ於テ八名ノ頸動脈侵蝕セラル、者ヲ得其内六名ハ肺結核患者ナルヲ檢セリト云フ

〔療法〕些少ノ耳出血ニ於テハ外聽道及ビ鼓室ノ綿球若シクハ「ガーゼ」、栓塞ニ由テ之ヲ制止セシムルヲ得ベシ然レモ稍ニ劇シキ出血ニ於テハ止血藥ヲ用キルヲ要スル者トス明礬末、一半格魯兒鐵液等ナリ時トシテ寒冷或ハ之ニ反シテ溫暖ナル液體ヲ以テ洗滌スルハ著効ヲ奏スルヲアリ

甚シキ動脈出血ニ於テハ頸動脈壓迫及ビ結紮ヲ要スルヲアリ
其他身體ヲ安靜ニ保持シ刺戟性食物ヲ禁シ適宜ノ大便通利ヲ促スベシ

第三章 鼓室ノ損傷 *Verletzungen der Paukenhöhle.*

原因 鼓室損傷ハ稀有ナル者ナレモ銳利ナル物體ノ鼓膜ヲ穿通シテ鼓室ヲ損傷シ兼テ骨質ニ及ボス者ハ往々實驗スル處ナリ予ハ一童子ノ耳側ニ銳利ナル長針ヲ致シ其名ヲ呼ンデ顧視セシムルノ際長針ノ鼓膜ヲ穿通シ延テ鼓室損傷ヲ起セル者ヲ實驗セリ

又鼓室損傷ハ外傷性顛顛骨損傷ニ續發スル者ナリ

〔症候〕鼓室損傷スルハ著シキ聽力損害ヲ來シ兼テ鼻、耳、咽頭諸部ヨリ血液ノ流出スルヲ見ル者ニシテ又劇シキ耳鳴ト疼痛ヲ發スルヲ稀ナラズ

〔療法〕鼓室損傷ノ異物ニ由テ發スル者ハ精細ニ點檢シテ之ヲ除去シ然ル後石炭酸食鹽微溫溶液(石炭酸一、〇食鹽一、〇微溫湯一〇〇、〇)ヲ以テ緩徐ニ洗滌シ撒里矢爾酸棉花若シクハ防腐「ガーゼ」ヲ以テ外聽道ヲ栓塞スベシ

第四章 急性加答兒性中耳炎 *Otitis media Catarrhalis acuta.*

又急性鼓室加答兒 *Der acute Katarth der Pauken-*

höhle.

急性加答兒性中耳炎ハ頗ル多ク發スル處ノ疾病ニシテ感冒及ビ鼻咽腔炎症等ニ罹レル患者ニシテ多少加答兒性中耳炎ヲ發セザル者ハ殆ンド稀ナル者トス

〔原因〕頭項冷却、感冒、損傷、海水浴、鼻咽腔扁桃腺諸炎症、咽腔ノ腫脹或ハ新生物ニ因スル通氣障害、傳染諸病即チ室扶斯、結核、猩紅熱、麻疹、痘瘡、肺炎、瘧熱、梅毒等ニ由テ發シ腺

症候

病質ノ者ハ之ニ罹リ易シトス又本病ハ頗ル氣候ニ關係スル者ニシテ春秋ニ多ク霧烟、濕冷、氣温ノ劇變等ニ由テ之ヲ發スル者ナリ

〔症候〕初期耳中ニ一種不快ナル塊充、緊張ノ感アルヲ猶ホ歐氏管粘膜炎腫脹若シクハ狹窄ニ於ケルガ如シ次テ刺衝性疼痛ヲ發シ嚙下、欠伸、噴嚏等ノ作用ニ因テ増進ス又歐氏管加答兒ニ於ケルガ如ク自聽強感ヲ來スコトアリ

耳鳴ハ大小種々ニシテ夜間殊ニ増劇シテ安眠ヲ妨クルニ至ルコトアリ沸騰音、シウ〜、ゴ〜等ナリ

聽力ハ初期既ニ頗ル損害セラル、者ナレモ病勢漸次進行シテ傳音裝置ノ重要部ヲ多ク侵サ、ニ從テ聽力障害モ増進スル者トス

骨質傳達ハ反テ亢進シテ音又ヲ前額眉間部ニ貼スル片ハ音響ヲ傳導スルコト病側ニ於テ亢進スルヲ常トス此故ニリンチ氏試驗ハ消極成績(一)ヲ來ス者ナレモ迷路裝置モ共ニ侵サル、者ニ於テ骨質傳達ハ健側ニ於テ強クリンチ氏試驗モ從テ積極成績(十)ヲ來ス者ナリ

通氣的聽診上粘膜炎腫脹ノ度及ヒ分泌物ノ多少ニ由テ大小種々ノ粗糙ナル水泡音ヲ聞クモノトス

經過

圖三十五第



物山滲室鼓

發熱ハ時トシテ頗ル劇烈ニシテ小兒ハ爲メニ搥搦スルニ至ル者ニシテ又頭痛、眩暈、昏睡、語等ノ迷路及ビ腦充血ノ症狀ヲ呈スル者少ナカラストス

外聽道ハ骨質部ニ於テ輕度ノ充血ヲ呈スルヲ見ル

鼓膜ハ初期特別ノ變常ヲ呈セズ漸次増進スルニ從テ槌骨把柄部及ビ鼓膜周圍ノ血管著シク充漲シ固有色ハ光澤ヲ減殺シテ稍、溼濁ス末期ニ至レバ鼓室内ニ滲出物ヲ生ジ鼓膜面ヨリ之ヲ透見スルヲ得ヘク通常前後下界ニ平線狀ニ溼濁灰白色ヲ呈スレモ頭部ノ位置ヲ變スルニ從テ滲出物溜溜ノ位置モ亦變スル者トス

〔經過〕經過ハ原因ニ由テ種々一樣ナラズ一兩日乃至一週日ニシテ滲出物吸収シ治癒ニ趨ク者アリ或ハ諸症狀持久シ或ハ再發スルコトアリ而シテ多クハ慢性ニ轉ズル者ナリトス又慢性鼻咽腔ノ疾病アル者、營養不良ノ者、不適當ノ處置ヲ爲セシ者等ハ慢性ニ轉ジ易ク豫後モ亦良ナラズ合併症ナキ者ニ適當ノ處置ヲ施ス時ハ通常豫後良好トス

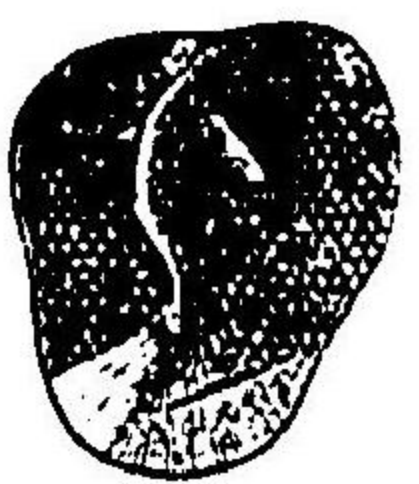
〔療法〕豫防法ハ寒冷濕潤ノ氣候ニハ項頭部ニフラチル褌法、外聽道ニ綿栓ヲ施シテ外出

シ鼻咽腔ノ疾病アレバ能ク之ヲ治療シ、酒性飲料及ビ喫煙ヲ禁スベシ
 初期ニハ耳後及ビ耳前ニ沃度丁幾、沒食子丁幾等分ノ者若クハ單純沃度丁幾ヲ塗布シ或ハ
 三四條ノ水蛭ヲ貼シ外聽道ハ綿球ヲ以テ栓塞シ緩和性下劑ヲ投スベシ
 原因療法ハ亦甚ダ必用ナル者ニシテ鼻咽腔ニ加答兒アルキハ一乃至二%ノ重曹水、鹽酸加
 里水、明礬水、單寧水等ヲ塗布シ二%ノ「ザロール」水、硼酸水、〇、一%ノ昇汞水等ノ含嗽ヲ命
 スベシ
 歐氏管狭窄アルキハポリゼル氏法若クハ「カテーテル」ニ由テ緩徐的通氣法ヲ施行スベシ
 其他總テ原病ノ處置ハ臨機應變シテ之ヲ行フベシ
 分泌物既ニ鼓室内ニ瀝溜シ病勢益々増進セントスル者ハ「カテーテル」通氣法ヲ施シ若クハ
 「カテーテル」ニ由テ刺戟少ナキ藥液ヲ鼓室内ニ注入スベシ例之硼酸水、重曹水、鹽酸加里水
 等ナリ
 ウェーベル、リール氏 *Waller-Lied* ハ歐氏管ヨリ鼓室管ヲ通シテ瀝液ヲ吸出スル方法ヲ賞揚セ
 シガボオルラン氏 *Porter* 等ハ之ヲウェーベル、リール氏ガ云フ如キ効用ナキ者ナリト云ヘ
 リ

鼓膜穿開術

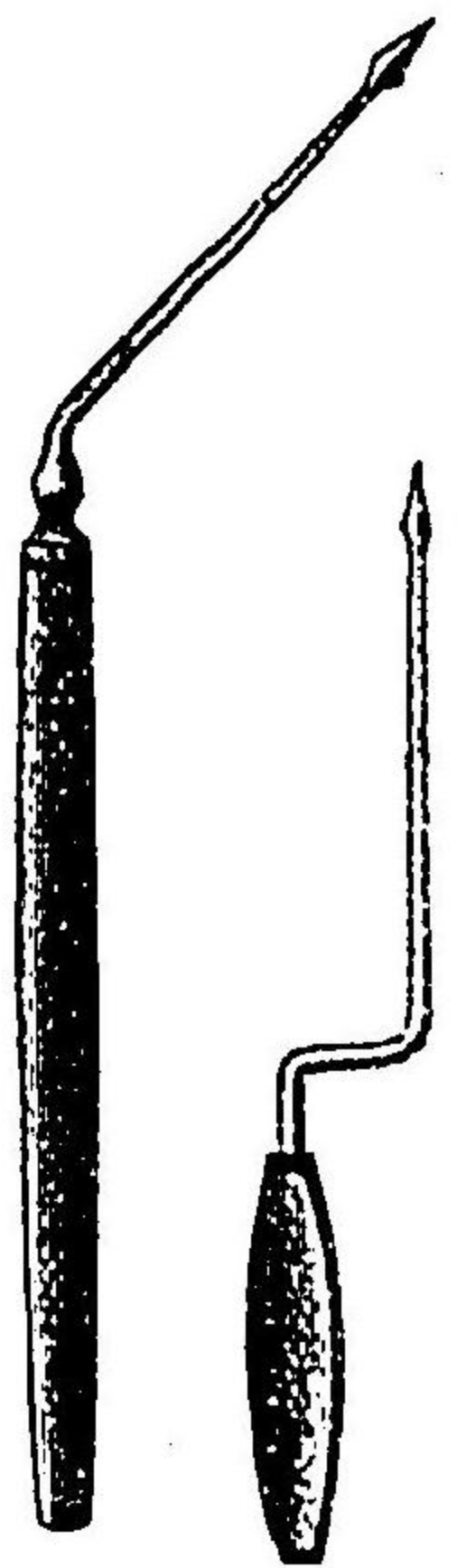
ラインハルト氏 *Reinhard* ルーデウヰ氏 *Ludewig* 等ハ按摩法ノ効力アルコトヲ説ケリ其法乳
 嘴突起部ヨリ肩胛部ニ延テ一日二回五乃至十分間按摩スルニアリ
 ゲルスト氏 *Gust* ハ一千八百七十九年既ニ頸側按摩法ノ著効アルコトヲ説ケリ
 炎症分泌物益々鼓室ニ瀝溜シ「カテーテル」ニ由テ通氣法ヲ行フモ毫モ効ナキ者或ハ唯一時寸
 効ヲ奏スルノミニシテ自覺症候漸次増進スル者ハ鼓膜穿開術 *Punctiō des Trommelfelles*
 ヲ行フベシ
 鼓膜穿開術ヲ鼓室内ノ瀝液排出ニ普ク用キルニ至リタルハトレルチ氏シワルゼ氏等ノ後
 ニシテ殊ニシワルゼ氏ノ効ハ吾人ノ深ク謝意ヲ表セザルベカラザル所ナリトス
 穿開スベキ部分ハ常ニ鼓膜ノ下部ヲ撰ムヲ可トス何トナレハ瀝液ハ多ク下界ニ滯積スル者
 ナレバナリシワルゼ氏ハ鼓膜ノ後下界ニ於テ行フコトヲ賞揚セリ
 鼓膜ヲ穿開スルノ前ハ亞爾爾保爾若クハ千倍ノ昇汞水ヲ以テ能ク外聽道及ビ鼓膜ヲ拭布シ
 然ル後二〇%ノ古加乙涅溶液ヲ點耳シ十分間靜置シ消息子ヲ以テ鼓膜ニ觸ル、ニ毫モ疼痛
 ヲ感セサルニ至ルヲ待テ之ヲ行フベシ
 鼓膜ヲ穿開シタル後ハ「カテーテル」ポリゼル氏法或ハゲルスタンチ氏ノ空氣稀釋裝置等ヲ

圖四十五第



鼓室穿開術

第五十五圖 鼓膜穿開刀



要スルコアリ而シテ此症ハ一回ノ鼓膜穿開術ニ由テ多クハ良成績ヲ得ル者ニシテ再ニ手術ヲ反覆スルコトハ稀ナル者トス

予ハ予カ「クリニツク」ニ於テ實驗セル本病患者中數名ノ病歴ヲ撰ンテ左ニ畧記ス可シ此症ハ頗ル多キ者ナレハ診斷治療上多少ノ益アル可キヲ信スレハナリ

用キテ滲液ヲ排出シ亞爾個保爾ヲ以テ外聽道及ビ鼓膜部ヲ拭布シ或ハ食鹽溶液ヲ以テ徐々ニ洗フベシ時トシテ洗滌後極細末ノ沃度仿謨末ヲ撒布スルコアリ

手術後ハ沃度仿謨「ガーゼ」若クハ撒里矢爾酸綿ヲ以テ能ク外聽道ヲ栓塞シ安臥セシムベシ

穿開口ハ小ナル者ニ於テハ二十四時間ニテ閉合スレバ時トシテ二三日ヲ

病歴

第一患者

第一患者 J.K. 二十九年、官吏

〔診斷〕左、急性加答兒性中耳炎

〔既往症〕本月廿三日海水入浴後卒カニ左耳ノ疼痛、耳鳴、重聽、發熱等劇シク某醫ノ

治ヲ乞ヒシモ荏苒治セス廿六年七月廿八日來院治ヲ乞フ

〔現症〕時儀聽力 $\frac{11}{200}$

骨質傳達病側亢進

リンネ氏試驗 一R

鼓膜ハ溷濁充血ス

體溫三十八度二分

〔經過及處置〕²³ VII 二%石炭酸水洗耳 五%古加乙涅液點耳

硫酸麻脛涅矢亞 二〇、〇 菲沃斯丁幾 三、〇

清水 二〇〇、〇

右一日三次二日分服

水蛭五條 耳後貼用

第二患者

第二患者 T. I. 廿六年、官吏
〔診斷〕右、急性加答兒性中耳炎

- 23/VII 前處置ヲ施ス 諸症稍、輕快ス
- 31/VII 疼痛發熱再ヒ甚シク鼓膜ノ充血一層相加ハル依テ鼓膜後下界ニ穿開術ヲ施シ「カテーテル」ヲ通セシニ粘稠ナル鼓室內滲出物ヲ排泄ス 後處置ハ千倍昇汞液ヲ以テ鼓膜穿開口及ヒ外聽道ヲ清拭シ撒里矢爾酸綿ヲ以テ栓塞ス
- 1/VIII 諸症大ニ輕快 石炭酸食鹽水ヲ以テ徐々ニ洗耳シ再ヒ撒里矢爾酸綿ヲ以テ栓塞ス
- 2/VIII 疼痛殆ント去ルモ排泄アリ同前處置
- 3/VIII 排泄全ク止ム 同前處置
- 5/VIII 鼓膜穿開口閉鎖ス 同前處置
- 7/VIII 諸症全ク平癒シ聽力ハ $\frac{69}{200}$ トナル

〔既往症〕十日計リ前ヨリ右耳疼痛ヲ發シ敢テ劇シカラサレモ時々聽力ノ鈍麻ヲ來ス
又間歇性耳鳴アリ 耳病ハ初發ニシテ鼻咽腔モ亦健全ナリ廿六年七月一日來院乞治

〔現症〕時儀聽力 $\frac{7}{200}$

骨質傳達 病側亢進

リンネ氏試驗 一R

體温ナシ

鼓膜ハ一樣ニ充血シ稍、膨隆ス

〔經過及處置〕1/VII 緩徐的耳浴後二〇%古加乙涅溶液點耳

2/VII 同前處置及ヒボリゼル氏通氣法ヲ施ス

3/VII 疼痛全ク止ミ諸症緩快ス點耳ヲ止メ通氣法ノミヲ施ス

6/VII 同前處置

9/VII 諸症殆ント平癒時儀聽力 $\frac{67}{200}$ トナル

第三患者

第三患者 S. M. 六十二年、無職

〔診斷〕 左右急性加答兒性中耳炎兼急性咽頭炎

〔既往症〕 四五日前ヨリ感冒ノ氣味ナリシカ今朝ヨリ左右耳ノ疼痛ヲ發シ且ツ聽力著

シク損害セラル又同時ニ咽頭部ニ嚙下時疼痛ヲ發シ少シク咳嗽アリ廿六年一

月十二日來院乞治

〔現症〕 時儀聽力左 $\frac{0}{200}$ 右 $\frac{13}{200}$

骨質傳達 存在左右同等

リンネ氏試驗 一R.

鼓膜ハ充血シ稍濕濁ス

〔經過及處置〕 $\frac{12}{I}$ 石炭酸微温液洗耳後 老利兒水、沃度丁幾、阿片丁幾ノ合劑點

耳

咽頭ニハ石炭酸古加乙涅厘里設林塗布 二%鹽酸加里水含嗽料

水製大黃丁幾八、〇 重曹 三、〇 橙皮舍利別 八、〇

清水 二〇〇、〇

第四患者

第四患者 M. S. 四十二年、車夫

〔診斷〕 右急性加答兒性中耳炎兼急性鼻炎

〔既往症〕 廿日前感冒ニ罹リテヨリ右耳疼痛耳鳴重聽ヲ來シ且ツ鼻腔兩側閉塞スルノ

感アリテ強ク鼻汁ヲ拭去セントスルキハ衄血スト廿六年八月廿三日來院乞治

〔現症〕 時儀聽力 $\frac{i.c.}{200}$

骨質傳達 病側亢進

右一日三次二分服

$\frac{13}{I}$ 同前處置兼テボリゼル氏通氣法ヲ行フ

$\frac{14}{I}$ 同前處置 諸症大ニ輕快

$\frac{15}{I}$ $\frac{17}{I}$ $\frac{18}{II}$ 同前處置

$\frac{19}{I}$ 右 $\frac{14}{200}$ 左 $\frac{30}{200}$ トナル 同前處置

$\frac{20}{I}$ ヨリ $\frac{3}{II}$ 迄同前處置諸症殆ント平癒シテ右 $\frac{35}{200}$ 左 $\frac{45}{200}$ トナル

リンネ氏試驗 一々

體温不明

鼓膜ハ稍充血潤濁ス

〔經過及處置〕²³ 2%石炭酸微温液洗耳 二〇%古加乙涅液點耳 鼻腔ニハ二%

石炭酸古加乙涅液吹入

硫酸麻屈涅矢亞 二〇、〇 苦味丁幾 二、〇 清水 二〇〇、〇

一日三次二日分服

安知必林 〇、七 臨臥頓服

²⁴ VIII 「カテーテル」通氣法ヲ施ス

²⁵ VIII 同前處置

²⁶ VIII 同前處置

²⁷ VIII 同前處置
²⁸ VIII 同前處置
¹¹ 200 トナル

第五患者

第五患者 G. I. 四十七年、煙草商

〔診斷〕右急性加答兒性中耳炎

〔既往症〕本月九日感冒ニ罹リ鼻汁ヲ拭去スルノ際右耳内ニ空氣ヲ竄入スルヲ三四回

ナリシカ耳内劇シキ疼痛ヲ發シ次テ重聽耳鳴頭痛ヲ來ス鼻咽腔ニハ別ニ異常

ヲ訴ヘス廿六年十月十九日來院乞治

〔現症〕時儀聽力 $\frac{i.e.}{200}$

骨質傳達 病側亢進

リンネ氏試驗 一々

鼓膜ハ潤濁シ下界ニ於テ灰白色ノ地平線ヲ現ハス槌骨把柄ノ周圍著シク充血

セルヲ見ル

體温三十九度

「カテーテル」通氣法ニ由テ著シキ大小水泡音ヲ聽取ス

〔經過及處置〕⁹¹ X. 外聽道ヲ亞爾個保爾ニテ拭布シ二〇%古加乙涅液點耳

²⁰ X. 諸症益増劇スルヲ訴フ由テ鼓膜後下界ニ穿開術ヲ施シ左ノ内服ヲ投ス

規那丁幾 八、〇 稀鹽酸 十五〃 橙皮舍利別 八、〇
清水 二〇〇、〇

右一日三次二日分服

21 X. 石炭酸食鹽微温液ニテ輕ク洗耳シブルンス氏綿ニテ栓塞ス

22 X. 諸症大ニ輕快シ體温平常ニ復ス

23 X. 「カテーテル」通氣法ヲ施ス

25 X. 同前處置兼テ外聽道ニ糜爛アルヲ以テ「デルマトール」ボウラツキス」ノ吹入ヲ施ス

27 X. 諸症殆ント平癒 38 200 トナル

第六患者

第六患者 T. R. 女二十三年、酒商

〔診斷〕右急性加答兒性中耳炎

〔既往症〕生來貧血ニシテ動モスレハ感冒ニ罹リ易シ然ルニ昨夜ヨリ右耳疼痛ヲ發シ夜間安眠ヲ得サリシ耳鳴、癢痒、重聽ナシ鼻咽腔亦異常ナシ廿六年十月一日來

院乞治

〔現症〕時儀聽力ハ稍、減少セルモ格別ノ變ナシ

骨質傳達ハ病側尤進

リンネ氏試驗 一〃

鼓膜ノ血管充漲シ圓錐形光體稍、幽微トナル

體温不明

〔經過及處置〕1 X. 二%石炭酸微温液洗耳 水蛭四條耳後貼布 安知必林 〇、六

頓服、硫酸麻痺温矢亞 二〇、〇 苦味丁幾 二、〇 清水 二〇〇、〇

一日三次二日分服

2 X. 洗耳、「カテーテル」スムス」七%石炭酸水點耳

3 X. 同前處置

5 X. ヨリ 9 X. 迄同前處置ヲ行ヒシニ疼痛ハ全ク減シタレテ排膿ヲ來シ即チ

慢性化膿性中耳炎ニ轉セリ

第七患者

第七患者 T.H. 廿九年、蒲團商

〔診斷〕右急性加答兒性中耳炎

〔既往症〕先月卅日感冒シ右耳鳴ヲ來シ同時ニ疼痛嚴重ヲ發シ夜間安眠ヲ得ス重聽亦著シ耳漏ナシ是レ迄右耳内ヲ損傷セシコナシ廿六年十月四日來院乞治

〔現症〕時儀聽力 $\frac{4}{200}$

骨質傳達 病側亢進

リンネ氏試驗 一R

鼓膜ノ血管充漲シ稍浮腫狀ヲ呈ス

〔經過及處置〕 $\frac{1}{X}$ 、 $\frac{2}{X}$ % 石炭酸微温水洗耳 緩徐的「カテーテル」通氣法 硫酸偏溼矢

亞丁幾、苦味丁幾合劑二日分

$\frac{6}{X}$ 諸症狀大ニ輕快シ僅ニ耳鳴ヲ殘スノミ同前處置

$\frac{9}{X}$ 諸症狀大ニ輕快スレテ耳鳴尙全ク去ラス同前處置

$\frac{10}{X}$ 、 $\frac{14}{X}$ ヨリ 迄「カテーテル」用法ヲ持續ス諸症狀殆ント平癒シテ時儀聽力

モ $\frac{48}{200}$ トナル

慢性加答兒性中耳炎

第五章 慢性加答兒性中耳炎

Otitis media catarrhalis

chronica. 又慢性鼓室加答兒 Der chronische Katarrh

der Paukenhöhle.

慢性加答兒性中耳炎ハ頗ル多ク全耳病ノ二一、五%ニ居ル而シテ此症ハ其發症急性ニ經過スル者ニ比スレハ頗ル忌ム可キ者トス例之鼓室粘膜炎、充血、不正肥厚、皺襞等ヲ生シ血管ハ荒蕪セラレ、假生膜ヲ形成シ鼓膜及ヒ聽小骨ハ種々ノ部分ニ於テ鼓室ニ癒着スル等ナリ而シテ最初ハ些少ノ自覺變常ヲ呈スレテ漸々耳鳴、重聽ノ度ヲ増進シ遂ニ耳聾ニ陥キル者ナリ

〔原因〕慢性加答兒性中耳炎ノ最モ多キ原因ハ鼻咽喉腔及ヒ歐氏管ノ慢性加答兒ニシテ其他

急性加答兒性中耳炎ノ原因トナル可キ者即チ感冒、鼻咽喉腔及ヒ扁桃腺ノ炎症腫瘍、急性發疹病、梅毒、腺病等ニシテ喉頭氣管枝病アル者モ亦之ニ罹リ易シ
兩性及ヒ年齡ニ就テハ老人小兒及ヒ貧血性婦人(殊ニ產後)、月經不調、月經過多、慢性生殖器病等ヲ患フル者)等ニ多ク壯年ノ男子ニハ比較的少ナシトス

職業上ニ就テハ空氣不潔ノ工場ニ業ヲ執ル職工及ヒ教員、說教師等ハ此症ヲ惹起シ易シ
遺傳モ亦頗ル關係ヲ有スル者ニシテ是レ諸家ノ屢論述セル所ナリ即チ咽頭、扁桃腺ノ炎症
肥厚等ノ遺傳セルカ如ク此症モ遺傳スルヲ疑フ可ラズ一家族數人ノ兄弟、姉妹悉ク慢性加
答兒性中耳炎ニ罹ル例ハ往々吾人ノ實驗スル處ナリ

又慢性加答兒性中耳炎ハ特別ノ原因トナル可キ者ナク徐々ニ發起シ劇シキ重聽ヲ喚起スル
ニ及ンテ始メテ本症ナルヲ知ルヲ往々之アリ殊ニ偏側ノ者ニ於テ然リトス

自覺症候

〔自覺症候〕 ハ耳鳴、重聽、耳内充壓重、自聽、眩暈、記憶之弱等ニシテ其主ナル者ハ耳

鳴、重聽トス而シテ此二症狀ハ同時ニ來リ或ハ各別ニ來ル又重聽増加スレハ耳鳴増加シ耳鳴
増加スレハ重聽増加スル等ノ關係ヲ有スル者ナリ

耳鳴ハ初期ハ間歇性ナレモ漸々増進シテ持續性トナリ爲メニ睡眠ヲ妨クルニ至ル者アリ
又持續性耳鳴ニ於テモ一日中其性狀ト分量ト二種々ノ變アリ例之晝間騷擾ノ中ニアルハ

毫モ感セスシテ夜間安眠シテ始メテ感スルニ至ル者アリ故ニ多クノ患者ハ晝間ハ耳鳴ナク
シテ唯夜間ノミ之ヲ發スト訴フル者多シ是レ晝間モ夜間モ平等ニ發スル者ナレモ周圍ノ騷

擾ナルト安靜ナルトニ由テ差異ヲ生スルガ如ク感スル者ナリ然レモ時トシテ晝間ハ靜ニシ

テ夜間ハ劇シク晝間ハ劇シクシテ夜間ハ安靜ニ感スル者アリ

耳鳴ハ精神感動及ヒ天氣ノ模様ニ由テ種々ニ變スル者ナリ

又頭部ノ動搖ニ由テ耳内一種ノ「コトン」ナル音ヲ發スルコトアリ是レ鼓室内滲出物ノ移
動ニ由ル者ナリ

重聽ハ通常徐々ニ増進スル者ニシテ偏側重聽ニ於テハ往々之ヲ知ラスシテ醫師ヨリ注意セラ
レ或ハ健側ヲ栓塞シ若クハ兩側重聽トナルニ至リテ始メテ之ヲ氣附ク者多シトス

重聽ハ通常小聽骨運動ノ異常、鼓室内滲出物、歐氏管狹窄等ニ由テ發スル者ニシテ種々ノ障害
同時ニ發スルハ重聽ノ度モ亦殊ニ甚シキヲ加フル者トス

重聽ハ氣候ノ變換、飲酒、喫煙等ニ由テ増劇スル者ナリ

耳内充填壓重ノ感ハ鼓室粘膜炎及ヒ滲出物等ニ因スル者ニシテ頭部、前額部等ノ壓重ヲ
兼ヌル者往々之アリ

自聽ハ不快ナル自家ノ談話反響シ所謂反響音 *Echotage* *Jaun* ヲ聽ク者ニシテ患者ハ爲メニ
談話ヲ嫌忌スルニ至ル者アリ

眩暈ハ唯一時之ヲ發スルコトアリ或ハ數時、數日、加之數週ニ亘ル者アリ患者ハ恰モ酩酊セル

他覺症候

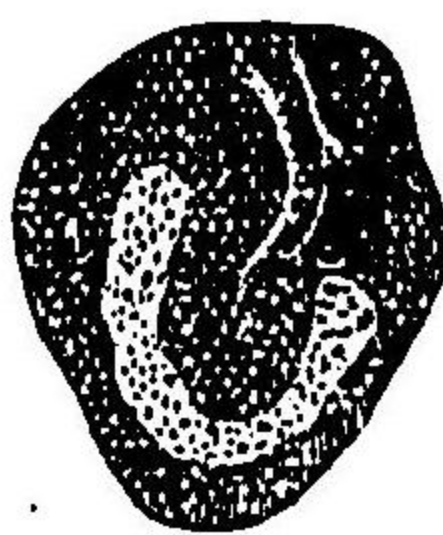
カ如キ感ヲ呈シ時トノ嘔吐ヲ供フ者アリ
 記憶乏弱ハ鼻性精神機能不調 *Aprosodia nasalis* ニ於ケルカ如ク頗ル多ク實驗スル處ニシテ
 爲メニ痴呆狀トナル者決シテ稀ナラストス
 [他覺症候]ノ重ナル者ハ鼓膜面ノ變常及ヒ聽診的變常ニシテ鼓膜面ノ變常ハ溷濁、肥
 厚、加爾基變性、羸瘦、牽縮、圓錐形光體變常等ノ現症ヲ呈スル者ナリ
 溷濁 *Turbiditas* ハ濃薄、廣狹種々ニシテ或ハ全鼓膜面ニ現ハレ或ハ一局部ニ現ハレ或ハ正シク
 線狀ヲ呈シ或ハ不正ノ斑狀、點狀等ヲ呈スル者アリ
 輕度ノ溷濁ハ唯僅ニ鼓膜ノ透明ヲ失スルニ止マントモ高度ノ溷濁ハ鼓膜乳白色ヲ呈スルニ
 至ル者ナリ
 老人ニ於テハ眼ノ老人弓 *Senilis* ニ於ケルカ如ク鼓膜ニモ亦種々ノ溷濁ヲ生スルヲ以
 テ之ヲ區別スルコト必用ナリトス
 肥厚 *Verdickung* ハ多クハ全鼓膜面ニ來リ溷濁若クハ加爾基變性ヲ供フ者多シトス
 加爾基變性 *Kalkablagerung* ハ鼓膜ノ組織變性ノ主ナル者ニシテ腎臟形、圓形等ヲナシテ頗
 ル大部ニ現ハル、者アリ或ハ點狀、斑狀トナリテ小部分ニ現ハル、者アリ

圖六十五第



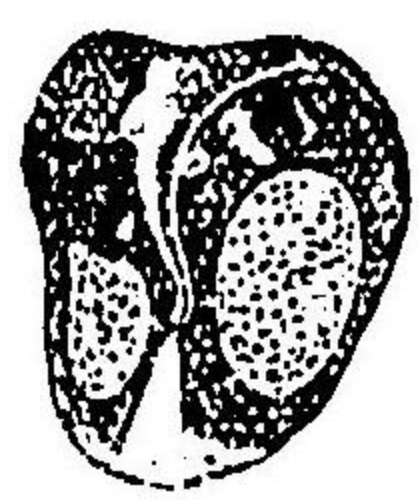
鼓膜後界ノ溷濁線

圖七十五第



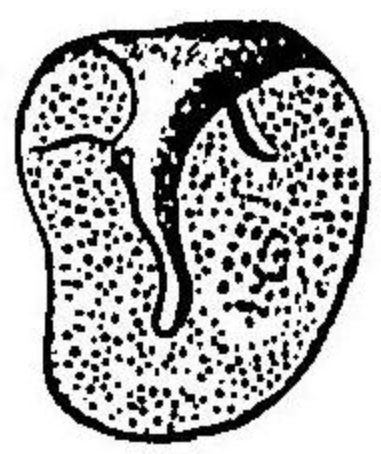
鼓膜ノ腎臟形加爾基變性

圖八十五第



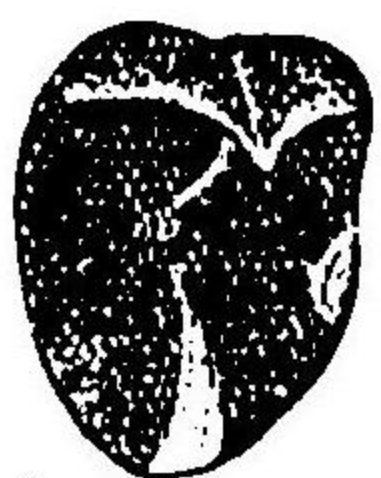
鼓膜ノ圓形加爾基變性

圖九十五第



鼓膜羸瘦

圖十六第



鼓膜牽縮

羸瘦 *Atrophic* スルハ鼓膜面帶黃色若クハ帶紅色ヲ現ハシ全鼓膜面ト鼓室岬ト癒着スル者
 ノ如キハ黃色ニシテ羊皮紙狀ヲ呈スルニ至ル者ナリ
 牽縮 *Einziehung* ハ歐氏管及ヒ鼓膜緊張筋ノ變狀ニ關スル者ニシテ爲メニ槌骨ノ短縮スルニ因

鼓室ノ疾病

聽診的變常

經過及豫後

ル者ナリ又局部崩壞ノ爲メニ牽縮ヲ來スコアリ
 圓錐形光體 *Lichtkegel* ハ全ク缺乏シ、複生シ或ハ形狀及ヒ位置ヲ變スル者ナリ其形狀ハ線
 狀、點狀、圓形等ヲ呈シ其位置ハ上界部中央其他諸部ニ存シ其複生セル者ハ二箇乃至三箇散
 在スルヲ見ル者トス是レ鼓膜組織ノ小變性及ヒ膨隆度ノ小變異ニ外ナラス
 聽診的變常ハ歐氏管ノ變常ト鼓室内病的變常トニ因スル者ニシテ歐氏管狹窄シ鼓室内ニ滲
 出物アルキハ通氣の聽診上細微吹音 *Feinbläser Geräusch* (フツツ、ピチチ) 及ヒ水泡音
Rasseleräusch (ブルル) 等ヲ聽取スル者ナリ
 乾性慢性中耳炎ニ於テハ聽診上別ニ水泡音ヲ聽カス時トノ細微吹音ヲ聽クコアリ
 [經過及豫後] 經過ハ通常緩慢潜伏性ニ進行スレモ稀ニハ迅速ノ經過ヲ取リテ高度ノ
 聽力損害ヲ來ス者アリヘーチンゲル氏 *Häufiger* ハ一患者健全ノ聽力ヲ保持セル者慢性加
 答兒性中耳炎ニ罹リ其聽力 $\frac{0}{200}$ ニ達セシ者ヲ實驗シ死後剖檢セシニ小聽骨ノ硬變及ヒ強
 直セルヲ見タリト云フ
 又此症ハ氣候ノ變換、感冒其他ノ疾病ニ由テ再發シ易ク一治一發終年全治セスシテ經過ス
 ル者アリ

鼻咽腔及ヒ扁桃腺ノ疾病ハ此症ノ經過ニ非常ノ關係ヲ有スル者ニシテ此等ノ諸病ヲ根治セ
 サレハ到底全治スルノ期アル者ニアラス
 炎性分泌物稀薄ニシテ吸収シ易キ者ハ適當ノ處置ニ由テ數週、數月ノ後治癒シテ復タ再發
 セサル者ナレモ分泌物粘稠ニシテ膠様ナル者ニ於テハ吸收頗ル困難ニ一時快癒セルカ如
 キモ動モスレハ再發シ易キ者トス
 豫後ハ耳鳴及ヒ重聽ノ状態ニ關係スルコト大ナリトス即チ耳鳴及ヒ重聽ハ永年既ニ之ヲ發ス
 ルヤ、持續性ナルヤ、間歇性ナルヤニ由テ之ヲ定ムルコトヲ得ヘシ例之經過短キ者及ヒ間歇性
 ノ者ハ豫後從テ良ニシテ經過長キ者及ヒ持續性ノ者ハ豫後不良ナリ
 鼓膜面變常ノ度多キ者ハ豫後從テ佳良ナラス又聽診的細微吹音ヲ發スル者ハ佳良ニシテ大
 水泡音ヲ發スル者ハ佳良ナラス
 骨質傳達ノ微弱ナル者ハ神經系ニ多少ノ障害ヲ及ホセシニシテ豫後佳良ナラスル_ーゼ氏ハ
 高音聽取力ノ缺乏セル者ハ聽神經ノ障害アルニ由ルモノナレハ豫後不良ナリト云ヘリ
 其他遺傳性、體質虛弱、老人、飲酒、喫煙、放歌、通氣法ニ由テ聽力増加セサル者、聽力ニ種々
 ノ變異ヲ生セサル等ハ皆豫後不良ニ屬スル者ナリ

療法

〔療法〕先ツ氣候其他ノ豫防法ニ注意スルヲ要ス即チ感冒ヲ防キ全身諸病殊ニ鼻咽喉。歐氏管等ノ諸病ニ注意スル事甚タ必要ナリ往々唯局處療法ノミヲ施行シ鼻咽喉ノ諸病ニ注目セサリシ者或ル場合ヨリ偶然是等ノ諸病ヲ處置シ意外ニ迅速ナル良成績ヲ得ルコトアルハ吾人ノ日常實驗スル處ナリ

土地ハ屢々轉移シ殊ニ山中ニ遊フヲ佳トス日光及ヒ箱根山中ノ如キ頗ル適當ノ地ナル可シウルバンチツチ氏カ處置セシ數名ノ患者ハ轉地療法ニ由テ佳候ヲ呈セリト云フ

局處療法ノ主ナル者ハ外聽道空氣ノ稀釋及稠密法、通氣法、「ブーシー」用法、鼓室内藥液及ヒ蒸氣吹送法等ナリ

外聽道ノ空氣稀釋及ヒ稠密法ハ即チ鼓膜ヨリ鼓室内ニ運動ヲ傳フルニ從テ鼓室内滲出物ノ移動及ヒ小聽骨關節ノ運動ヲ喚起スル者ニシテ間々著效ヲ奏スルコトアリ之ニハ通常テルスタンチ氏及キルヒチル氏ノ空氣稀釋裝置ヲ用ユ

通氣法ハ此症ニ對シ必須不可缺ノ方法ニシテ「カテーテル」其他種々ノ通氣裝置ヲ用ユ是レ歐氏管ヲ開通シ鼓室粘膜炎ヲ刺戟シ以テ鼓室内滲出物ノ吸收及ヒ排泄ヲ催進スル處ノ者ナリ故ニ「ブーシー」用法ト併用スルハ其效用一層顯著ナル者トス通氣法ハ初期一日一回末期

ニハ隔日若クハ二日ヲ隔テ、之ヲ施行ス可シ而ノ初期ハ徐々ニ漸々強力ヲ以テ空氣ヲ吹入スルヲ佳トス右ノ順序ヲ以テ通氣法ヲ行フ一週間尙ホ毫モ水泡音減少セス聽力恢復セサル者ハ「カテーテル」ニ由テ藥液及ヒ蒸氣ヲ吹送ス可シ藥液ハ二%鹽酸加里液〇、二乃至〇、五%硫酸亞鉛液ニ乃至四%碳酸那篤留膜〇、五乃至二%鹽酸安母尼亞等ヲ用ユ而ノ以上ノ藥液ヲ注入スルニハ通常八乃至十滴ヲ過ク可ラス然ラサレハ鼓室ノ炎症ヲ喚起シ往々不測ノ困難ヲ來ス者ナレハナリ

蒸氣ハレウイン氏ノ裝置ニ由テ安母尼亞蒸氣ヲ吹送シ或ハ單ニ的列並底油蒸氣ヲ吹送スル等ナリ此等ノ蒸氣ハ歐氏管ヲ開通シ適宜ニ鼓室粘膜炎ヲ刺戟シ小聽骨關節ノ運動ヲ喚起スル等ノ效用アル者ニシテ種々ノ方法ニ由テ寸效ナキ者蒸氣吹送法ノ後意外ノ良成績ヲ現ハスコトハ吾人ノ日常實驗スル處ナリ

以上述ル處ノ種々ノ方法ヲ施行スルモ依然トシテ諸症狀ノ減退セサル者ハ鼓膜穿開術ヲ行ヒ以テ鼓室内滲出物ヲ排除ス可シ

乾性ノ炎症ニシテ鼓膜著シク牽縮シ鼓室硬變ニ赴カントスル者ニハルーゼ氏ノ壓迫消息子 Drucksonde ヲ以テ槌骨短突起部ヲ壓迫的ニ刺戟シ效ヲ奏スルコトアリ其法一日一回耳鏡ヲ通

シテ之ヲ送入シ徐々ニ刺戟スルニアリ
予ハ終リニ臨ミ恩師キルヒチル博士ノ施行セル硝酸銀液注入法ヲ畧記ス可シ即チ第一日ハ
〇、一%ノ溶液ヲ注入シ漸々増量シテ毫モ疼痛等ヲ發セサル者ハ二%ニ達ス可シ而シテ其量
ハ五乃至八滴ヲ過ク可ラス
予カ實驗セル本病患者ノ病症二三ヲ左ニ畧記シ參考ニ供ス可シ此症モ耳病中頗ル多キヲ以
テナリ

第一患者

第一患者 T. M. 十六年、農女

〔診斷〕 左右慢性加答兒性中耳炎兼慢性加答兒性鼻炎

〔既往症〕 四年前右耳重聽耳鳴ヲ來シ間モナク左耳ニ同様ノ症狀ヲ及ホシタリ耳漏、
癢痒、疼痛等ナシ 六歳麻疹ヲ患ヒ十一歳關節病ヲ患ヒシ他、重病ニ罹リシコ
ナシ 鼻腔時々閉塞スレテ咽頭ニハ異常ナシ廿六年十月十五日來院乞治

〔現症〕 時儀聽力左右各 $\frac{5}{200}$

骨質傳達左右存スレテ稍、弱シ

鼓膜稍、牽縮シテ且ツ一樣ニ潤濁ス 癢着ハナシ

鼻甲介粘膜赤色腫脹ス鼻中隔ノ形狀別ニ異常ナシ

リンネ氏試驗 一、二

〔經過及處置〕 $\frac{51}{X}$ 「カテーテリスムス」千倍昇汞水ニテ鼻腔内拭布後「デルマトー
ルホーラツキス」吹入

沃度鐵舍利別 四、〇 沃度加里 〇、六 清水 二〇〇、〇

右一日三次二日分服

$\frac{16}{X}$ ヨリ $\frac{23}{X}$ 迄同前處置

$\frac{24}{X}$ 右 $\frac{12}{200}$ 左 $\frac{8}{200}$ トナル同前處置

$\frac{26}{X}$ 同前處置 鹽酸必魯加兒必涅 〇、〇〇五 爲丸臨臥頓服

$\frac{28}{X}$ 同前處置ノ他安母尼亞蒸氣ヲ鼓室内ニ吹送ス 前九頓服

$\frac{29}{X}$ ヨリ $\frac{9}{XI}$ 迄頓服丸ヲ止メタルノ他同前處置 右 $\frac{18}{200}$ 左 $\frac{70}{200}$ トナル患
者大ニ喜悅ス

第二患者

第二患者 Y. O. 十二年、小學生

〔診斷〕慢性加答兒性中耳炎

〔既往症〕三歳右耳漏重聽ヲ來シテ左耳ニモ同症ヲ發セシカ間モナク癒ヘタリ八歳

右耳内ニ腫物ヲ生セシカ暫時ニシテ治愈シ本年復ヒ之ヲ生セリ

患者幼少ノ時麻疹及ヒ頭瘡ヲ患ヒ爾來重聽益々加ハレリ 咽頭異常ナキモ常

ニ鼻汁ヲ多ク排泄ス廿六年七月五日來院乞治

〔現症〕時儀聽力左右

i.c. / 200

骨質傳達左右存在スレモ右側稍亢進ス

鼓膜ハ潤濁シテ圓錐形光體ヲ消失シ全體肥厚ス

リンネ氏試驗 一R

〔經過及處置〕5/200 「カテーテリスムス」 耳浴法

幾那丁幾 六、〇 番木鱈丁幾 一、〇 沃度加里 二、〇

清水 二〇〇、〇

右一日三次二分服

7/VII ヨリ 20/VII 迄同前處置 時儀聽力右 2/200 左 4/200 トナル

22/VII 鼓室内蒸氣吹送 加答兒性咽頭炎アルヲ以テ三%硝酸銀液塗布

52/VII 迄同前處置 時儀聽力右 4/200 左 8/200 トナル

31/VII 迄同前處置 時儀聽力右 6/200 左 11/200 トナル

2/VIII 耳浴法ヲ止ム右 7/200 左 11/200

4/VIII 二%鹽酸加里水六滴ヲ鼓室内ニ注入ス其他ノ處置ハ同前

7/VIII 鹽酸加里水注入ヲ止メ内按摩法ヲ行フ

時儀聽力右 12/200 左 31/200

24/VIII 引續キ同前處置諸症大ニ輕快ス 時儀聽力右 21/200 左 20/200

31/VIII 引續キ同前處置 時儀聽力右 13/200 左 30/200

12/IX 迄引續キ同前處置 時儀聽力右 14/200 左 84/200 トナル

第三患者

此日海水浴行ヲ命ス

第三患者 S. K. 十五年、醫療器械師

〔診斷〕左右慢性加答兒性中耳炎

〔既往症〕患者生來虛弱ニシテ動モスレハ感冒ニ罹リ易シ幼稚ノ頃耳漏ヲ患ヒタリシカ暫時ニシテ全治セリ然ルニ近時ニ至リ不知不識聽力漸々鈍麻セルヲ覺フ現時訴フル處ハ耳内壓重ノ感アリ重聽ハ左右殆ント同等ニシテ通常言語ヲ聽取シ難キヲ往々之アリト云フ廿六年一月九日來院乞治

〔現症〕時儀聽力右 $\frac{ic}{200}$ 左 $\frac{7}{200}$

骨質傳達左右同等ニシテ存在ス

リンチ氏試驗 — R.

鼓膜ハ潤濁シ且ツ牽縮ス

〔經過及處置〕 $\frac{9}{1}$ 「カテーテリスムス」 耳浴法

沃度鐵舍利別 四、〇 清水 一五〇、〇

右一日三次二分服

第四患者

第四患者 H. K. 四十三年、官吏

〔診斷〕慢性加答兒性中耳炎兼慢性乾性咽頭炎

〔既往症〕廿三年冬感冒ニ罹リ其際一週餘咽頭痛及咳嗽等ヲ發セシカ次テ左右耳鳴ヲ喚起シ耳内稍、疼痛ヲ感シ加之頭重、重聽、記憶力之弱等ヲ續發シ爾來感冒ニ罹ル毎ニ前諸症狀一層増劇ス廿六年二月二十二日來院乞治

〔現症〕時儀聽力右 $\frac{ic}{200}$ 左 $\frac{6}{200}$

$\frac{17}{1}$ I. 迄同前處置ヲ持續セシニ時儀聽力右 $\frac{16}{200}$ 左 $\frac{21}{200}$ トナル

$\frac{19}{1}$ I. 右耳内疼痛ヲ訴フ依テ五%古加乙混溶液點耳 「カテーテリスムス」ヲ中
止ス

$\frac{23}{1}$ I. 右耳内疼痛全ク止ム再ヒ「カテーテリスムス」ヲ施行ス

$\frac{29}{1}$ I. 迄同前處置

II. 時儀聽力右 $\frac{39}{200}$ 左 $\frac{52}{200}$ トナル

骨質傳達存在ス

リンネ氏試験 一R

鼓膜ハ濁著シク肥厚ス

〔經過及處置〕²² II. 「カテーテリスムス」 三% 硝酸銀液咽頭塗布

沃度加里 三、〇 苦味丁幾 三、〇 清水 二〇〇、〇

右一日三回二日分服

鹽酸加里 八、〇 重碳酸那篤留謨 四、〇 清水 二〇〇、〇

右含嗽料

²⁵ II. 迄同前處置

²⁷ II. 同前處置ノ他二%沃度加里液六滴左右鼓室内注入

¹⁷ III. 迄同前處置 時儀聽力右 $\frac{11}{200}$ 左 $\frac{19}{200}$

¹¹ IV. 同前處置ノ他「ブーシー」用法ヲ施ス

¹⁷ IV. 時儀聽力右 $\frac{17}{200}$ 左 $\frac{22}{200}$

第五患者

第五患者 T.M.十五年、藝妓屋

〔診斷〕左右慢性加答兒性中耳炎

〔既往症〕四五年前ヨリ左右殊ニ左耳ニ重聽ヲ來シ絶ヘス耳鳴アリテ蟬鳴ノ如ク鐘鳴

ノ如シト訴フ耳内閉塞ノ感アリ耳漏瘻瘻等ナシ 昨年ヨリ時々鼻腔閉塞スル

トアレハ咽頭及ヒ喉頭病ナシ廿六年十月六日來院乞治

〔現症〕時儀聽力右 $\frac{19}{200}$ 左 $\frac{10}{200}$

骨質傳達ハ左右存在スレハ右側少シク左側ヨリ強シ

リンネ氏試験ハ 一R

鼓膜ハ少シク濁且ツ牽縮ス

〔經過及處置〕⁶ X. 「カテーテリスムス」 鼻腔ハ千倍昇汞水拭布後「デルマトール」ボ

ウラツキス」吹送

沃度鐵舍利別 五、〇 清水 二〇〇、〇

右一日三回二日分服

⁷ X. 同前處置ノ他内按摩法 時儀聽力右 $\frac{27}{200}$ 左 $\frac{22}{200}$ トナリ患者大ニ其奏

第六患者

效迅速ナルニ驚キタリ

9/X. 同前處置ノ他安母尼亞蒸氣ヲ鼓室内ニ吹送ス

11/X. 同前處置

13/X. 同前處置 耳鳴全ク止ミ聽力大ニ増加セルヲ訴フ

第六患者 R. M. 三十六年、質商

〔診斷〕右慢性加答兒性中耳炎兼顆粒性咽頭炎

〔既往症〕本月初メヨリ感冒ニ罹リ右耳騒鳴重聽アリ咽頭癢痒ノ感アリ醫療ヲ乞フモ

治セス荏苒今日ニ至ル廿六年一月十二日來院乞治

〔現症〕時儀聽力右 $\frac{7}{200}$ 左 $\frac{72}{200}$

骨質傳達右側充進

リンネ氏試驗ハ一R.

鼓膜ハ潤濁シ稍充血セルカ如シ圓錐形光體現著ナラス

〔經過及處置〕12/I. 「カテーテリスムス」 五%硝酸銀液咽頭塗布

第七患者

第七患者 M. M. 三十四年、農

〔診斷〕左右慢性加答兒性中耳炎兼鼻茸

〔既往症〕十二歳ノ頃ヨリ左右重聽アリ殊ニ右耳ニ耳漏アリタリ而シテ耳漏ハ暫時ニシ

鹽酸加里 二、五 苦味丁幾 三、〇 清水 二〇〇、〇

右一日三回二分服

沃度加里 沃度丁幾 各二、〇 食鹽 一、五 清水 四〇〇、〇

右合嗽料

14/I. 「カテーテリスムス」 沃度石炭酸偏里設林咽頭塗布

耳浴法

18/I. 此日右耳少シク疼痛ヲ發シ排膿ヲ始ム

稀薄石炭酸水洗耳 「カテーテリスムス」ヲ中止ス

21/I. 迄同前處置 排膿及ヒ疼痛止ム

27/200 咽頭及ヒ右耳ノ諸症狀大ニ恢復セルモ聽力ハ別ニ増加セルヲ認メス

テ止ミタレレ耳鳴ヲ加ヘ重聽ハ益々増加シ感冒スル毎ニ増劇ス本年三月感冒ニ罹リ鼻漏、咽頭痛等ヲ發セリ 又幼時ヨリ鼻腔閉塞ヲ有シ今ニ止マス嗅覺消失、鼻聲アリ鼻漏臭氣ナシ記憶乏弱、眩暈、神思不振等アリ 梅毒及ヒ熱病ヲ患ヒシコナシ廿六年九月廿六日來院乞治

〔現症〕 時儀聽力ハ大聲談話

骨質傳達ハ左右存在スレモ稍弱シ

リンネ氏試驗 +R

鼓膜ハ濃灰白色甚シク肥厚ス運動ハ甚々微弱ナリ

鼻腔内ニハ左右鼻茸ヲ以テ填充シ通氣甚々不充分ナリ

〔經過及處置〕 26 IX. 先ツ鼻腔内ノ茸ヲ電氣蹄係ヲ以テ燒去綿球「タンボン」

27 IX. 食鹽微温水洗鼻

28 IX. 同前處置

30 IX. 「カテーテリスムス」

急性化膿性中耳炎

病原

5. X. 迄同前處置 時儀聽力右 $\frac{9}{200}$ 左 $\frac{12}{200}$ トナル其他諸症狀大ニ緩解ス

第六章 急性化膿性中耳炎 *Otitis media purulentata acuta.*

(*Die acute eitrige Paukenentzündung*)

急性化膿性中耳炎ハシワルゼ氏ガ二十年間自家ノ「クリニク」ニ於テ得タル統計ニ依レハ全耳病ノ九、八%ニシテ七九、六%ハ偏側、二〇、四%ハ兩側ナリシト云フ又ニウヨークノクナツプ氏ノ統計ニテハ全耳病ノ六、五三%ナリ

年齢ニテハ十歳以下ノ小兒殊ニ腺病質ノ者ニ多シ 時候ハ春冬ニ於テ夏秋ヨリ頗ル多シ

病原ニ就テハ近年ニ至リ病理解剖家及ヒ耳科學者等ノ丹精ナル研究ニ由リテ病原小有機體即チ醗膿「スタヒロコクケン」、「ストレプトコクケン」及ヒ「デプロコクケン」等ニ因スル者ナルヲ疑フ可ラザルニ至レリ一千八百八十九年ツアウフル *Zaufal* ハアヘルマン *Haber mann* モース *Moss* シャイムエ *Schäube* 諸氏ノ討究ニ由リ益々之ヲ確實ナラシメタリ殊ニチツテル氏 *Neter* ハ小兒ノ鼓室滲出物ニ就キ詳シク微生物學上ノ試験ヲナシ之ヲ證明セリツアウフア

鼓室ノ疾病

ル氏ハ千八百八十七年急性化膿性中耳炎ノ分泌物中ヨリフリードレンデル氏「バチルレン」ヲ發見シ之ヲ「メールシワイン」ノ鼓室内ニ移植シテ良成績ヲ得又爲メニ肺炎ヲ續發セシ者ヲ實驗セリ

原因

〔原因〕ハ病原小有機體ニシテ鼓室内急慢加答兒及ビ呼吸器消化器ノ上部等ニ疾病アルモノハ能ク微菌ノ培養基トナリテ病勢ヲ助クルモノナリ又種々ノ傳染病モ傳染毒ヲ輸送シテ本病ヲ喚起シ易シ殊ニ窒扶斯 Typhus 猩紅疹 *Scharlach* 實扶的里亞 *Diphtheritis* ニ於テ劇シキモノナリ麻疹 *Masern* 疫咳 *Perussis* 耳下腺炎 *Parotitis* 等モ亦本病ニ兼テ迷路障害ヲ合併スルコトアリ

流行性感冒 *Influenza* ニ由テ本病ヲ發スルコトハ千八百八十九年ヨリ千八百九十年ノ大流行ニ際シ予ハ獨逸國ニ於テ頗ル多ク本病ヲ合併セルモノヲ實驗シ又數多諸家ノ報告ニ接セリ而シテ流行性感冒ニ由テ發スルモノハトラウトマン氏 *Trautmann* ノ報告セシ重症實扶的里シワルゼ氏 *Schwarze* ガ報告セシブライト氏病ニ合併セル急性化膿性中耳炎ニ於ケルガ如ク出血性ノモノヲ屢々實驗シタリ

肺炎 *Pneumonie* モ亦急性化膿性中耳炎ヲ合併スル者ニシテ鼓室内滲出物ヨリフレンケル氏

症候

其他耳内冷水注入、鼻腔内強洗等ニ由テ之ヲ發スル者ナリ
〔症候〕ハ疼痛、耳鳴、眩暈、發熱、聽力減損等ニシテ又顔面神經麻痺其他腦患ノ症狀ヲ起スコトアリ殊ニ小兒ニ於テハ屢々嘔吐、譫語、抽搐等ヲ發シ耳内ヲ検査セシ後ニアラザレバ腦症ト誤マルコト屢々之アリ

疼痛

疼痛 *Schmerz* ハ刺スガ如ク衝クガ如ク捻子ルガ如シ而シテ屢々三叉神經及ヒ頸神經叢ノ枝極ニ波及ス此症狀ハ通常夜間危篤 *Ercebatio* ニシテ晝間輕減 *Remissio* スル者トス

耳鳴

耳鳴 *Ohrsausen* ハ心跳鼓動ト併行スルガ如ク其性質ハ「シウウ」*Zischen*「サア」*Sa*「サツ」*Sausend*「トツ」*Pulsierend* 等ニシテ間歇性及ビ持續性等ハ滲出物ノ多少ニ由テ

眩暈

然ル者トス
眩暈 *Schwindel* ハ少シク年長ノ小兒ニ於テハ既ニ之ヲ訴フル所ニシテ炎症ノ初期既ニ之ヲ

發熱

來ス者ナリ
發熱 *Fieber* ハ頗ル高度ニ達シ間々攝氏四十度ニ達スル者アリシワルゼ氏ハ一小兒ノ四十度二分ノ熱ヲ發シ八日間稽留セル者良好ノ經過ヲ以テ治癒セシ者ヲ實驗シタリト云フ高度ノ

發熱ト共ニ來ル症狀ハ昏睡 Sopor 呻吟 Stöhnen 譫語 Delirium 等ニシテ其病狀頗ル危險ナルガ如ク能ク耳内ヲ検査セシ後ニアラザレバ之ガ診斷豫後ヲ誤ルコト稀ナラズトス殊ニ他ノ諸病ト合併スルトキハ種々ノ危篤ナル症狀ハ耳病ノ爲メニ發スルヤ他病ノ爲メニ發スルヤヲ鑑別スルコト困難ナル者ニシテ治療法及ビ豫後ニ於テ重大ナル關係ヲ有スル者ナリ耳科學ノ發達尙ホ幼稚ナル今日ニ於テハ蓋シ此過失頗ル多カル可シ

ヒックス氏 Hicks ハ千八百八十年 (Amer. Journal of otolog. I. p. 205) 一患者ノ急性化膿性中耳炎ニ罹リ瞳孔散大、下肢ノ瘦削及不全麻痺ヲ起セシガ鼓膜穿開術ニ由テ平癒セシ者ヲ報告セリ

聽力減損

聽力減損 Gehörschwäche ハ鼓室粘膜炎腫脹ノ度、滲出物ノ多少、歐氏管ノ開通スルヤ否ヤ等ニ關係スル者ニシテ以上ノ諸障害愈、増進スルキハ聽力損害愈、甚シキ者トス

顔面神經麻痺

顔面神經麻痺 Lahmung des N. facialis ハ諸家ノ屢、報道セル所ニシテフアルロビー氏管ノ先天性種子膜解截アリテ神經鞘ニ炎症ヲ及ボスカ或ハ膿液ノ壓迫ニ由テ所謂壓迫麻痺 Compressionlahmung ヲ發スルモノナル可シトノ説ナリ

他覺症候ハ耳圍淋巴腺ノ腫脹、咽頭粘膜炎腫脹、乳嚙突起部ノ知覺過敏、外聽道硬骨部ノ充

診斷

血(殊ニ鼓膜ニ近接スル部ニ於テ著シ)等ニシテ最モ著シキハ鼓膜ノ變常ナリ即チ鼓膜ハ光澤ヲ失シテ溷濁シ末期ニ至レバ全面若クハ局部發赤シテ外方ニ膨隆シ間、膿汁ノ浸潤スルヲ見ルコトアリ

又急性ノ經過中往々鼓膜ノ穿孔スル者アリ然ルキハ外聽道ニ膿汁ノ排泄增多スルヲ以テ察知ス可シ

〔診斷〕鼓膜未ダ穿孔セザル者ニ於テハ間、診斷ニ困ムコトアリ殊ニ未熟ノ者ニ於テハ鼓膜ニ人工的裂口ヲ作ルノ後始メテ該症タルヲ知ルコト稀ナラズ小兒ニ於テハ神思常ニ不穩ニシテ頭部運動、嚔下、呼吸等ノ際ニ疼痛ヲ發スル如キ狀ヲ呈ス又種々ノ腦症狀ヲ現ハシ神經中樞ノ疾病ト誤認スル者少ナカラズ殊ニ他ノ諸病ヲ合併スル者例之ストレットクアイゼン氏 Strecker フォントレールチ氏 Von Trösch ウイデルホルフ氏 Wiedershofer 等ガ報道セシ腦肺炎 Gehirnhnemonie ニ鼓室ノ化膿性炎症ヲ兼スル者ノ如キハ何レカ本症ニシテ何レノ疾病ニ因スル症狀ナルヤヲ判別スルニ苦ム者多シトス

未ダ穿孔セザル鼓膜ニ就テ鼓室内ニ膿汁ノ滲蓄スルヲ鑑別スル簡單ナル方法ハ鼓膜後界ノ膨隆ト其膨隆ノ爲メニ槌骨柄ノ壓迫セラル、コト是ナリ

經過

骨質傳達ハ病側亢進シリントン氏試驗ハ一ニ呈ス
〔經過〕發熱、疼痛期ノ長短ハ種々一様ナラズト雖モ通常三乃至五日間持續シ鼓膜穿孔ス
ルカ或ハ人工的穿開術ヲ施スルハ充血及疼痛ハ著シク緩解スル者トス

鼓膜穿孔ハ通常發病後第三日ニ之ヲ發スル者ニシテ其部位多クハ前下界(時トシテ後下界、

圖一十六第



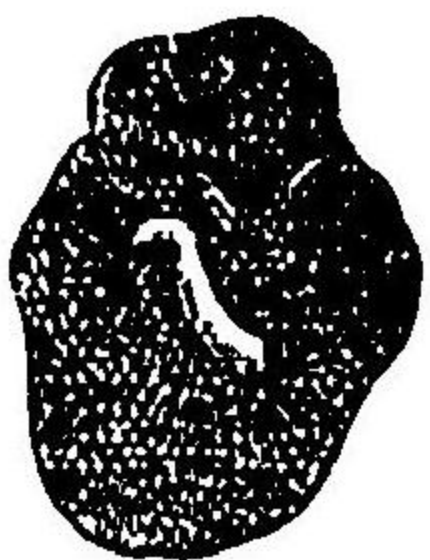
鼓膜中央
部穿孔

中央部甚ダ稀ニスラプテル氏膜ノ上縁ニ生ズルヲ見ル
コアリ)ナリ又既ニ數回ノ疾病ニ罹リテ鼓膜肥厚セル
者ニ於テハ時トシテ二三週ノ永キ疼痛ヲ持續シ穿孔セ
ザル者アリ

鼓膜穿孔ノ再ビ閉鎖スルニ至ルハ通常一週乃至二週ヲ要シ膿汁ノ閉止モ亦殆ンド時日ヲ同
フス最モ佳良ノ經過ヲ取ル者ハ三四日ニノ諸症狀全快シ膿汁ノ分泌ヲ閉止スルモノナリ
鼓膜穿孔ノ閉鎖セシ後ハ初期鼓膜潤濁灰白色ヲ呈シ穿孔部ハ濃灰白色トナリ幽微ノ痕痕ヲ
殘ス時トシテ鼓膜ノ血管充漲セル者アリ以上ノ現症ハ時ヲ經ルニ從テ漸々消失シ毫モ異常
ヲ止メザルニ至ル者アリ又屢慢性ノ經過ヲ取り鼓膜ノ溶解、肥厚、菲薄、加爾基變性等ヲ來
ス者アリ

豫後

圖二十六第



スラプテル
氏膜部穿孔

ノ差異ヲ生ズル者トス

又死亡ハシワルゼ氏ニ依レバ二%ナリト云フ是レ主トシテ鼓膜穿孔ノ時期後ル、者ニ多シ
トス然レ共亦二三日ニシテ死亡ノ轉歸ヲ取ル者ナシトセズウルパンチ氏ノ一患者ハ生
來健全ナリシガ發病後第三日ニシテ死セリト云フ其病歴經過左ノ如シ

一男子七十三歳

患者平素健全曾テ大患ニ罹リシコナシ或ル日寒風颯々衝肌ノ候ヲ冒シテ散歩セシニ
左耳ニ疼痛ヲ發シ次デ血液膿様ノ液ヲ漏セシカ三十六時ノ後、嘔吐、失神、右肢不全
麻痺等ヲ來シ發病後五十六時間ニシテ鬼籍ニ上レリ患者ハ生來耳病、腦病ヲ患ヒタ
ルコナカリシト云フ

千八百三十一年ウイリセル氏 *Winnell* モ亦急性化膿性中耳炎ニ依テ急速ナル死亡轉歸ヲ取

〔豫後〕シワルゼ氏ニ由レバ患者健全ニシテ發病ノ初

期適當ノ處置ヲ施スルハ四週乃至六週ニシテ聽力復故
ニ至ル者該患者ノ七十%ニ居ルト云フ然レモ患者不健
康不攝生ニシテ不適當ノ處置ヲナスルハ其%數ニ非常

療法

リシ一患者ヲ報告セリ

〔療法〕先ヅ身體ヲ安靜ニシ顛顛部ニ水蛭四五條ヲ貼シ或ハ水罨法ヲ施シ下劑ヲ投ジテ通利ヲ佳良ナラシム可シ

疼痛ヲ鎮ムルニハホリゼル氏ハ歐氏管内ニ微温湯ヲ注入シローレル氏ハ二%ノ亞篤羅必涅古加乙涅二三滴ヲ點耳シベンデラク、ヘウットソン氏 *Bunkhach-Hewison* ハ五乃至十%ノ石炭酸脲里設林ヲ點耳スルヲ稱用ス予ハ三%ノ石炭酸古加乙涅水三四滴ヲ點耳シテ屢著效ヲ奏セシコアリ又ウエベル、リール氏ハ的列並底油十乃至二十滴ヲ「カプセル」トナシ晝間三箇夜間六箇ヲ與フ可シト云ヘリ

膿汁ヲ分泌スル者ニ於テハ耳内ヲ清潔ニシ慢性ニ陥キラシメザルヲ要ス

發病後三四日ヲ經ルモ諸症狀毫モ減退セズ益々増進スル者ハ一般ノ規則ニ從テ鼓膜後下界ニ穿開術ヲ行ヒ以テ膿汁ノ排泄ヲ佳良ナラシムルヲ要ス

内服ニハシツキストン氏 *Sutton* ハアコン氏 *Bacon* 等ハ硫酸石灰〇、一乃至〇、五ヲ一日數回服用セシメシワルゼ氏 *Schwartz* ハ劇シキ急性化膿性中耳炎ニハ諸藥劑ノ内服及ビ注射ヲ流延スルニ至ル迄持長スルコトヲ稱用ス

鼓膜穿開術ヲ行ヒシ後ハ先ヅ鼻咽腔ヲ清潔ニシ次デ「カテーテル」通氣法ヲ行ヒ以テ四分ノ三%ノ食鹽溶液或ハ二乃至三%ノ硼酸微温湯ヲ以テ「カテーテル」ヲ通ジテ鼓室内ヲ洗滌シブルンス氏綿ニ無水亞爾爾保爾ヲ浸シテ良ク外聽道及ビ鼓膜ヲ清拭シ「ヨドール」、沃度仿謨、アリストール、硼酸等ノ極細末ヲ撒布ス可シ

第一患者 J. J. 男十九年、學生

〔診斷〕急性化膿性中耳炎

〔既往症〕患者生來強健ナラズト雖モ曾テ大患ニ罹リシコトナシ然ルニ明治二十六年二月三十日突然左耳ニ劇シキ疼痛ヲ發シ次デ稍々排膿ヲ來シ聽力モ亦大ニ減損ス依テ四月三日東京病院耳鼻咽喉科ニ來リ治ヲ乞フ

〔現症〕左耳耳後淋巴腺腫脹、乳嚙突起部知覺過敏、鼓膜及ビ外聽道硬骨部發赤

骨質傳達 病側亢進

リンネ氏試驗 病側一々

聽力 病側 $\frac{1}{200}$

圓錐形光體消失ス

（経過及處置）
3/IV. 七%石炭酸福里設林點耳

硫酸麻痺涅矢亞 二五、〇 苦味丁幾 二、〇 清水 二〇〇、〇

右一日三回二日分服

4/IV. 石炭酸古加乙涅溶液點耳

5/IV. 疼痛尙ホ未ダ去ラス安眠ヲ得スト訴フ由テ後下界ニ鼓膜穿開術ヲ施セシ

ニ排膿頗ル多ク疼痛速ニ減殺ス左ノ處方ニ轉ズ

稀鹽酸 一、〇 百弗聖 二、〇 單舍利別 八、〇 水 二〇〇、〇

右一日三回二日分服

15/IV. 迄毎日耳内ヲ洗滌シ「デルマトール」硼酸末ヲ撒布ス穿開口ハ癒合セリ

17/IV. 再ビ耳内疼痛ヲ發シテ安眠ヲ妨クルニ至ル由テ復タ鼓膜穿開術ヲ施セリ

18/IV. 疼痛減少シ排膿稍著明ナリ

20/IV. 排膿殆ンド止ム「カテーテル」通氣法ヲ施ス

21/IV. 穿開口全ク癒合シ疼痛ナク神思爽快ナリト訴フ

聽力ハ $\frac{32}{200}$ トナリ圓錐形光體現出ス

1/V. 聽力殆ンド通常トナル

右患者ハ以上記スルガ如ク頗ル頑固ナル經過ニシテ再度ノ穿開術ヲ要スルニ至リシ者遂ニ治癒シテ後患ナキニ至ルヲ以テモ鼓膜穿開術ノ必要ニシテ恐ルヘキ者ニアラザルヲ知ルニ足ル可シ

第二患者 M. T. 三十一年、醫師

（診斷）急性化膿性中耳炎

（既往症）性來健全曾テ鼻腔纖維腫ヲ患ヒ予ノ手術ヲ乞ヒシ他、著明ノ疾病ニ罹リシヲナシ然ルニ四五日前ヨリ右耳ニ劇痛ヲ發シ漸々増進シテ頭部ニ波及シ前符ノ如キハ睡眠ヲ得ズ加之發熱二十九度ニ昇騰シ聽力ハ全ク缺損スト明治廿六年十一月十日予ガ「クリニック」ニ來リ治ラレタ

（現症）耳翼ノ前後稍、赤色腫脹シ壓スレバ疼痛アリ

鼓膜及外聽道ハ發赤シ處々血膿ヲ以テ被ハル、ヲ見ル

骨質傳達ハ病側亢進

リンネ氏試験ハ病側一ノ

聴力ハ病側 $\frac{0}{200}$

體温三十九度二分

〔經過及處置〕

$\frac{10}{XI}$ 千倍ノ昇汞水ヲ以テ輕ク洗滌シブルンス氏綿ヲ以テ能ク拭布シニ

〇%ノ古加乙涅溶液十滴ヲ點耳シテ七分間放置シ一般ノ方法ニ從テ右鼓膜後下界部ニ穿開術ヲ施シ輕ク歐氏管「カテーテル」ヲ通ジテ鼓室内ノ滲膿ヲ排除シ然ル後石炭酸食鹽溶液ニテ輕ク鼓室内ヲ洗滌シ沃度仿謨「ガーゼ」ヲ外聽道内ニ符入ス

$\frac{11}{XI}$ 昨夜諸症大ニ減退本日體温平常ニ復ス聴力ハ $\frac{6}{200}$ トナル

洗滌「ガーゼ」交換

$\frac{13}{XI}$ 諸症益々恢復

洗滌「ガーゼ」交換

二週間患者自ラ適當ノ處置ヲナス

$\frac{1}{XII}$ 此日患者來院訴フル處ニ由レバ一週前ヨリ排膿全ク止ミ穿開口閉合シ聴

カモ亦大ニ加ハルト

此日聴力ヲ測リシニ $\frac{27}{200}$ ナリシ

第三患者 K. N. 男、三十九年

〔診斷〕 急性化膿性中耳炎

〔既往症〕 生來健全本月上旬頃屢々海水ニ入浴シ耳内ニ水ノ入りシコナカラズ然ル

ニ本月十二日ヨリ頭部ニ波及スル左耳ノ劇痛ヲ發シ夜間安眠ヲ得ズ加之重

聴、耳鳴アリ依テ明治廿六年七月十八日來リ治ヲ乞フ

〔現症〕 鼓膜及ヒ外聽道著シク赤色腫脹シ之ニ觸ル、ニ極メテ過敏ナリ

骨質傳達ハ病側亢進

リンネ氏試験ハ病側一ノ

聴力ハ病側 $\frac{0}{200}$

〔經過及處置〕 $\frac{18}{VII}$ 〇、五%ノ石炭酸水ニテ輕ク洗滌シ五%ノ古加乙涅溶液點耳

規那丁幾 六、〇 菲沃斯丁幾 三、〇 橙皮舍利別 八、〇

水 二〇〇、〇 右一日三回二分服

23/VII 迄以上ノ處置ヲ施スモ病勢容易ニ消退セズ耳内及頭部劇痛ヲ發シ加之發熱シ三十九度ニ達ス依テ法ニ從テ左鼓膜後下界ニ穿開術ヲ施シ輕ク「カテーテル」ヲ通ジテ鼓室内ノ膿汁ヲ排除シ石炭酸食鹽水ニテ鼓室内ヲ洗滌シ沃度仿護「ガーゼ」ヲ挿入ス

24/VII 迄以上ノ處置ヲ施ス
 25/VII 諸症大ニ緩解シ聽力 15/200 トナル

第七章 慢性化膿性中耳炎 *Otitis media purulenta chronica.*

(*Die chronische eitrige Paukenentzündung.*)

慢性化膿性中耳炎ハ耳病中ノ主ナル位置ニ在テ聽力ヲ減損シ近隣諸臟例之頭蓋腔、靜脈竇、迷路、外聽道ノ骨壁等ヲ侵襲シ全身ノ營養ヲ損害シ實ニ頑固忘ム可キノ症トスシワルゼ氏ノ調査ニ由レバ該病ハ全耳病ノ一三、五%ナレ予ノ考ニテハ近時耳科治療法ノ進歩ト共ニ統計上ニ幾分ノ差異ヲ生シタルヤ疑フベカラズ

病原ニ就テハ急性化膿性中耳炎ニ於ケルカ如ク膿膿、コッケン「ナルハ素ヨリナレ」近時ニ至

慢性化膿性中耳炎

病原

リローレル氏等ノ研究ニ由リテ「バチルレン」モ亦存在スルヲ發見セリ例之慢性耳漏ノ分泌物中ヨリ結核微菌ヲ發見セルカ如キハ屢諸家ノ報道セシ處ナリ
 今日迄慢性化膿性中耳炎ノ分泌物中ヨリ諸家ノ發見セシ微菌ハ大凡左ノ如シ
 レエウエンヘルク氏 *Lümburg* ハ千八百八十六年ケツセル氏 *Kessel* ハ千八百八十五年ツニ
 ン氏 *Dunn* ハ千八百八十六年シムモンド氏 *Simmonds* ハ千八百八十七年何レモ橙色膿膿、スタヒロコックス、*Staphylococcus pyogenus aureus* ヲテツテル氏 *Neller* ハ千八百八十八年フレ
 ンケル氏ノ「バチルレン」ラローレル氏 *Koher* ハ千八百八十八年「バクテリン」及ヒ「コッケン」ヲ發見シテ詳シク報道セリ

〔原因〕ハ一般不清潔、急性化膿性中耳炎ノ處置不適當種々ノ局處刺戟、腺病、猩紅疹、室扶斯、麻疹、痘瘡、實扶的里、結核、梅毒、貧血、鼻腔病(殊ニ有臭性鼻炎)、咽喉其他近隣諸臟器ノ疾病等ニ由テ發スル者ニシテ歐洲ニ於テハ猩紅疹、腺病ヲ原因中ノ第一位ニ置クモ日本ニ於テハ猩紅疹稀有ナルガ故ニ之ガ原因トナル者モ從テ稀ナリ予ハ東京ニ於テ一年間唯一人ノ猩紅疹ニ續發スル化膿性中耳炎ヲ見タルノミ
 予カ「クリニク」ニ於テ最も多ク之カ原因トナリタルハ腺病及ヒ鼻咽喉諸病等ナリトス

原因

症候

重聴

耳鳴

疼痛

味覺障害

膿汁

嘔吐
消化不良

咳嗽

痙攣性噴嚏

年齢ニ在テハ大人ヨリ小兒ニ多シ諸家ノ調査ニ依ルニ大人ノ慢性化膿性中耳炎ハ多クハ小兒時ヨリ持久セル者ナリト云フ又富者ノ兒童ヨリハ貧者ノ兒童ニ多シ

〔症候〕自覺症候ノ主ナル者ハ重聴ニシテ其他種々アリ

重聴 *Schwerhörigkeit* ハ通常頗ル高度ナル者ニシテ間時聴力ノ ~~0~~ナル者アリ

耳鳴 *Myrrausen* ヲ發スルコトハ甚ダ少ナク或ハ全ク缺如ス

疼痛 *Schmerz* ハ通常之ナキモ時トシテ頗ル劇烈ニ發スルコトアリ又往々疼痛ノ頭部及三叉

神經ノ經路ニ牽引スルモノアリ

味覺障害 *Störungen der Geschmackempfindungen* ヲ發スルコトハウルバンチ氏數多ノ實

驗ニ由テ之ヲ證明セリト云フ

膿汁ノ歐氏管ヲ經テ咽喉ニ排出 *Ablfluss des Eiters durch die Ohrtrumpfe in den Pharynx* ス

ルコトアルハエタール氏之ヲ報シ其不快ナル味臭ノ爲メニ嘔吐、消化不良等ヲ喚起スルコトハ

ボンナフオン氏之ヲ報セリ

咳嗽 *Husten* 頑固ナル咳嗽ヲ發スルコトハマルシャル氏 *Marschal* 之ヲ報セリ

痙攣性噴嚏 *Nasenkampf* モーレル氏ハ一患者劇シキ痙攣性噴嚏ヲ發セシ者耳漏ノ閉止スル

精神機能不
和
他覺症候

ト共ニ其發作平癒セシモノヲ報ゼリ

其他精神機能不和ノ諸症狀ヲ呈スル者少ナカラズトス

他覺症候

外聽道ハ通常肥厚シ膿汁ヲ以テ充セルヲ見ル

歐氏管壁ハ多少發炎、腫脹、肥厚等ヲ呈ス

膿汁ノ分泌少ナキ者ハ外聽道ノ深部鼓膜、鼓室等ニ處々點狀、斑狀ヲナシテ存スルヲ見ル

鼓膜ハ著シキ發赤腫脹ヲ呈シ間時加爾基變性ニ陥ルヲ見ル而シテ通常穿孔脫失等ヲ呈シ甚

シク常形ヲ失スル者多シ穿孔及脫失ニハ種々ノ形狀位置アリ穿孔ノ數ハ通常一個ナルモ

間時數個ノ存スルヲ見ル予ハ一回一婦人四個ノ穿孔アル者ヲ見タリ、脫失及穿孔ノ形狀ハ圓

形、腎臟形、楕圓形、不正卵圓形等ノ別アリ穿孔ノ部位ハ前後下界ニ存スルコト多キモ其他諸處

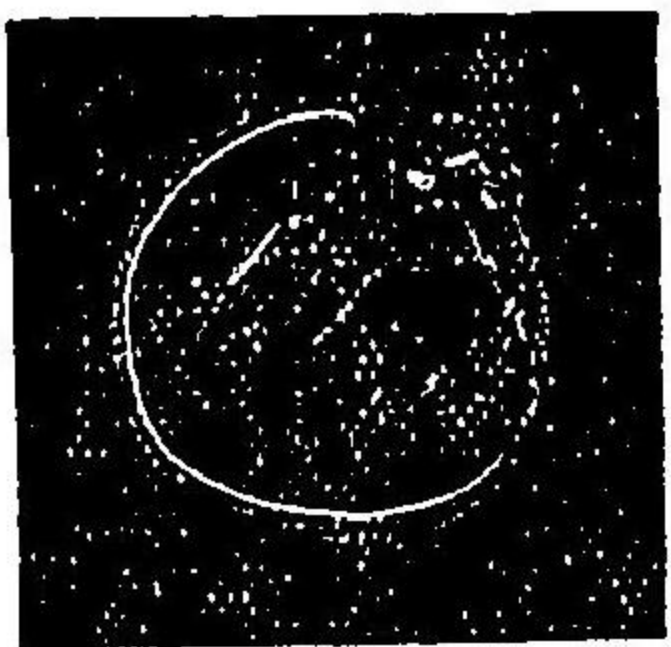
ニ之ヲ見ルナリ膿汁ノ量ハ種々一様ナラズ二十四時間ニ僅ニ二三滴ナルコトアリ或ハ頗ル大

量ナルコトアリエタル氏ハ一患者十日間一時間毎ニ、十八乃至二十ノ大滴膿ヲ漏ラシ一週間

ニ二百瓦ノ多キニ達セシ者ヲ報ゼリ

カツツ氏ハ一患者頸靜脈ヲ壓迫スルルハ膿汁ノ分泌増進セル者ヲ報ゼリ

圖三十六第



植骨柄遊離
シテ存ス

圖四十六第



腎臓形鼓膜
穿孔

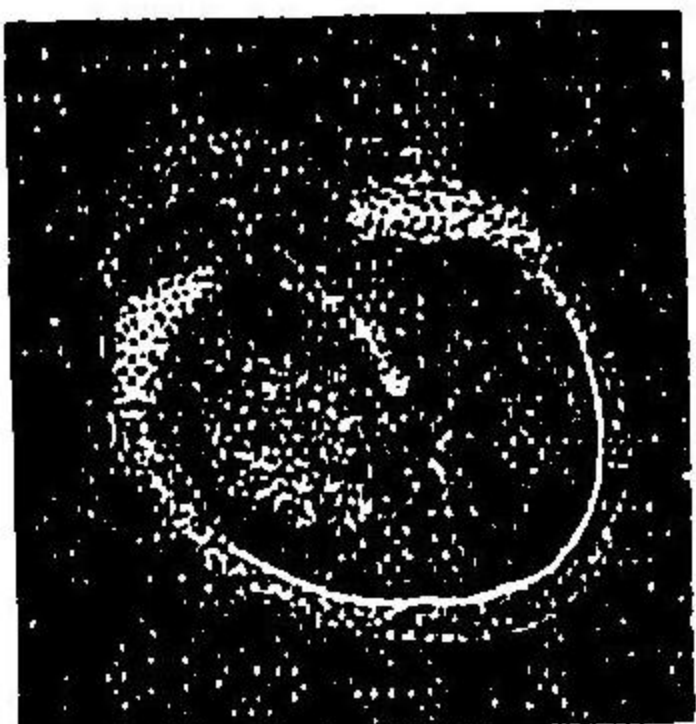
〔經過〕慢性化膿性中耳炎ノ經過ハ種々様ナラズ時トシテ放置シ或ハ治療セズシテ自然治癒スルモノアリ又治療若クハ自然ニ鼓膜穿孔ノ痕癒着ヲ起ス者少ナカラズ予ハ二患者ノ慢性化膿性中耳炎ニ罹リ鼓膜穿孔セル者清淨防腐法ニ兼テ四%ノ硝酸銀ヲ穿孔線ニ塗布スルコトヲ持長セシニ穿孔線漸々癒合シテ聽力大ニ增多セル者ヲ實驗セリ一ハ十六歳一ハ十歳ノ男子ナリキ

鼓室粘膜一樣ニ荒蕪セラレ顆粒組織ヲ形成シ茸狀息肉ヲ形成スル者アリ
最モ恐ルベキ合併症ハ左ノ如シ

I 腦膜若クハ腦實質ノ化膿 *Eitern oder Gehirnhäute oder des Gehirns.*

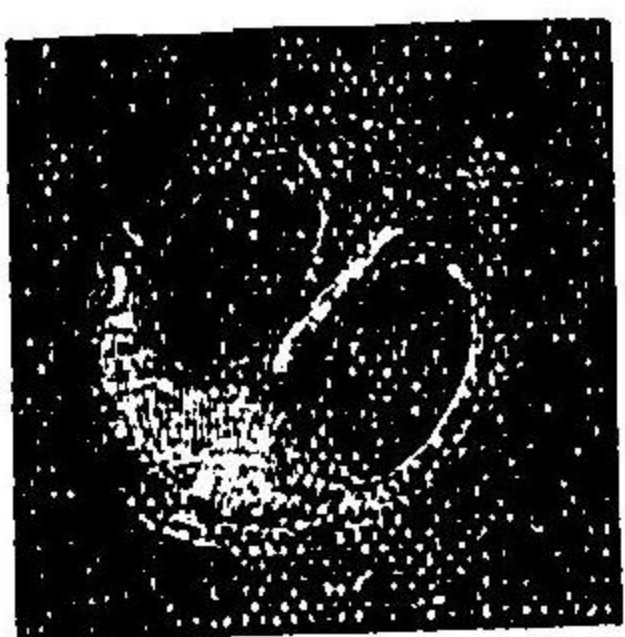
豫後

圖五十六第



大ナル腎臓形鼓膜脫失
植骨柄遊離
シ鼓膜ノ遺殘部加爾基變性ヲ示ス

圖六十六第



右鼓膜ノ重
複穿孔

II 竇血栓及之ニ續發スル所ノ膿毒症 *Sinus-thrombose mit nachfolgender Pyemie.*

III 血管壁侵蝕ニ因スル惡性出血 *Profuse Blutungen durch Abtragung von Gefäßwänden.*

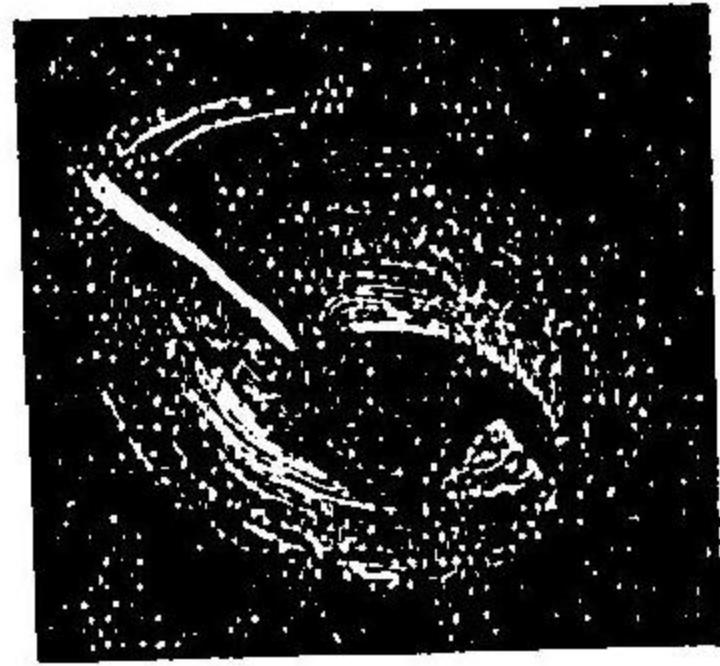
IV 顱蓋骨骨瘍 *Caries des Tiscoverbins.*

〔豫後〕身體健全營養品ノ供給十分ナル小兒ニシテ早ク適當ノ處置ヲ施スルハ鼓室内漸々新肉芽ヲ發生シ膿汁ノ分泌閉止シ鼓膜穿孔部モ癒着シ或ハ狭小トナルコトナシトセズ此ノ如キハ豫後佳良ナルモノトス

然レモ多クハ頑固ノ耳漏トナリ一治一發抵止スル所ナク穿孔ハ漸々増大シ遂ニハ脫失シテ聽力ハ益々減損シ營養モ亦不良トナリ種々ノ忌ムベキ續發症ヲ來ス此ノ如キハ豫後素ヨリ

療法

圖七十六第



左鼓膜ノ卵
圓形癆痕
癆痕中ニ一
ノ光線反射
ヲ遺ス

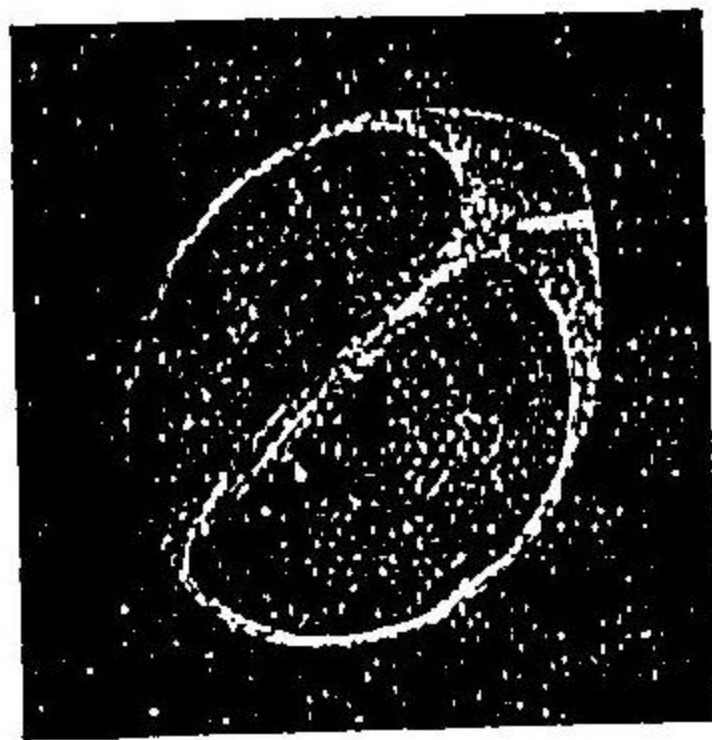
圖八十六第



右鼓膜後界
ノ水泡狀膨
隆
(通氣法施
行ノ後)

不良ナリトス
〔療法〕慢性化膿性中耳炎ノ療法ニ就テ最モ
必要ナルハ膿汁ノ分泌ヲ制止セシメ鼓室内ヲ
乾燥セシムルニ在リ膿汁ノ分泌ヲ制止スルニ
ハ先ツ耳内洗滌法ヲ最要法トス耳内洗滌法ニ
二種アリ外聽道ヨリ洗滌スル法 *Ausspülung*
von aussen Gehörgange ト歐氏管ヨリ洗滌ス
ル法 *Ausspülung von der Tube* ト是ナリ而
ノ外聽道ヨリ洗滌スル法ハ一般ノ規則ニ從ヒ
外聽道ヨリ通シテ鼓室内ヲ洗滌スル者ニシテ
(上卷八六頁洗耳法ノ條ヲ參照ス可シ) 歐氏管
ヨリ洗滌スル法ハ歐氏管「カテーテル」ニ由テ
鼓室内ヲ洗滌スルニ在ルナリ
洗滌ニ用キル藥液ハ種々アレモ緩和、溶解、收

圖九十六第



右鼓膜ノ前
後ニ存スル
大癆痕
其大分ハ鼓
室ノ迷路壁
ニ癒着ス

制腐 *Antiseptisch* 收斂 *Astringirend* 吸收 *Resorbirend* ノ四ニ他ナラサルナリ

今左ニ古來諸大家ノ用キ來リシ種々ノ方法及ビ藥物ヲ掲載ス可シ

(1) エタル氏 *Winn* ハ千八百二十一年ブラ氏 *Winn* ハ千八百六十九年既ニ慢性耳漏ニ持久性微
温耳浴ノ效アルヲ説ケリ其法十分乃至十五分時間耳浴ヲ持續スルニアリ

(2) クルチス氏 *Quint* ハ千八百二十年慢性耳漏制止藥トシテ硝酸銀溶液ノ效アルヲ説キ千
八百六十九年シワルゼ氏之ニ附説シテ硝酸銀ハ鼓室粘膜炎充血腫脹シ或ハ肉芽樣組織形成
ノ傾向アル者ニハ殊ニ效ヲ奏ス其溶液ハ三乃至十%ニシテ能ク鼓室ヲ洗滌拭布シタル後

持久性微温
耳浴
硝酸銀

鼓室ノ疾病

之ヲ微温トシテ點耳シ耳角部ヲ壓迫シ數秒時若クハ數分時之ヲ放置シ然ル後稀薄ナル食鹽溶液ヲ以テ再ビ洗滌シ「クロール」銀ノ沈澱ヲ形成セシメテ鼓室内及歐氏管、咽頭等ニ硝酸銀ニ因スル不快ノ刺戟ヲ永ク止メザラシムベシト云ヘリ
予カ實驗ニ由レハ硝酸銀モ間々著效ヲ奏スルモノナレドモ處置不十分ナルルキハ外聽道及耳朶部ニ黑色ノ斑ヲ遺シ或ハ組織ヲ侵蝕スルコアリ

亞爾個保爾

(3) 千八百七十年レエウンベルグ氏 *Löwenberg* ウェーベル、リール氏 *Leber-Lied* 等ハ鼓室粘膜顆粒狀トナリ膿汁ノ分泌多キ者ニ亞爾個保爾ノ著效アルヲ説ケリ
亞爾個保爾ハ膿汁制止ノ效頗ル現著ナル者ナリ予ハ無水亞爾個保爾、蒸餾水等分ノ者或ハ硼酸ヲ和シテ用ユ

硫酸銅

(4) 千八百七十年ルウセ氏 *Lucas* ハ硫酸銅結晶ヲ鼓室粘膜ノ腫脹部ニ一週二三回塗布シ或ハ硫酸銅〇、一二蒸餾水三〇、〇ノ溶液トシ一日二回點耳スルコヲ賞用セリ硫酸銅ハ處々ヲ青藍色ニ染ムルヲ以テ婦人及ビ藝人ニハ不適當ナリトス

硼酸

(5) 千八百八十年ベッオルド氏 *Beard* ハ硼酸末ハ刺戟少ナキ防腐藥ニシテ鼓室ノ慢性炎症ニ用キテ著效アルコヲ説ケリ

沃度仿謨

硼酸末ハ刺戟少ナク殊ニ小兒ニ撒布藥トシテ效多シ又往々他ノ藥物ト配伍シテ用ユヘシ
(6) 沃度仿謨ハスベンサア氏 *Sawyer* 始メテ之ヲ用キ次デ慢性耳漏殊ニ骨瘍ヲ兼ル者及ヒ結核性ノ者ニ效アルコハ久シク諸家ノ稱フル處ニシテモゼチヒ氏ハ左ノ法ヲ賞用セリ

沃度仿謨 一〇、〇 偲里設林 八〇、〇 蒸餾水 二〇、〇 達拉侃篤護謨 〇、二
右點耳料

沃度仿謨ハ惡臭ノ爲メ患者ノ之ヲ嫌忌スル者多シ又小兒ニハ膿汁ト共ニ外聽道外ニ流出シ皮膚ヲ刺戟シテ濕疹ヲ生スルコト少ナカラズトス

「クレオリン」

(7) 「クレオリン」ハ點耳トシテ用キルコト少ナク多クハ二分一乃至四分一「リール」ノ微温液ニ一乃至五滴ヲ點シテ洗耳用ニ充ツ惡臭ヲ制止スルノ效頗ル著シキ者トス

石炭酸

(8) 石炭酸ハ一乃至二%ノ溶液ヲ洗耳用トシ五乃至十%ノ偲里設林溶液ヲ點耳用トスパウルセン氏 *Paulsen* ハ右ノ偲里設林溶液ヲ綿栓トシテ永ク鼓室内ニ挿入スルコヲ賞用ス千八百八十四年ベンデラック、ヘウイトソン氏 *Bendelack-Hewitson* ハ石炭酸偲里設林ノ著效アルヲ説キ兼テ疼痛刺戟ヲ制スルコト問之アリト云ヘリ
ワルプ氏 *Walp* ニシテハ四%ノ石炭酸溶液ヲ細管ヲ以テ一二滴鼓室内ニ點滴シテ效アリト云ヘ

昇汞

リ
(9) 昇汞ハ五百倍乃至千倍ノ溶液ヲ洗耳用トス又千八百八十三年ワアゲンホエゼル氏 *Wagenhofer* 千八百八十四年ビュルクチル氏 *Birkner* ハ其膿汁ノ惡臭ヲ制止スル效頗ル著シキモノナリト説ケリ

昇汞ヲ用キルルハ歐氏管ヲ通ジテ嚥下シ爲メニ中毒スルモノアリ殊ニ小兒ニ於テ注意スベシ

撒里矢爾酸

(10) 撒里矢爾酸ハ一乃至三%ノ水若クハ亞爾個保爾溶液ヲ用ユ又列曹爾珍ト混合シテ細粉末トシテ用キルコアリベツツオルド氏ハ左ノ處方ヲ賞用ス

撒里矢爾酸 二、〇 酒精蒸餾水 各五〇、〇 一日二回 點耳料

格魯兒水

(11) 千八百八十四年ヤアコップソン氏 *Jacobson* ハ格魯兒水ノ點耳若クハ蒸餾水等分ノ者ヲ以テ注耳スルルハ顆粒狀肉芽形成及ビ惡臭ヲ制止スルニ效アリト説ケリ伯林ルーゼ氏ノ「クリニック」ニテハ之ヲ用キルコト多シ

明礬

(12) レネウエンベルグ氏ハ明礬細末若クハ礬酸末混和物ヲ用キテ效アリト説ケリ

醋酸鉛

(13) 醋酸鉛ハ五%ノ溶液ヲ用ニ臨ンデ珈琲匙ニテ暖メ點耳用トスウルバンチツチ氏等ハ醋酸

硫酸亞鉛

鉛溶液ハ緩和性收斂藥ナルヲ以テ疼痛アルルル或ハ炎症盛ナルルル試用品可シト云ヘリ

(14) 硫酸亞鉛ハ〇、〇五乃至〇、三ヲ蒸餾水三〇、〇ニ溶解シ用キルモノアリ

硫酸礬土

(15) ボンナフオン氏ハ千八百六十七年二乃至六%ノ硫酸礬土ヲ用キテ效アリト説ケリ

沃度

(16) ウルバンチツチ氏ハ腺病性ノ患者ニハ沃度劑ヲ用キルベシト云ヘリ其法

純沃度 〇、五 沃度加里 一、〇 佩里設林 五〇、〇

右朝夕二回微温トシテ十滴ヲ點耳ス

ラドレネ、デラツシヤリー氏ハ左ノ法ヲ賞用ス

沃度丁幾 三〇、〇 沃度加里 五、〇 蒸餾水 一〇〇〇、〇

右注耳料

甘汞

(17) ゴットスタイン氏ハ甘汞ノ效アルコトヲ説ケリ又水銀劑含有ノ「ゲラチン」ヲ賞用スル者アリ

平流電氣

(18) ペアル氏 *Peal* ハルーサー氏耳科書中ニ慢性化膿性中耳炎ニ平流電氣ヲ通ジテ效ヲ奏スト説ケリ其法消極ヲ耳部ニ積極ヲ頂部ニ通ズルニ在リ

植皮法

(19) エリー氏 *Elli* ハ植皮法ノ效アルコトヲ説ケリ

沃度兒

(20) 千八百八十五年ステラル氏 *Stellar* 沃度兒ヲ用キテ效アリト云ヒマツツオニー氏 *Masoni*

「デルマト
ストール」アリ
單寧酸
「ピオクタ
ニン」

格羅漢酸

醋酒石酸
土

吸引器

ハ沃度兒ハ沃度仿謨ト同一ノ效アリテ惡臭ナキヲ勝レリト説ケリ
(21) 「デルマトール」及「アリストール」モ亦近年ニ至リ頗ル用キル者多シ
(22) 單寧酸ハ佩里設林溶液トシテ用キルコトアリ
(23) 近年ニ至リ「ピオクタニン」モ亦用キラレ履、效アルヲ説ク者アリト雖モ予カ經驗ニ由レバ是又硫酸銅ニ於ケルカ如ク外聽道及ヒ近隣ヲ汚染シ且ツ其效用モ賞ス可キ價值ナシトス

(24) 格羅漢酸ハ鼓室粘膜炎、顆粒狀肉芽ヲ生ゼシ者ニ塗布料トシテ用キシハ頗ル古キコトナレモ近世ニ至リ之ヲ點耳藥トシテ賞用スル者多シ殊ニ伯林府ノカツ氏ノ如キハ有效無比ノ藥物ナリト揚言セリ予ガ經驗ニ由レバカツ氏カ稱フル如キ效ハナキカ如シ

(25) ランゲ氏 *Langé* ハ十乃至十五%ノ醋酒石酸禁土液ノ點耳ヲ賞用セリ
此溶液ハ濃厚ニ過クルキハ毛細管ノ出血及ヒ外聽道ノ腫脹ヲ喚起スル者ナレハ頗ル注意ヲ要スル者トス

(26) グルーベル氏 *Gruber* ハ氏ノ創意ニ出ツル吸引器 *Saugspitze* ヲ以テ鼓室内ノ膿汁ヲ吸引スルコトヲ賞用ス

硬亞爾保爾

綿及「ガー
ゼ」

列曹爾珍

乳嘴突起穿
開術

(27) グルーベル氏ハ二十%ノ硼酸亞爾保爾一咖啡匙ヲ四分之一「リール」ノ微温湯ニ稀釋シテ洗滌スルコトヲ稱セリ

(28) プルンス氏綿、石炭酸綿、昇汞「ガーゼ」、沃度仿謨「ガーゼ」、硼酸「ガーゼ」等ヲ深ク外聽道及ヒ鼓室内ニ填充スルコトヲ稱フル者アリ

(29) ロッシー氏 *Rossi* ハ列曹爾珍ヲ賞用ス處方左ノ如シ

列曹爾珍 〇、二 蒸餾水 二〇、〇
右點耳料

(30) シワルゼ氏ハ慢性化膿性中耳炎ノ頑固ニシテ排膿容易ニ止マス將ニ種々ノ續發症ヲ起サントスル者ハ乳嘴突起穿開術ヲ行フ可シト云ヘリ

今日迄諸大家ノ應用セシ治療法ハ大凡右ノ如シ予ハ數多ノ患者ニ種々ノ方法ヲ用キ盡セリ然レモ未タ以テ一定ノ特效アル妙法ニ接セズ常ニ深ク遺憾トス予ガ「クリニク」ニ於テ方今最モ多ク用キ稍、效アル者ハ左ニ記載スル方法ナリ

(a) 洗耳藥液ニハ硼酸、石炭酸、撒里矢爾酸、クレオリン、硫酸麻痺涅矢亞等ノ溶液ヲ症ニ應シテ用ユ

(b) 洗耳後ハ捲綿子ニブルンス氏綿若クハ撒里矢爾酸綿ヲ纏捲シ以テ深ク丁寧ニ鼓室内ヲ清拭ス可シ

(c) 大人ナレバ歐氏管「カテーテル」ヲ通シテ充分通氣法ヲ施シ(又歐氏管「カテーテル」ヲ通シテ三四回鼓室内ヲ洗滌スルコトアリ)復ヒ充分ニ鼓室内ヲ清拭ス可シ

(d) 洗耳清拭ノ後大人ナレバ左ノ方ヲ用ユ

(一) 硼酸末 〇、五 無水亞爾個保爾 蒸餾水 各五、〇

右點耳料

(二) 沃度兒 二、〇 硼酸細末 一〇、〇

右鼓室内撒吹料

小兒ナレバ左ノ方ヲ用ユ

(一) 醋酸鉛 醋酸礬土 各〇、二 蒸餾水 一〇、〇

右微温トシテ點耳料

(二) 「デルマトール」 硼酸末等分ノ者

右極細末トシテ鼓室内撒吹料

又大人小兒共ニ屢著效ヲ奏スルハベツツオールド氏キルヒチル氏等ノ賞用スル單純硼酸極細末ノ撒吹法ナリ
四%ノ硼酸亞爾個保爾モ往々現著ノ效ヲ奏スルコトアリ

第八章 實扶的里性中耳炎 *Otitis media Diphterica.*

(*Die Diphterische Paukenschindung*)

鼓室實扶的里ハ咽頭實扶的里ヨリ蔓延スルモノ多ク通常同時ニ乳嘴竇及歐氏管モ本病ニ罹ル者ナリ

鼓室實扶的里ヲ生活體ニ就テ始メテ實驗セシハウレデン氏 *Winkeln* ナリ同氏ハ耳科學月報第二號ヲ以テ初生兒ニ二回及五歲乃至十五歲ノ小兒ノ猩紅疹ニ續發スルモノ十八回ヲ報告セリ

ヒルシ氏 *Hirsch* シーマン氏 *Sidemann* 等ハ實扶的里ニ罹レル鼓室粘膜ノ組織學上検査ヲ詳述シ近時ニ至リモース氏 *Moss* ハ其組織學及微菌學上ノ検査ニ就テ熱心討究セラレタリ

症候

〔症候〕實扶的里性鼓室炎ハ通常兩側ニ發シ偏側ニ發スルハ稀ナリ
重聽ハ頗ル劇シク之ニ反シテ疼痛及耳鳴ハ甚々稀有ニ屬ス
ウレデン氏ノ報告ニ由レバ熱ハ三十八度二分乃至三十九度二分ニシテ顔面神經ハ多クハ麻
痺ヲ呈シ鼓膜ハ侵蝕セラレ實扶的里性滲出物ヲ漏出ス其滲出物ハ初期漿液膿様ニシテ甚々
少シ

豫後

〔豫後〕ウレデン氏ノ報告ニ依レバ十八名ノ患者中只二人ノ初生兒ヲ失ヒシノミナレバ豫
後ハ必シモ不良ナルニアラザルガ如シ

療法

〔療法〕一般清潔法ヲ施行シ撒里矢爾酸、沃度仿謨、昇汞、石炭酸、過滿俺酸加里ノ溶液ヲ點
耳スベシ

中耳化膿ノ
續發症

第九章 中耳化膿ノ續發症 *Complication der Mittelohritis*

Mitsun.

中耳炎ニ續發スル疾病ハ頗ル多ク且ツ危險ナルモノナリ
シワルゼ氏曰ク腦膿瘍、化膿性腦膜炎、膿毒症等ニテ死セル者ノ大部ハ中耳炎ニ因スルヲ疑

化膿性腦膜
炎

フベカラズト其他間接直接ニ卒中、小兒搖蕩、急性結核、神經熱、惡性間歇熱、消衰等ヲ喚起
スル者蓋シ多カル可シ

(一) 化膿性腦膜炎 *Eitrige Meningitis*

中耳炎ヨリシテ化膿性腦膜炎ヲ起スハ鼓室天蓋ノ骨瘍或ハ侵蝕ヲ來シ然ル後及ボス者最モ
多ク又腦底ニ發スルヲ腦頂ニ發スル者ヨリ多シトス

〔症候〕發熱、劇シキ頭痛、項部痙直、癱瘓、嘔吐、顔面神經麻痺、瞳孔變常、眼底鬱血、昏睡
等ノ症狀ヲ呈ス

〔經過〕ハ甚ダ迅速ニシテ二十四時間乃至三日ニ死スルモノ多シ又時トシテ二三週ヲ超
ユル者アリ

〔豫後〕不良ナリ

〔療法〕乳嘴突起穿開術ヲ施シ或ハ壓迫ニ依テ最モ知覺過敏ナル部分ノ硬腦膜ヲ切離ス
可シ

(二) 腦膿瘍 *Gehirnabscess*

レベルト氏 *Libert* ノ調査ニ由レバ中耳炎ニ續發スル腦膿瘍ハ殊ニ顛顛骨ノ骨瘍ヲ起シ然ル

腦膿瘍

後來ル者多シトス同氏ハ八十名ノ患者ヲ報告セリ内男性五十三人女性二十四人小兒三人而シテ全數ノ七分一ハ婚姻期前ニシテ其他ハ多ク十六歳乃至三十歳ナリシト云フ
 シヨット氏 Schott ハ膿瘍ハ男ニ多ク其比例ハ男性三十人女性十人ノ割合ニシテ左側ヨリハ右側ニ多シト云ヘリ

バアル氏 Baum ハ成書ニ由テ化膿性中耳炎ニ續發スル七十六名ノ膿瘍患者ヲ集メ其内ノ確定ナル者ヲ調査セシニ左ノ成績ヲ得タリ

腦中葉	五十三回	橋	二回
大脳及小脳	六回	膿胞ヲ具ヘザルモノ	九回
小脳	三回		

ケルチル氏 Kersch 百名ノ患者ニ付キ左ノ調査成績ヲ得タリ

大脳	六十二回	小脳	三十二回
大脳及小脳	六回		

同氏ガ年齢ニ就テノ調査成績

年齢	大脳	小脳
----	----	----

一歳未満乃至十歳	十二回	二回
十一歳乃至二十歳	十三回	九回
二十一歳乃至三十歳	十九回	十回
三十一歳乃至四十歳	十一回	三回
四十歳以上	七回	五回

右ノ表ニ由テ觀レバ小兒ニハ小脳膿瘍比較的少ナクシテ中年ノ者ニ多シ

又ケルチル氏ニ由レバ耳炎性膿瘍ハ男性ハ女性ニ比スレバ二倍多ク右側ハ左側ヨリ多シト云フ

〔症候〕膿瘍ノ大小、位置及急劇ニ腦實質ヲ侵襲スルト否トニ由テ種々一様ナラズト雖
 左病側ノ劇烈ナル頭痛、惡寒、發熱、代償機能障害、種々ノ神經麻痺、言語障害、催眠、昏睡、搖蕩等ハ必ず發スル者多シ

〔療法〕マアセフェン氏 Maccew 及バアル氏 Baum 等ハ穿顱術ノ效アルコトヲ説キブラ
 ウン氏 Braun ハ乳嘴竇ノ穿開術ハ耳炎性膿瘍ニハ必ず施行スベキモノナリト云
 ヘリ

竇靜脈炎及血栓

(三) 竇靜脈炎及血栓 *Die Sinusphlebitis mit Thrombosenbildung.*
 鼓室粘膜炎ノ隔壁、硬腦膜等ノ血管ト連合スルガ故ニ鼓室粘膜炎ニ永久不良ノ炎竈ヲ有スルトキハ從テ竇靜脈炎及血栓ヲ生ジ易シトス
 竇靜脈炎ヲ發スルトキハ膿毒症ヲ起シ不良ノ轉歸ヲ採ル者多シウレデン氏及シワルゼ氏等ハ竇血栓ヲ喚起シ死スル者ハ慢性化膿性中耳炎ニ因スル者多キヲ實驗シ而シテウレデン氏 *Wirsén* ハ三十八回ニ五回、*Dusch* ハ三十二回ニ二十回耳炎ニ因由セシヲ檢出セラレタリ又ウルバンチ氏ハ十七回中十四回ハ男性、二回ハ女性、一回ハ小兒而シテ十五歳乃至三十歳ノ者ニ最モ多カリシヲ實驗セリト云フ

〔症候〕 惡寒、發熱ヲ主トス而シテ此ニ症狀ハ間歇性ニ來リ初期窒扶斯ト異ナルヲナシ又其發作間ハ恰モ健全無事ノ觀ヲ呈スル者アリ

レヘルト氏ニ由レバ頭痛(壓迫ニ由テ増劇ス)關節痛(朝起時)精神錯亂、精神機能微弱、知覺過敏、腦壓推ノ感、麻痺、震顫等ノ諸症狀ヲ呈スル者アリト云フ概言スレバ其症狀ハ患部ノ異ナルニ從テ種々一様ナラサル者トス

〔經過及豫後〕 經過ハ通常一二日乃至一二週トスレヘルト氏ハ十五回ニ就キ四回ハ

顛顫骨骨瘍及骨疽

九乃至十五日、五回ハ二十一乃至二十八日、三回ハ二十八乃至三十五日、一回ハ三十七日、一回ハ四十二日、一回ハ六十日、持續セシヲ報道セリ
 豫後ハ多クハ甚ダ不良ニシテ轉移性膿毒症、其他種々貴重ノ部分ヲ侵襲スルモノ多シ

〔療法〕 手術ハ多クハ無效ニ屬ス先ヅ身體ヲ安靜ニ保チ乳嘴突起部ニ持續性氷巻法ヲ施シ緩下劑ヲ處シ清涼ノ飲料ヲ與ヘ又疼痛其他ノ刺戟症狀劇烈ナルトキハ莫兒比涅、格魯拉爾等ノ内用及皮下注射ヲ施ス可シ

(四) 顛顫骨骨瘍及骨疽 *Caries und Nekrose des Felsenbeins.*

顛顫骨ノ骨瘍及骨疽モ亦慢性化膿性中耳炎ニ續發スル者少ナカラズ殊ニ體質薄弱ノ者局處ノ清潔法不充分ナル者ニ於テ然リ近年耳科學ノ進歩ト共ニ清潔法及鼓室内通氣法ヲ行フモノ漸々増多セシヲ以テ從テ此等ノ症ヲ發スル者漸次減少スルヤ疑フ可ラズ

〔原因〕 ボリセル氏ニ依レバ顛顫骨ノ骨瘍及骨疽ハ結核性ノ者ニ最モ多シト云フ又腺病、惡液質等ノ者モ之ニ罹リ易シ

其最モ多ク侵サレ易キ部位ハ乳嘴突起部ニシテ鼓室ノ前、後、上ノ三壁及小聽骨等ヨ

リシテ及ボスヲ常トス

此症ハ大人ヨリハ小兒ニ發スルヲ多シ

〔症候〕

壞疽セル部ノ皮膚ハ腫脹膨大シ汚紫色ニ變ジ屢瘻孔或ハ滲潤様ヲ呈ス又瘻孔滲潤等ヲ呈セズ排膿ノ途ヲ失シテ腦ノ皮質及實質ニ波及シ或ハ他ノ部分ニ流注膿腫ヲ生ズルモノアリ或ハ永久特別ノ症候ヲ呈セズ乳嘴突起部ニ瘻孔ヲ生ズルニ至リテ始メテ本症ナルヲ知ルコトアリ

シワルゼ氏ニ由レバ外聽道ノ骨瘍ハ概テ鼓室ノ疾病ト相合併スルモノナルヲ多シト云ヘリ

他覺症候ハ外聽道ヨリ有臭ノ惡性膿汁ヲ排泄シ鼓室内肉芽様組織ヲ生ジ耳内ヲ洗滌スルトキハ流出液中往々骨砂及腐骨片ノ出ヅルヲ見又血液ノ混ズルヲ見ルコトアリ外聽道ハ一樣ニ肥厚シテ狭窄トナリ往々潰瘍ヲ呈シテ瘻孔及流注腫ノ口ヲ具フルコトアリ

耳ノ前後ニ在ル淋巴腺ハ腫脹シ疼痛ヲ發ス

流注腫ハ頤、項、乳嘴突起、後頭骨、咽頭後壁等ノ諸部ニ淋巴腺ヲ沿フテ發シ易ク而シ

テ之ヲ發スルトキハ腫脹發炎ノ刺戟ヲ呈スル者トス

自覺症候ハ骨痛 *Dolores ossiculorum* ヲ主ナル者トス而シテ骨痛ハ或ハ劇烈ニ或ハ輕度

ナリト雖モ經過中多少ノ苦痛ヲ感ゼザル者ハ殆ンド稀ナリ

硬腦膜ニ分泌閉止作用及炎症刺戟ヲ及ボストキハ頭痛ヲ發スル者ニシテ其疼痛ハ持

續シ或ハ間歇ス

其他聽力減損、眩暈、自覺性耳鳴知覺異常例之三又神經痛等ヲ發スニ又神經痛ハ其特

徴トシテ收斂劑ヲ點耳スルトキハ疼痛ヲ増進スル者トス

〔豫後〕必シモ不良ナルニアラズ體質強實早ク適當ノ處置ヲ施ストキハ往々満足ナル效

ヲ奏スルコトアリ之ニ反シ體質薄弱ニシテ貴要部ニ流注腫ヲ生ゼシ者ノ如キハ豫後大ニ不良ナリ又腎、肺、胃諸臟ノ慢性諸病ヲ喚起シ甚シキ食思缺乏 *Anorexia* 及貧血

Anemia ニ陥キリ斃ル、者少ナカラズ

其他骨質破壞 *Destruction des Knöchels* ノ爲メニ顔面神經麻痺、腦實質及膜質或ハ大

血管ノ炎症ヲ續發スルコトアリ又時トシテ血管損傷ノ爲メニ不測ノ大出血ヲ來ス者アリ

〔療法〕ノ主ナル目的ハ膿潰 *Suppuration* ニ鋒ヲ向ケザル可ラズ即チ外聽道及歐氏管ヨリ鼓室内ヲ清洗シ歐氏管ヨリ通氣法ヲ施スニアリ洗滌液トシテハ外聽道ヨリハ石炭酸、昇汞「クレオリン」、硼酸、撒里矢爾酸、「リゾール」列曹爾珍等ノ防腐性溶液ヲ用キ歐氏管ヨリハ四分三ノ食鹽水ヲ用ユ

洗滌後ハ能ク清拭シ沃度仿謨、沃度兒、「アリストール」、硼酸細末等ヲ鼓室内ニ撒吹ス可シ

肉芽様組織ヲ生ズルモノハ寒性蹄係ヲ以テ之ヲ抽除シ或ハ銳匙ヲ以テ抓把ス可シ

乳嘴突起部腫脹シ或ハ瘻孔ヲ生ズルトキハ先ツワイルド氏切面ヲ施シ骨剪、骨鉗子、銳匙等ヲ以テ能ク腐壞組織ヲ搔把シ又骨板ノ存スルヲ見レバ徐々ニ之ヲ抽出ス可シ

内服ニハ沃度、鐵、砒石、規那ノ諸劑ヲ投ジテ體質ヲ變革強壯ナラシム可シ

第十章 鼓室新生物 *Neubildungen der Paukenhöhle.*

(一) 耳茸 *Omphalypen.*

耳茸ハシワルゼ氏ノ調査ニ由レバ耳病全數ノ凡ソ四乃至五%ニシテ男性ハ女性ノ倍數ニ居ル

耳茸ヲ分テ粘液茸 *Sekirimpolyp* 一名肉芽腫 *Granulationsgeschwulst* (或ハ圓形細胞茸 *Rund-sellenpolyp*) 纖維腫 *Fibrome* 粘液腫 *Myxome* 等トス

粘液茸ハ耳茸中最モ多キ者ニシテ不正ニ組成セル結締織ヨリ成リ中ニ圓形細胞及血管ヲ有ス此血管ハ著シク擴張シ從テ血管壁ノ抵抗力弱ク僅微ノ刺戟ニ由テ忽チ出血ヲ來ス者ナリ而シテ耳茸大ナレハ血管從テ大ナルヲ以テ出血多ク又小ナル者ヲ手術スルトキハ出血從テ少ナキモノナリトス

纖維腫ハ通常鼓室粘膜、骨膜層或ハ外聽道ノ骨膜ヨリ發生シ其質硬固ニシテ血管ニ乏

第十七圖



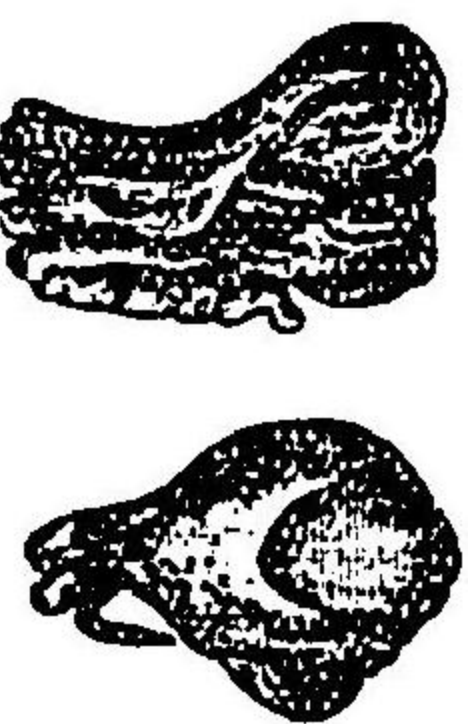
粘液茸ノ顯微鏡的截面

圖一十七第



耳介途突
出セル耳
茸

圖二十七第



茸ヲ具フ
ル茸

シキ故ニ其色蒼白ニシテ抵抗力強ク容易ニ出血スルコトナシ
粘液腫ハ膠様結締織ヨリ成ルストイデチル氏 *Scudener* 等ニ由レバ是レ恐クハ胎生時鼓室内組織ヨリ發生スル者ナラント云ヘリ而ノ其形狀沒食子ニ酷似ス

〔原因〕茸ノ主要ナル原因ハ慢性化膿性中耳炎ニシテ即チ該症ニ由テ分泌スル刺戟性液體ノ爲メニ組織ヲ刺衝シテ結締織ノ增生ヲ喚起スルガ故ナリ又腺病、貧血、惡液等ハ其發生ヲ扶クルモノトス

又茸ノ先天性ニ生ズルコトハエタル氏及ウルバンチツチ氏等ノ報告セシ處

ナリ

〔症候〕自覺症候

慢性化膿性中耳炎ニ於ケルト毫モ異ナルコトナシ又ヒルライレエ氏

Hilainei ハ該症ノ一患者カ腦ノ反射症狀即チ頭痛、高度ノ眩暈發作、亂神及記憶力減弱等ノ諸症狀ヲ呈セシ者、茸抽出ノ後全ク恢復セルヲ報告セリ

其他該症ノ爲メニ顔面神經ノ麻痺及癩癩様發作ヲ起セシヲ報セシ者アリ

他覺症候 茸ハ鼓室及外聽道ニ根ヲ有シテ發生スル者多ク殊ニ鼓室内ヨリ發生スル者多シ又時トシテ鼓膜、乳嘴突起等ヨリ發生スル者アリ其莖ノ長短及數ハ種々一様ナラズ其面ノ滑澤粗糙ニ於テモ亦然リトス

茸鼓室内ヨリ發生スル者ハ鼓膜ハ穿孔スル者多シモース氏及スタインブクエツケ氏等ニ由レバ八十%ハ穿孔ヲ呈スト云フ

外聽道及乳嘴突起ニ生ズル者ハ鼓膜穿孔ナシ然レドモ乳嘴突起部ニ生ゼシ茸ノ外聽道上壁ヲ穿通シテ外聽道ニ突出セシコトハ屢々先輩ノ報告セル所トス

〔診斷〕

「カリエス」及「チクローゼ」ニ由テ發生スル息肉様突隆其他鼓室岬ノ赤腫セル部ヲ茸ト誤診スルコトアリ注意ス可シ此際ニハ消息子ヲ以テ丁寧ニ觸診スルトキハ莖

ノ有無硬軟等ニ由テ之ヲ區別スルヲ得可シ然レドモ耳茸ノ「コンデロマ」様ニシテ莖ナキ者等ニ於テハ類症鑑別頗ル困難ナル者トス

耳茸及耳茸様息肉ノ區別ハ治療上必用アル者ニアラズ

〔豫後〕耳茸ハ手術ノ時ヲ失スルトキハ竇靜脈炎、膿毒症、腦膜炎、腦膿瘍等ヲ發生スルコトナシトセズ故ニ頭痛、眩暈等ノ症候ヲ呈スルモノハ急速手術ヲ施行ス可キモノトス

〔療法〕藥物療法、切除法、捻切法、蹄係、電氣燒却法等アリ

(一) 藥物療法ハ最小ノ耳茸殊ニ粘液茸ニ向テ效アル者ニシテ所謂燒灼藥ヲ用ユ格羅謨酸、格魯兒醋、硝酸、一半格魯兒鐵液等ナリ

ルーゼ氏ハ腐蝕藥土「サビナ」末、等分ノ者ヲ撒布シポリゼル氏ハ亞爾個保爾ヲ注耳シテ收縮セシムルヲ賞用ス

(二) 切除法トハ剪刀或ハ刀ヲ以テ茸莖ヨリ切除スルノ法ナレドモ出血多キノ恐アル故ニ現今用キル者甚ダ少ナシ

(三) 捻切法ハ鉗子ヲ以テ捻切スルノ法ニシテ耳茸發生ノ場處ニ由テ便益アルヲ少ナ

カラズ

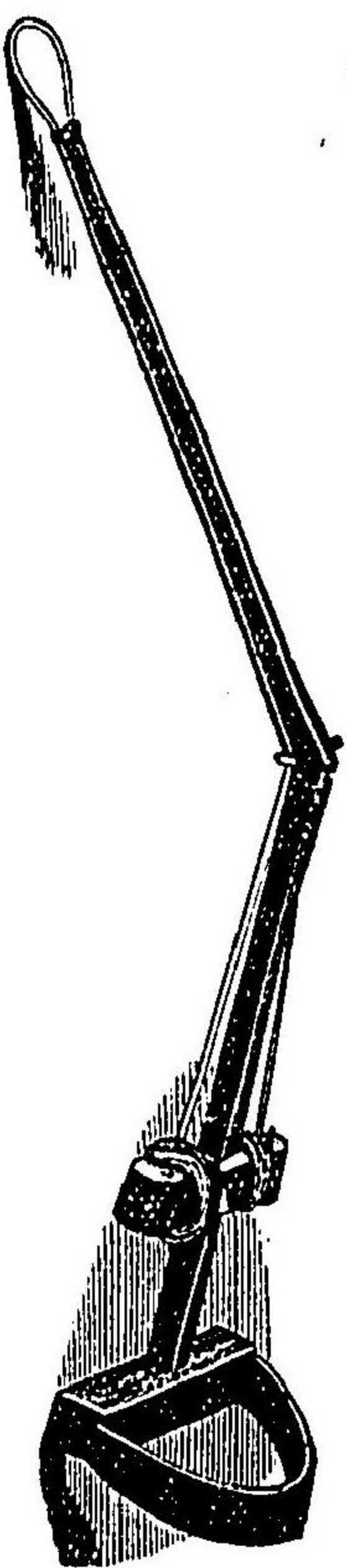
〔四〕蹄係法ハ方今最も多ク賞用セラル、方法ニシテ寒蹄係、熱蹄係ノ二種アリ、寒蹄係トハ無熱性蹄係ニシテ耳茸莖ヲ蹄係内ニ致シ以テ捻切スルニ在リ所謂ワイルド氏蹄係 *Polypenschwur nach Wild* 是ナリ

熱蹄係トハ即チ蹄係ニ電氣ヲ通ジテ燒切スルノ方法ニシテホルトリニー氏ノ創意ニ出ル者ナリ此法ヲ以テ切除スルトキハ疼痛及出血少ナキノ利アリトス

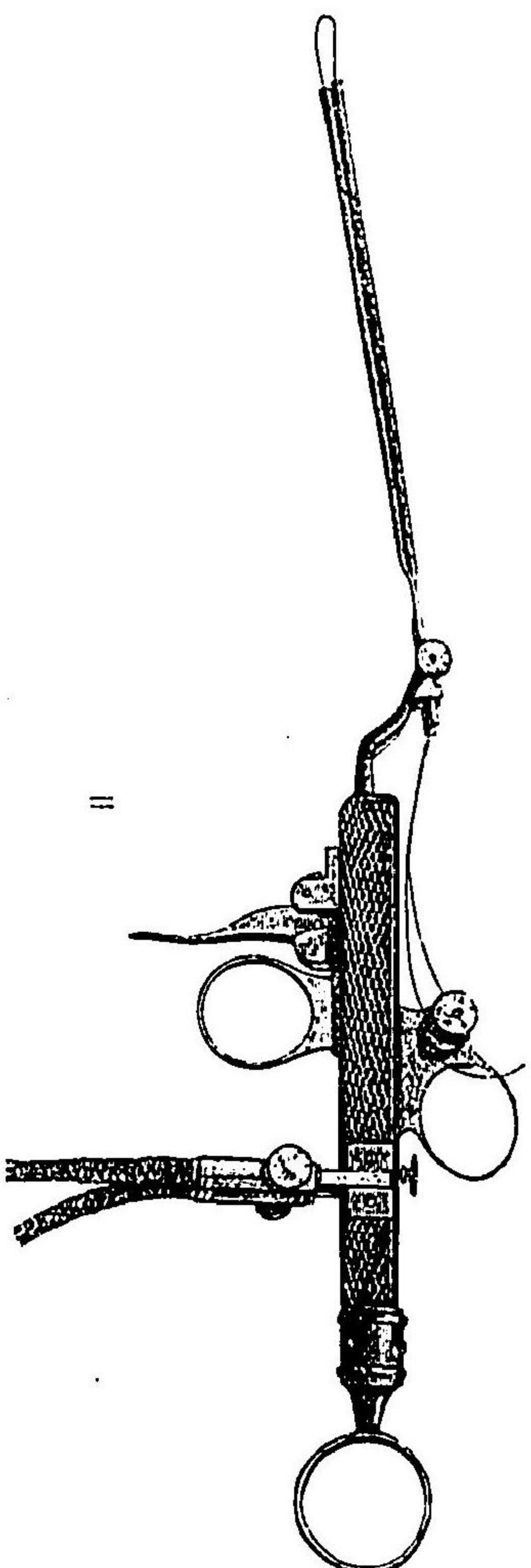
〔五〕電氣燒却法トハ白金製細刀ニ電氣ヲ通ジテ燒却スルノ方法ニシテ耳茸ノ扁平ニシテ莖ナキ者及顆粒狀肉芽組織ヲ生ズル者等ニ用キルニ便利ナリトス

第七十三圖

ワイルド氏蹄係



第七十四圖 電気蹄係 (松本儀兵衛造)



「コレステアアトーム」

(一) 「コレステアアトーム」 *Cholestatom*.
ウイルヒョウ氏曰ク眞ノ表皮ヨリ成ル「コレステアアトーム」ハ組織學上二個ノ相類似セル者ヲ見ル粉瘤 *Atherom* 及皮膚瘤 *Dermoid* 是ナリト
フオン、トレールチ氏ハ「コレステアアトーム」ハ膿性分泌物ノ變性セル者ト上皮細胞ト合シテ成ル者ナラント云ヘリ

肉腫

「コレステアアトーム」ハ通常豌豆大乃至胡桃大ニシテ大ナル核ヲ有スル扁平上皮細胞ヨリ成リ「コレステアアリン」ノ結晶ヲ含ム
(三) 肉腫 *Sarcom*.
ロベルトソン氏 *Robertson* ハ千八百七十年鼓室肉腫ヲ、オルチ、クレエン氏 *Orme-reen* ハ千八百八十六年圓形細胞肉腫ヲ報告セリ共ニ稀有ニ屬ス

骨肉腫

(四) 骨肉腫 *Osteosarcom*.
ワイルド氏ハ一患者耳ノ近傍ニ骨肉腫ヲ生ジ鼓室内ニ波及セル者ヲ、ベエケ氏ハ鼓室内惡性腫瘍ヲ手術シ顯微鏡検査ノ下ニ骨肉腫ナリシヲ報道セリ

骨新生物

(五) 骨新生物 *Knochenneubildungen*.
鼓室ニ生ズル骨新生物ハ唯骨質肥厚ニ止マルコアリ或ハ球狀ノ腫瘍トナリテ生ズルコアリ又鼓膜ノ輪モ共ニ化骨スル者アリ
鼓室ニ骨質新生物ヲ生ズルトキハ迷路窓ニ骨質閉塞ヲ來シ爲メニ馬鏡骨ノ運動障害セラレ著シキ重聽ヲ喚起ス可シ

囊腫

(六) 囊腫 *Cysten*.

癌腫

鼓室ノ囊腫ハマグヌス氏 Magnus ハアベルマン氏 Habermann 等之ヲ報告セリ頗ル稀有ニ
屬ス

(七) 癌腫 Carcinom.

トインビー氏ニ由レバ鼓室粘膜ハ通常第一期耳癌ノ首部ニシテ同氏ノ實驗セル三患者(三
歳、十八歳、三十五歳)ハ皆鼓室ヨリ他部ニ波及セリト云フ

耳癌ハ通常速ニ頭蓋腔ニ波及シ以テ鼻腔、歐氏管等ニ蔓延スル者ナリ

クレッチマン氏 Kretschmann ハ十六人ノ患者ニ就テ檢セシニ最モ多キハ四十歳六十歳ノ間
ニシテ持久性耳漏アリシ者ニ多カリシト云フ

〔症候〕劇烈ナル疼痛、多量ノ有臭混血性膿汁、眩暈、耳鳴、重聽、耳聾、顔面神經麻痺等ノ

諸症狀ヲ發ス

〔豫後〕癌腫新生物ハ漸々諸部ヲ侵襲シ早晚貴要ノ部分ヲ損害ス豫後不良ナリ

通常十八ヶ月間生ヲ保ツ者ニシテ其經過肉腫ヨリモ永シ特ニ小兒ニ於テ然リトス

〔療法〕先ツ外聽道及鼓室ヲ清淨ニシテ外聽道、鼓室、乳嘴突起等ニ腐壞組織アレバ之ヲ穿

開抓把ス可シ

結核

ルーゼ氏ハ一患者上皮癌ヲ患ヒシ者ヲ薩草那草末及ビ明礬ノ撒吹ニ由テ治癒セリト
云フ

(八) 結核 Tuberculose.

鼓室内ヨリ結核微菌ヲ始メテ發見セシハエシレエ氏 Eschle ナリハアベルマン氏ハ鼓室結核
患者八名ニ就キ詳細ノ報告ヲナセリ即チ氏ハ悉ク結核微菌、巨細胞、粟粒結核等ヲ發見セリ
ト云フ

シワルゼ氏ハ結核性小兒ノ鼓室内面ニ結核性小顆粒狀小結節ヲ生ゼル者ヲ屢々實驗セリト
云ヒシエツツ氏 Schütz ハ豚ノ鼓室ニハ頗ル多ク結核ヲ生ズル者ナルコトヲ報告セリモース氏
ハ一ノ肺結核患者死亡後鼓室化膿ニ兼テ乳嘴突起中央部ノ腐骨板アルヲ發見セリ而シテ患
者生前毫モ局部ノ發症ヲ訴ヘザリシト云フ

ホリゼル氏ハ一肺結核患者(二十八歳ノ婦人)四年前ヨリ右側惡性耳漏ニ罹リ乳嘴突起ノ壁
診上毫モ變常ナキ者剖檢ノ際甚シキ腐骨疽ニ陥キリシ者ヲ見タリト云フ

〔療法〕先ツ殺菌法ヲ施ス、ブラウ氏 Braun ハ沃度仿謨ヲ賞用ス

コッホ氏「ツベルクリン」注射法 Koch'schen Tuberculininjektion モ屢々用キタル人アレ

ドモ特別ノ效ナシワルブ氏ニミ等ハ却テ膿ノ分泌ヲ増多スト云ヘリ
予ハ硼酸亞爾個保爾ヲ點耳シテ屢著效ヲ奏セリ

(九) 狼瘡 Lupus.

グラデニゴ氏ハ鼓室ト共ニ外耳内耳ニモ狼瘡ヲ生ゼル一患者ヲ報告セリ

(十) 梅毒 Syphilis.

モース氏、スタインブリッゲ氏、キルヒテル氏等ハ鼓室壁特ニ鼓室脚部ニ謾謾腫ヲ生シ血
管ノ小細胞滲潤及扁豆形骨成形ヲ生ゼシ者ヲ報告セリ

[療法] 一般ノ梅毒療法ニ從ヒ局部ヲ制腐シ汞劑、沃度劑等ヲ與フ可シ

鼓室硬變

第十一章 鼓室硬變 Otitis med. sclerotica (Die Sclerose der Pau-

kenhöhle.)

鼓室硬變ハ鼓室ノ慢性加答兒及持長性歐氏管ノ腫脹等ニ由テ發スルモノ多キヲ以テ特ニ章
ヲ設ケテ論述セズシテ他ノ諸症ト合論スル者多シ

[原因] ハ慢性鼓室加答兒、歐氏管閉塞及ビ狹窄ノ持久セル者ニ發シ又貧血、惡液質、腺病

原因

狼瘡

梅毒

症候

質、神經質等ノ者罹リ易ク特ニ婦人ニ於テ然リ亦諸家ノ說ニ由レバ遺傳モ頗ル關係アル者
ニシテ一家族數人同症ヲ患フル者アルハ往々吾人ノ實驗スル處ナリ
通常左右兩耳ニ侵サル、者タリ

[症候] 自覺症候ハ聽力減損、耳鳴ヲ以テ主トス

聽力減損ハ不知不識徐々ニ發スル者多ク卒然來ルハ殆ンド稀ナリ故ニ患者ハ聽力減損ヲ訴
ヘズシテ他ノ發症ノ爲メニ診ヲ乞ヒ醫師ノ精細ナル試驗ニ由テ始メテ重聽アルヲ知ル者多
シ重聽ヨリ耳聾ニ至ルノ間ハ頗ル迅速ナル者アリ或ハ緩徐ナル者アリ而シテ其重聽ハ精神
感動甚シキ時(例之親族ニ死亡者アル等)及重病後ニ著シク増進スル者ナリ

ウエーベルリール氏ハ進行性重聽ハ神經力障害即チ三叉神經痛ニ由テ喚起セララル、者ナル
可シトノ考案ヲ出シキルヒテル氏ハ三叉神經刺戟ハ鼓室粘膜ニ作用ヲ及ボスヲ疑フベカラ
ズト云ヘリ神經質ノ者之ニ罹リ易キ等ハ又頗ル關係アル可シ

耳鳴ハ多クハ持続性ニシテ往々睡眠ヲ妨グルニ至ル者アリ

腦壓迫ノ症狀ハ頭重壓推ノ感ヲ訴フ又此症ニテ低音ハ能ク感シ高音ハ却テ能ク感ゼザル者
及ウイエルシイ氏聽覺錯雜 *Musculus Willisii* (他ニ躁鳴アルトキハ能ク聽取ス上卷二十八頁

診断

ヲ看ヨ^ララ來ス^コハ屢^ク特徴トシテ論ズル者タリ
他覺症候ハ鼓室粘膜炎著シク削瘦硬變シテ石灰沈着ヲ見、深層ハ纖維結締組織增生シ小聽骨關節ハ癒着シ又馬鐙骨ノ卵圓窓ニ固着セルヲ見ル^コアリ

〔**診斷**〕鼓膜ハ腐蝕シテ白色透明、赤色、黄色等トナリ槌骨柄ハ長サヲ變ジテ著シク突隆ス
デルスタンチ氏其他ノ外聽道稀釋裝置ヲ以テ鼓膜ノ運動ヲ試ムルニ膜部ノミ運動シテ槌骨柄ハ運動スル^コナシ

硬變尙新シキトキハ弛緩膜運動シ槌骨ト癒着スル^コ之ナキモ慢性ノ加答兒ニ於テハ弛緩膜牽縮シ著シク槌骨ト癒着シテ運動ヲ失ス可シ

聽診上通常歐氏管「カテーテル」ニテ能ク通氣ス又往々歐氏管ノ擴張セル者アリ然ルトキハ強キ乾性水泡音ヲ聽ク通氣法ノ後ハ健全ノ鼓膜及慢性加答兒等ノ如キ血管ノ膨大ヲ見ル^コ少ナシ

通氣法ニ由テ一時快癒ヲ覺ユル者アリ或ハ忽チ聽力減損、耳鳴ヲ増シ眩暈ヲ來ス者アリ

〔**豫後**〕鼓室硬變ハ不治ノ症ニ屬ス豫後不良ナリ時トシテ一二年間治療ニ由テ輕快スル者アレドモ甚稀ナリ

豫後

療法

〔**療法**〕不治ノ症ヲ治セントスルハ醫師ノ最モ勉ムル處ニシテ此症モ亦古來諸大家ノ治療法ヲ施ス頗ル多シト雖凡效ナキヲ如何セン「カテーテル」通氣法、鼓膜穿開術、藥液注入、電氣療法、按摩法等到ラザルナク殊ニケツセル氏ガ鼓膜ヲ切除シテ槌骨、馬鐙骨ヲ抽出スルノ手術ノ如キハ一時大ニ行ハレタリシカル^レゼ氏ガ多數ノ患者ニ之ヲ行ヒ一モ效ヲ奏セシ者ナシト論ゼシヨリ世人之ガ手術ヲ中止セリ

其他シワルゼ氏 *Schwartz* ブツ^ハロー氏 *Boucheron* ミオ氏 *Miot* 等ノ小聽骨抽出術ノ如キモ亦著效アルヲ見ザルハ歎ズベキ^コナリトス

沃度、規那、砒石、鐵等ノ變質強壯劑ヲ與ヘ居ラ氣候温暖ノ地ニ轉ジ適宜ノ運動ヲ命ズベシ

第十二章 鼓室神經痛 *Otalgia tympanica.*

鼓室神經痛

原因

鼓室神經痛トハ外聽道及鼓膜等ニ一ノ注目スベキ炎症症狀ナクシテ發スル疼痛ヲ云フ
〔**原因**〕鼓室粘膜炎ハ神經網ヲ有ス其神經網ハ舌咽頭神經、三叉神經、交感神經、後頭神經、前額神經其他諸種ノ神經ヨリ發セン纖維ヲ以テ構成スルガ故ニ若シ是等ノ諸部ニ疾病アルトキハ直接或ハ反射的ニ疼痛ヲ發シ易シトス

近隣諸臓ノ疾病例之鼻、咽喉、喉頭、口腔等ニ疾病アルトキハ爲メニ耳ノ深部ニ於テ著シキ疼痛ヲ喚起ス又齒ノ「カリエス」ニ依テ毫モ齒ニ疼痛ナキモ耳ニ著シキ疼痛ヲ發スルコトアルハ日常吾人ノ實驗スルモノナリ

又耳内一ノ耳痛ヲ起スベキ原因ヲ見ルコト能ハズシテ口腔等ニ原因ヲ探知シ得ルコト屢之アリ、口腔内疾病或ハ病菌脫去、腐骨齒填塞等ニ依テ耳痛ヲ免ル、コトアルハ往々見ル處ナリ又耳翼歐氏管等ノ疾病ニモ之ヲ合併ス可シトス

〔症候〕著シキ耳深部ノ疼痛殊ニ夜中ニ於テ甚シク、一二時ニ達スベク或ハ耳鳴、重聽ヲ發シ或ハ聽力過敏、顛顛骨近傍及乳嘴突起部、耳翼等ノ知覺過敏ヲ惹起ス疼痛ノ持續スルハ少ナクシテ多クハ間歇性ニ來ル者トス

〔診斷〕口腔、鼻咽腔ノ検査ヲナシ又其他種々ノ神經疾病ヨリ合併スル者ハ其經路ノ壓搾ニ依テ疼痛點ヲ感ズルヲ得可シ

〔經過〕特發性ナルトキハ治愈速ナル者ナレドモ他病ヨリ合併スル者ニ於テハ經過頗ル永シトス

〔療法〕原因療法ヲ行フニ必用ナリ齒腐骨及ヒ鼻咽腔、喉頭等ニ疾病アレバ之ヲ療シ三又神

症候

診斷

經過

療法

乳嘴突起外骨膜炎

經痛及其他神經痛ヲ合併スルキハ硫酸規尼涅〇、五乃至〇、八ヲ與フルガ如シ又雙蘭菊丁幾十乃至十二滴一日量、又莨菪丁幾ノ效ヲ奏スルコトアリ其他沃度加里、莫兒比涅、格魯拉爾等ヲ用キ又電氣療法ヲ隔日ニ五乃至十分間施行シ芫菁ヲ乳嘴突起部ニ塗布スル等ナリ

處方

沃度丁幾 一、〇 阿片丁幾 一、〇 老利兒水 四、〇 佩里設林 一〇、〇
蒸餾水 一〇、〇

右點耳料

處方

阿片丁幾 一、〇 老利兒水 四、〇 蒸餾水、佩里設林 各一〇、〇
右點耳料

疼痛頑固ニシテ容易ニ治愈セザル者ハ居ヲ溫暖ノ地ニ轉ゼシメ頭部ノ「フラチル」燈法等ヲ施シテ效ヲ奏スルコトアリ

第十三章

乳嘴突起外骨膜炎 *Periostitis externa des Tragusfortsatzes.*

原因	症候	豫後
<p>〔原因〕乳嘴突起外骨膜炎ハ第一期ニ來ルコト甚ク稀ニシテ多クハ他ノ諸病ニ續發スル者ト ス即チ感冒、損傷、腺病質等之ガ誘因トナル最モ多ク外聽道、鼓室、乳嘴蜂窠等ノ炎症ヨリ續 發シ又時トシテ刺戟性藥物注入ノ爲メニ之ヲ喚起スルコトアリ</p>	<p>〔症候〕病側頭痛ヲ發ス若シ其部ニ膿膿スルトキハ刺スガ如キ脈動ニ伴フ疼痛ヲ發ス而シ テ其疼痛ハ晝間ニ於ケルヨリ夜間ニ於テ甚シトス發熱ハ小兒ニ於テハ頗ル高度ニ達シ間 危険ノ症狀ヲ呈スル者アリ</p>	<p>骨膜炎若シ鼓室ノ疾病ヨリ續發スルトキハ腫脹發赤ハ乳嘴突起ノ周圍ヨリ始マリ終リニ耳 翼ノ附着部ニ達スル者トス</p> <p>〔豫後〕若シ適當ノ治療ヲ施ストキハ豫後ハ不良ナラズト雖モ手術ノ後レタルモノ及營養 不良ナルトキハ乳嘴突起ノ骨疽及骨瘍ヲ生スルコト稀ナラズトス</p>

療法	乳嘴蜂窠炎
<p>〔療法〕初期ハ乳嘴突起發赤部ニ三乃至六條ノ水蛭ヲ貼シ後、緩和柔軟ナル巻法ヲ施シ下 劑ヲ投ジテ腸管ニ誘導シ又水巻法、沃度丁幾塗布等ヲナス而シテ水巻法ハ若シ乳嘴突起尖 端知覺過敏ナルトキハ持續セシムルヲ要ス</p>	<p>炎症若シ外聽道ヨリ來ルトキハ時トシテ外聽道上後壁ヲ切開スルニ依テ腫脹疼痛緩解シ癒 ヌルコト往々之アリ而シテ疼痛劇烈已ミ難キトキハ膜ヲ貫テ骨質迄切開ヲ及ボス可シ術式ハ 耳翼附着部ヲ沿フテ上方ヨリ下後方ニ向テ三仙迷ノ長サニ切開ス可シ切開ニ由テ來ル出血 ハ頗ル多キ者ナレドモ通常「ガーゼ」ヲ以テ栓塞スルトキハ止血スル者トス若シ膿瘍ヲ生ゼ シトキハ勉メテ深ク廣ク切開シ腐敗セル組織ヲ搔把シ防腐藥ヲ以テ能ク洗滌シ沃度仿謨 「ガーゼ」ヲ貼シ密ニ綑帶ス可シ骨質若シ柔軟トナルトキハ其腐骨部ヲ銳匙ヲ以テ能ク搔把 シ清淨ニス可シ</p>

第十四章 乳嘴蜂窠炎

Entzündung der Zellen des Warzenfortsatzes.

乳嘴蜂窠部ノ炎症ハ第一期ニ來ル者甚ク稀ナリトス即チ感冒、損傷、中耳炎ノ後其他最モ多

症候

キハ外耳炎乳嘴突起骨膜炎ニ續發スル者トス乳嘴蜂窩ハ或ハ多ク或ハ少カニ腫脹シ粘液膿様ノ分泌物ヲ以テ被覆セラル、ヲ見ル

時トシテ甚シク腫脹シ爲メニ乳嘴竇ト鼓室ノ聯合ヲ絶ツニ至ル者アリ又往々假性膜「ボリ」等ヲ生ジ永キ化膿ノ後ハ「コレステアリン」結晶及溶解性脂肪ヲ見ルコトアリ

〔症候〕化膿性炎症ハ殆ンド多クハ化膿性耳炎ニ因スル者ニシテ乳嘴突起ノ周圍部及項部

病側顔面半部ニ甚シキ脈動ニ伴フ疼痛ヲ發シ又惡寒、發熱、食慾缺乏等ノ諸症狀ヲ發ス

又數日若シクハ週餘疼痛ノ持續シ炎症漸次外部ニ波及スルトキハ其境界ニ浮腫ヲ生ジ外皮

ハ發赤緊張丹毒狀ヲ呈シ遂ニ波動ヲ觸知スルニ至ル可シ

膿ハ腫脹部ノ最モ柔軟部ヨリ破裂シ或ハ外聽道ニ穿孔排出スルコトアリ

膿瘍ハ腦ニ向テ進行シ腦官能ノ障害ヲ惹起スルコトアリ又側竇靜脈炎、血栓等ヲ來スコト

少ナシトセズ

發病ノ初期ニ於テ骨膜炎ハ少シク皮膚ニ觸ル、モ知覺過敏ナレドモ蜂窩織炎ハ稍、強ク久ク壓スルニ依テ疼痛ヲ感ズルモノトス

〔豫後〕ハ近隣ノ臟器ヲ侵スト否トニ關ス即チ近隣ノ臟器ヲ侵スコト多クハ從テ不良ナリ

豫後

療法

〔療法〕人若シ乳嘴蜂窩ニ膿液ヲ分泌スルコトヲ確實ニ診斷シ得タルキハ鼓膜ヲ穿開シ或ハ切除スルコトヲナス可シ此手術決シテ恐ル可キ者ニアラズ骨質若シ柔軟トナルトキハ軟骨刀ヲ以テ之ヲ切除シ能ク清潔ニ保持スルヲ要ス又病患部ヲ全ク切除スルヲ要スルコトアリ

第十一編 迷路ノ疾病 Krankheiten des Labyrinthes.

解剖

迷路 Labyrinth ハ一名之ヲ内耳 Annus interna ト稱シ聽器ノ最貴要部ニシテ顛顛骨岩様部ノ内腔ニ存在シ液體ヲ含有スル骨質ノ管腔ナリ其形狀ハ甚々不整ニシテ迷路ノ名ヲ命スル所以ナリ

迷路ヲ區別シテ骨様迷路 Knocherne Labyrinth 膜様迷路 Membranöse Labyrinth トナス

(一)骨様迷路ハ骨組織ヨリ成リ殊ニ硬固ニシテ大人ニ於テハ其厚サ通常二乃至三ミリメートルヲ算ス

骨様迷路ヲ別テ前庭 Vestibul (Vestibulum) 三半規管 Canals semicircularis 蝸牛殼 Cochlea ノ三部トナス

(イ)前庭ハ卵圓形ノ不規則ナル腔窩ニシテ内聽道ト鼓室トノ間ニ位シ長徑五、五乃至六、〇ミリメートル横徑三、五ミリメートルヲ算ス前壁ニ二窩アリ一ヲ正圓窩 Fossa rotunda 一ヲ橢圓窩 Fossa ovalis ト名ツク其二窩ノ中間、一線ヲ横通ス之ヲ前庭櫛 Crista

vestibuli ト云フ又内側ニ前庭神經ノ入ル可キ數箇ノ孔ヲ有ス之ヲ篩孔 *Menbrae cribrosae* ト云フ

(ロ) 三半規管ハ直徑〇、八乃至一、七「ミリメートル」ニシテ橢圓形ノ横断面ヲ現ハス而
ノ前額弓狀管又上半規管 *Frontalis sc. obver Bogengang* 水平弓狀管又外半規管 *Horiz-*
ontalis sc. auserer Bogengang 矢狀弓狀管又下半規管 *Sagitalis sc. unterer Bogengang*
ノ三規管ニ分ツ

上半規管ハ全管ノ三分二ヲ領シ其長サ大凡一五「ミリメートル」ニシテ岩様部ノ前面ニ
對シテ横徑ニ占居ス

外半規管ハ全管ノ二分一ヲ領シ其長サ大凡一二「ミリメートル」ニシテ上及下半規管ノ
中間ニ地平ニ占居ス

下半規管ハ全管ノ三分二以上ヲ領シ其長サ大凡一八「ミリメートル」ニシテ縱徑ニ位ス
三半規管ノ前後兩端ハ三箇ノ内耳壘 *Ampullen* 二箇ノ脚 *Schenkeln* ニ由テ前庭ニ開口ス
ル者ナリ

(ハ) 蝸牛殼ハ殼狀ノ腔洞ニシテ前庭ノ前側ニ占位ス其高サ五「ミリメートル」基根部ノ

圖五十七第



迷路(前庭、蝸牛殼
及三半規管)ヲ示
ス
〔イ〕前額弓狀管
又上半規管
〔ロ〕水平弓狀管
又外半規管
〔ハ〕矢狀弓狀管
又下半規管

圖六十七第



右側迷路
〔イ〕前額弓狀管
又上半規管
〔ロ〕水平弓狀管
又外半規管
〔ハ〕矢狀弓狀管
又下半規管

ノ直徑十「ミリメートル」ヲ算シ諸家ノ調査ニ
由レハ其殼洞ハ二ト二分ノ一回乃至二ト四分
三回廻旋スト云フ其内側ハ内聽道ニ界ス
蝸牛殼ヲ分テ骨軸板 *Laminae motile* 骨螺旋板
Lamina spiralis ossis 骨螺旋管 *Canalis spiralis*
ossis ノ三部トナス
骨軸板ハ蝸牛殼ノ基底ヨリ尖頂ニ向ヒ圓錐形
海綿狀ニシテ聽神經ヲ通ス可ク夥多ノ小管ヲ
具有ス
骨螺旋板ハ骨螺旋管内ニ向テ挺出セル菲薄ノ
膜ニシテ一線ハ骨軸ニ附着シ一線ハ遊離ス其
廻轉ハ二ト二分ノ一乃至二ト四分ノ三ナリ又
此板ヲ以テ骨螺旋管ノ内腔ヲ中隔シ鼓室道
Scala tympani 及前庭道 *Scala vestibuli* ノ二ト

ナス
 骨螺旋管ハ前庭ノ一系ニシテ骨螺旋板ヲ圍繞シ骨螺旋板ト同一ノ廻轉ヲナシテ圓形ノ
 盲端ニ終ル其端ヲ蝸牛殻穹窿 *Cupula Cochlearis* ト云フ
 (二) 膜様迷路ハ骨様迷路内ニ存在ス之ヲ分テ膜様前庭部 *Vestibulum membranaceum* 膜様
 三半規管部 *Canalis semicircularis membranaceus* 膜様蝸牛殻部 *Cochleara membranacea* ノ三
 部トナス
 膜様迷路ハ結締織ヨリ形成セル菲薄ノ膜ニシテ其内外ニ淋巴液ヲ充ス内淋巴、外淋巴
 是ナリ内面ハ扁平上皮ヨリ成ル
 (イ) 膜様前庭部ニハ楕圓囊 *Sacculus otitis (triculus)* 正圓囊 *Sacculus rotundus* 聽斑 *Macula
 acustica* 内淋巴管 *Ductus endolymphaticus* 等アリ
 楕圓囊ハ長圓管狀ニシテ正圓囊ヨリ大ニ長サ六「ミリメートル」アリ前庭ノ楕圓窩ニ占
 位ス
 正圓囊ハ四管狀ニシテ前庭ノ正圓窩内ニ占位シ後上壁ハ楕圓囊ト癒着ス
 楕圓囊及正圓囊ハ前庭導水管 *Aqueductus vestibuli* ニ通スル小管ニ由テ相連合ス又此

囊壁ニハ神經ノ末梢分佈シ内側ニハ耳石 *Otolithum* ヲ附着ス耳石ハ諸家ノ顯微鏡的檢
 査ニ由レハ最モ細微ナル炭酸加爾基ノ結晶ナリト云フ
 聽斑ハ楕圓囊及正圓囊ノ内壁ニ存スル稍肥厚豐隆セル部ニシテ則チ前庭神經ノ穿入
 部ナリ
 内淋巴管ハ楕圓囊及正圓囊ニ連接シ前庭導水管内ニ入り盲端ニ終ル者ナリ
 (ロ) 膜様三半規管部ハ直徑〇、五「ミリメートル」ニシテ骨三半規管内ニ占位シ内ニ淋
 巴ヲ含有ス而シテ内耳壙ハ骨管ニ於ケルヨリハ著シク膨大シ扁平トナリテ楕圓囊ニ移行
 ス其移行部ノ内面ニ半月狀隆起ヲ現ハス名ツケテ聽櫛 *Crista acustica* ト云フ神經及血
 管ノ進入スル處ナリ
 (ハ) 膜様蝸牛殻部ハ蝸牛殻道 *Ductus Cochlearis* 基礎膜 *Membrana basalis* ライステル
 氏膜 *Membrana Reissneri* 等ヨリ成ル
 蝸牛殻道ハライステル氏膜ノ上、螺旋板ノ下、蝸牛殻ノ外壁ニ位シ蝸牛殻神經ノ末端ヲ
 分佈スル者ナリ
 外壁ハ蝸牛殻内上面ノ骨膜組織ヨリ成リ下壁ハ骨螺旋板ニ向テ四十五度ノ角度ヲ以テ

外壁ニ連ル此壁ヲ名ツケテライステル氏膜ト云フライステル氏膜ハ扁平上皮ヲ以テ被覆セラル、薄膜ニシテ蝸牛殻道ノ外壁ニ緊張ス

鼓室壁ハ蝸牛殻道中ノ最モ貴重ニ且最モ趣味アル部ニシテ骨螺旋板上ニ於テライステル氏膜及膜螺旋板ノ起根部ヨリ螺旋鞴帶附着部迄ノ間ナリ此部ニ螺旋鞴 *Crista spiralis* ヲ現ハシ此螺旋鞴ハ上方及下方ニ鈎狀ヲナシテ延長シ内螺旋溝 *Sulcus spiracularis* ヲ形成ス、上鈎 *Oberer Haken* 即チ迷路唇 *Labium vestibulare* ハコルチ氏膜 *Cortische Membran* ヲ形成シ下唇 *Unterer Haken* 即チ鼓室唇 *Labium tympanicum* ハ基礎膜ヲ超ヘテコルチ氏機關 *Cortische Organ* ヲ負フ者ナリ

螺旋鞴ハ迷路唇ニ對シテ鞋狀ヲナシ無數ノ銳利櫛狀板ヲ具フフシケ氏 *Huschke* ハ之ヲ聽齒 *Gehörzähne* ト稱セリ其數ハレチウス氏 *Reissner* ニ由レハ二千五百箇アリト云フ而シテ螺旋鞴ハ骨膜層ノ外ニシテ結締織基礎膜ヲ硝子様無細胞層ニテ被覆セラル、者ヨリ成リ血管ヲ通ス

神經孔ハ螺旋列ヲ形成シレチウス氏ニ由レハ其數四百箇アリト云フ

基礎膜ハ螺旋鞴ノ鼓室唇ヨリ螺旋鞴帶ニ達スルノ間ニシテコルチ氏機關ヲ荷フ

コルチ氏機關ハ上方關節狀ニ結合セル處ノ二箇ノコルチ氏柱 *Cortischen Pfeilern* (又聽棒 *Bacille acustica*) ヲ成リ隧道狀ヲナシテ各箇各別ニ配列シ頗ル美觀ヲ呈ス其内柱ハ鼓室唇上ニ配列シ外柱ハ固有基礎膜上ニ配列セラル、者ナリ

内柱ハ外柱ニ比スレハ稍短ク且ツ嶮岨ニシテレチウス氏ニ由レハ其數内柱ハ大凡五千六百箇外柱ハ三千八百五十箇ナリト云フ而シテ外柱一箇ハ内柱二箇乃至三箇ニ連結セラル、ヲ見ルナリ

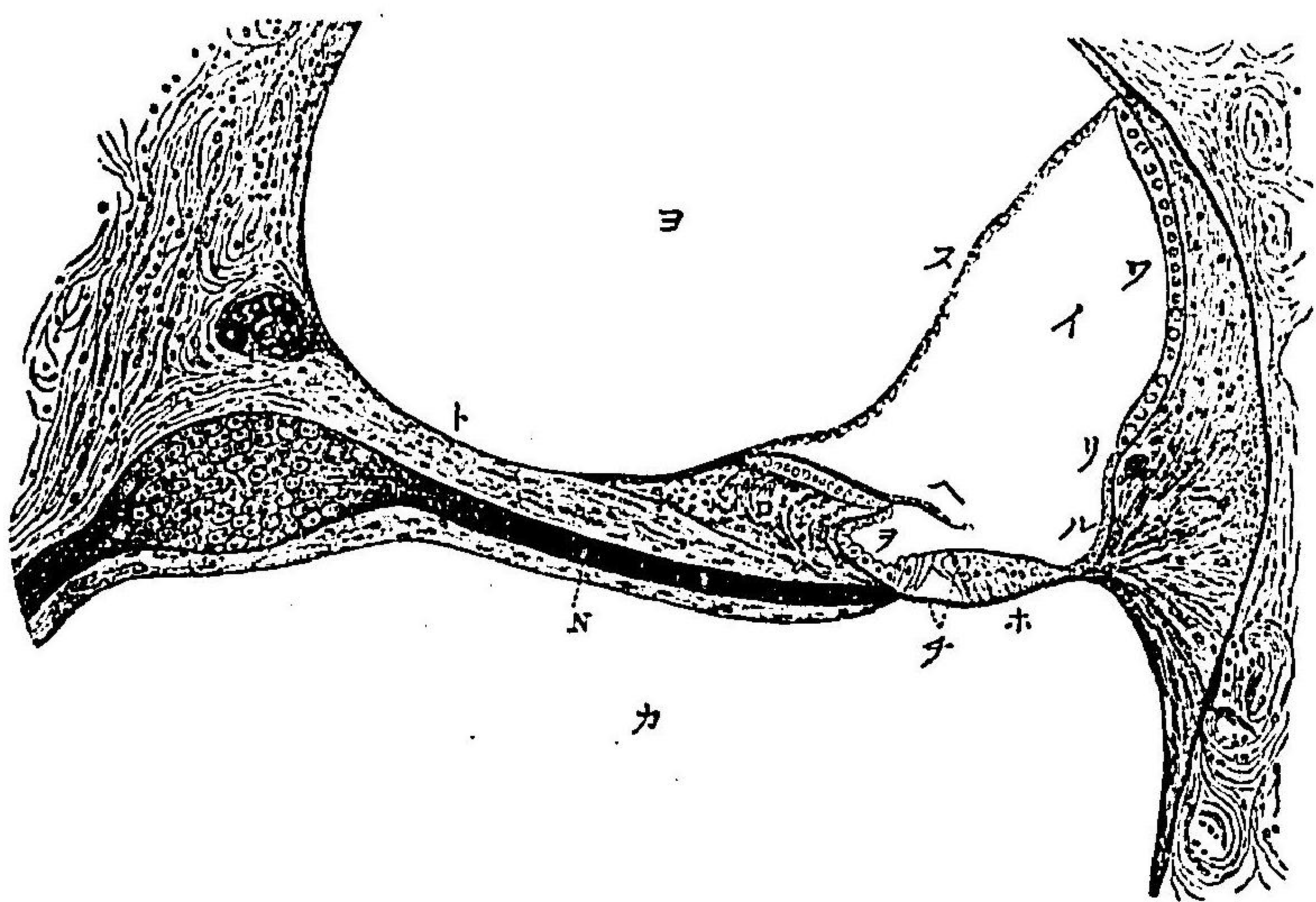
内、外二柱ニハ各桿子狀細胞 *Stäbchenzellen* 或ハコルチ氏細胞 *Cortische Zellen* ヲ附着ス

内桿子狀細胞ハ圓錐形ニシテ内柱ノ小板上ニ一列ニ配列シ外毳毛細胞ハ外柱ノ外方ニ於テ膜螺旋板上ニ三列ニ配列ス内桿子狀細胞ハレチウス氏ニ由レハ其數三千五百箇、外桿子狀細胞ハ其數大凡ソ一萬三千箇ナリト云フ

内外二列ノ細胞間及外柱ト外桿子狀細胞ノ第一列ニハ液體ヲ充填セラル而シテ柱ト細胞トノ間ニハ神經纖維ノ末梢ヲ分佈スルモノナリ

コルチ氏膜ハライステル氏膜ノ末端ヨリ外桿子狀細胞ノ終列ニ至ル部ヲ稱ス

第七十七圖



- 「メ」メーラシヨインノ蝸牛殻廻轉横断面
- 〔イ〕蝸牛殻道
- 〔ロ〕前庭櫛
- 〔ハ〕螺旋櫛
- 〔ニ〕螺旋靱帯
- 〔ホ〕基礎膜及
- コルチ氏機關
- 〔ヘ〕コルチ氏膜
- 〔ト〕骨螺旋板
- 〔チ〕コルチ氏機關柱
- 〔ヰ〕螺旋隆起
- 〔ス〕ライステル氏膜
- 〔ル〕外螺旋管
- 〔チ〕内螺旋管
- 〔ロ〕血管溝
- 〔カ〕鼓室道
- 〔ヨ〕前庭道

神。經。

聽神經 *Nervus acusticus* ハ前後二枝トナリテ來ル前ヲ蝸牛殻神經 *Nervus Cochleae* 後ヲ前庭神經 *Nervus vestibuli* ト云フ前枝ハ後枝ヨリ短大ニシテ更ニ岐レテ數枝トナリ膜螺旋板ノ小管ヲ經テ骨螺旋板部ニ至リ末梢ハ基礎膜ニ分佈ス後枝ハ岐レテ上、中、下ノ三枝トナリ上枝ハ楕圓囊及上、外兩半規管ニ分佈シ中ハ正圓囊ニ下ハ下半規管ニ分佈ス

血。管。

迷路ノ動脈ハ基礎動脈 *Arteria basilaris* ヨリ内聽動脈 *Arteria auditiva interna* トナリ血液ヲ輸送スル者ナリ

内聽動脈ハ岐レテ蝸牛殻動脈 *Arteria cochleae* 前庭動脈 *Arteria vestibuli* トナル

蝸牛殻動脈ハ更ニ三三四條ノ分枝トナリ蝸牛殻ノ骨膜及膜樣部ニ分佈シ前庭動脈モ亦數枝ニ岐レ前庭及三半規管ノ骨膜ト膜樣部トニ分佈ス

靜脈ハ左ノ數枝アリ

内聽靜脈 *Vena auditiva interna* ハ下岩樣部竇 *Sinus petrosus inferior* ニ前庭導水管靜脈 *Vena aquaeductus vestibuli* ハ上岩樣部竇 *Sinus petrosus superior* ニ蝸牛殻導水管靜脈

Vena aqueductus Cochlearis ハ頸靜脈 *Vena Jugularis* ニ經過スル者ナリ

生理

迷路ノ官能の理論ニ就テハ模糊トシテ未タ判明ナラサル處多シ
抑迷路ノ音響ヲ感受スル理由ハ之ヲ略言スレハ鼓室ノ生理篇ニ詳述セル理ニ由リテ音
波ヲ迷路ニ傳ヘ迷路内ニ存スル迷路液、耳石等ノ機關アツテ器械的刺戟ヲ膜様迷路ニ
分佈セル聽神經末梢ニ及ホスニ在リ

ヘルムホルツ氏 *Helmholtz* ハ雜音 *Geräuschen Schalleiten* ハ前庭ニ於テ之ヲ感受シ韻律
的音 *Rhythmischen Geräusche* ハ蝸牛殼ニ於テ感受スル者ニシテ又蝸牛殼中ニモ高低種
々ノ音ヲ聽別スル處アルナラント推察セシヲアリシカ近時ニ至リ種々ノ理論上ヨリ再
ヒ其判明ナラサルヲ稱ヘタリ

ヘルマン氏 *Hermann* 曰ク迷路液ハ馬鐙骨ノ運動ヲ適宜ニ避ケテ一方ニハ内耳壘、半規
管ニ一方ニハ鼓室道、前庭道及正圓窓ノ膜ニ運動ヲ及ホス者ナル可シト
内耳壘ニ於テ迷路水ハ聽毛細胞ニ運動ヲ及ホシ同時ニ上皮様蝸牛殼管ニ於テ複雑
ナル構造ヲ有スルコルチ氏機關ハ可聽的音波系統ノ分析ヲナス者ナル可シ

ヘルムホルツ氏曰ク基礎膜トコルチ氏柱トノ關係ハ恰モ絃線ノ如クニシテ茲ニ複雑ナ
ル音波ヲ分析シテ大小種々ノ音響トシテ感受セラル、者ナリト

ヘンゼン氏 *Hensen* 及 ハッセ氏 *Hasse* ハ蝸牛殼穹窿ノ第一廻轉ニテハ高音ヲ、上廻轉ニ
テハ低音ヲ感受スル者ナル可シトノ説ヲ出シバギンスキー氏ハ之ヲ動物試験ニ徴シモ
ース氏ハ臨床的ニ之ヲ證セリ

諸家ノ説ニ由レハ定節性振動ハ純粹音ヲ聽取シ一致合同スルキハ音調 *Klänge* ヲ生シ
數多ノ純粹音合同シ來ルカ或ハ速ニ錯雜シ來ルキ即チ不定節振動ナルキハ雜音 *Geräusche*
ヲ生スルナリトデンチルト氏 *Danzon* ハ音調ト雜音トハ音ノ性狀全ク相區別ス可
キ者ニシテ右ニ述フル所ノ説ハ信シ難シト云ヘリ

フロレンス氏 *Flourens* ガ鳩ニ就テ試験セル處ニ由レハ半規管ハ體位ノ權衡ヲ保持
スルノ機關ニシテ外半規管ヲ切斷スルキハ頭部ノ急速ナル振動狀運動ヲ始メ同時ニ眼
ノ顫動 *Oscillation* ヲ來シ垂線軸ヲ廻轉ス

下半規管ヲ切斷スルキハ頭部ヲ前後ニ振動シ兼テ後方ニ舉尾狀運動 *Purzelbewegung* ヲ
ナス

上半規管ヲ損傷スルキハ頭部ヲ前後ニ振動シ兼テ前方ニ舉尾狀運動ヲナス
 上、下、外、三、半、規、管、ヲ、同、時、ニ、切、斷、ス、ル、キ、ハ、合、同、運、動、ノ、障、害、ヲ、喚、起、ス
 プロエエル氏 *Brewer* ノ試験ニ由レハ鳩ノ膜様半規管ニ輕キ觸接ヲ致スルハ其部ノ内
 耳壘ニ向テ突如トシテ頭部運動ヲ始ムト云フ
 フローレンス氏及ゴルツ氏 *Goltz* 等ノ試験ニ由レハ偏側ノ膜様半規管ヲ切斷スルキハ
 損傷未タ癒ヘサルモ徐々ニ尋常ノ運動ニ復スル者ナリト
 マツハ氏 *Mach*、プロエエル氏、ブロン氏 *Bron*、キオン氏 *Kion* 等ハ異口同音ニ半規管
 ノ官能的作用ハ體位ノ權衡ヲ保持スルノ用ヲナス者ナリト説ケリ
 バギンスキー氏ハ半規管ノ損傷ニ由テ體位權衡異常ヲ來スハ神經中樞ニ損傷ヲ及ホス
 ニ原ツク者ナル可シト云ヘリ
 ウルバンチツチ氏ハ骨様半規管ヲ露開スルモ體位ノ權衡障害ヲ認メスシテ膜様半規管
 ヲ觸接スルニ至リテ始メテ之ヲ喚起スルコトヲ實驗セリ
 モース氏ハ半規管損傷シテ體位權衡障害ヲ來スハ小腦ノ反射的刺戟ヲ喚起スル者ナル
 可シト説ケリ

スパアメル氏 *Spanner* ハ骨様半規管ヲ露開スルキハ進行運動ノ障害ヲ來シ又同血管ノ
 損傷ヲ受クルキハ膜様半規管ヲ露開セルカ如ク振動狀運動ヲ來スコトヲ實驗セリ
 ステファン氏 *Stephan*、ワイズ氏 *Wiss* 等ハ半規管ヲ手術シテ一二週ノ後、小腦ヲ檢セシ
 ニフルキンデエ氏細胞ノ變化ヲ認メタリト云ヒ又スパアメル氏ハ同一ノ検査ヲナセシ
 モ之ヲ確ムルコト能ハザリシト云フ
 半規管ノ刺戟ノ爲メニ眩暈ヲ起スコアルハ恐クハ小腦ノ反射的作用ニ因ス可シト説ク
 者アリ、プロエエル氏ハ半規管ニ電氣ヲ通スルキハ其反應著シク、小腦ニ通スルキハ反
 テ之ナカリシト云フ
 クツルマク氏ハ半規管切斷試験ニ由テ嘔吐ヲ發セシコトヲ實驗セリ
 エワルド氏ハ骨半規管ヲ露開シ其嚙口ヲ金「アマルガム」ニテ充填セシニ全身横紋筋ノ
 削瘦セル者ヲ見タリト報セリ
 ブロン、セカード氏 *Brown-Séquard* ハ蛙「カニンヘン」メーシワイン等ニ就テ聽神經
 及顔面神經ノ刺戟及切斷ニ由テ體位權衡障害ヲ喚起スル者ナルコトヲ試驗セリト云フ
 體位權衡保持ノ機關ハ唯リ半規管ノミナラズ、腦ノ第三室ノ灰白質及橄欖體等ニモ存ス

ルナラント説キシ者アリ
 聽神經中樞 聽神經ノ中樞モ他ノ諸中樞ニ於ケルガ如ク古來諸家ノ之カ探求ニ從事セ
 ル者少ナカラス就中ウエルニツケ氏 *Fernike* ノエルリール氏 *Levier* 等ノ詳細ナル試
 驗ニ由テ其中樞ハ上顛顛彎曲ナル可シト決定セリフエルリール氏ハ猿ニ就テ上顛顛彎
 曲部ヲ刺戟セシニ速ニ反應ヲ起シ反對側耳翼ノ起立、眼瞼廣開、瞳孔散大、頭部廻轉、
 眼球反對側傾向等ノ現狀ヲ呈セリ又同氏ハ進テ同一ノ試験ヲ犬、猫、「カニンヘン」等ニ
 モ施セリト云フ
 ルチアニー氏 *Lacaze* タムプリー氏 *Tamburini* 等ハ聽管剿滅ハ常ニ損害セラレタル
 反對側ニ來ル者ナリト云ヘリ

迷路成形異常

第一章 迷路成形異常 *Bildungsanomalie des Labyrinthes.*

迷路及聽神經ノ全缺損ハミツヘル氏其成形不能 *Bildungsmangel* ハモンタ、イン氏シワルゼ
 氏モース氏等之ヲ報道セリ
 ヒルトル氏ハ蝸牛殼導水管ノ缺損ヲホルトクニー氏モース氏スタインブリユゲエ氏等ハ兩

迷路成形過多

迷路ノ大サ及厚サノ變

迷路結合ノ變

側迷路ノ成形不能ヲ報告セリ

迷路ノ畸形ハ通常迷路中ノ一部ニ發スルヲ常トス例之ニ半規管、蝸牛殼等ノ缺損スル者及
 迷路膜様部缺損シテ骨様部ヲ存シ正圓窓、橢圓窓共ニ缺損スルヲアリ或ハ其一箇缺損スル
 ヲアルカ如シ

迷路ノ成形過多 *Bildungs excess* ニ就テハヒルトル氏ハ前庭導水管ノ重複セル者ゲルラ、ハ氏
 ハ水平弓狀管ニ二個ノ内耳壘ヲ有スル者ヲ報セリ

迷路ノ大サ及厚サノ變常 *Anomalie der grösse und Dicke* ニ就テハヒルトル氏ハ前庭導水管
 ノ著シク廣濶ナル者ヲゲルリムブレエ氏ハ前庭導水管廣濶ニ兼テ蝸牛殼導水管モ擴大セル
 者ヲ、ハアベルマン氏ハ一腦水腫患者ニ就テ導水管廣濶ナル者ヲ、ホッホダレク氏ヒルトル氏
 等ハ半規管ノ狹窄ヲ、トインビー氏ハ半規管ノ狹窄ニ兼テ骨質ヲ填充セル者、ヲポリゼル氏
 ハ蝸牛殼腔ノ化骨セル者等ヲ報道セリ

迷路結合ノ變常 *Anomalie der Verbindung* ニ就テハマンズフェルド氏 *Mansfield* ダルデル氏
Dankl 等ハ前庭ニ於テ鼓室道ノ病理的開口ヲ、ホルトリニー氏ハ蝸牛殼道ノ閉塞ヲ、モース
 氏ハ前庭及蝸牛殼ノ骨質狹窄ヲ實驗セリト云フ

迷路ノ貧血

第二章 迷路ノ貧血 *Anémie des Labyrinthes.*

急性迷路貧血ハ突然ノ大失血、内聽動脈或ハ基礎動脈ノ狹窄若クハ閉塞ニ因スル者ナリ
リードライヒ氏 *Reichert* ハ一患者突然重聽トナリシ者ニ就テ其基礎動脈血栓アル者ヲ實
驗セリ

慢性迷路貧血ハ一般身體貧血、惡液質、重病後、頻回ノ失血、血管ノ脂肪變性、加爾基變性、血
管壓搾等ニ由テ發スル者トス

ボリゼル氏ハ交感神經ノ刺戟或ハ血管ノ痙攣ニ由テモ貧血ヲ喚起スル者ナリト云ヘリ

〔症候〕急性貧血ハ耳鳴、眩暈、失神、重聽等ヲ來シ慢性貧血ニテハ重聽耳鳴ヲ主トス重聽
ハ急性貧血ニ於テハ一時之ヲ發スレドモ慢性貧血ニ於テハ永久之ヲ患フル者トス

頭部ニ血液ヲ輸送ス可キ作用ヲ施ストキハ諸症狀稍々緩解スル者トス

貧血持久スルハ漸次聽神經末梢ノ進行性瘦削ヲ來ス者ナル可シト云フ

〔療法〕先ツ全身貧血ノ状態ニ注意シ之ヲ恢復セシムルヲ要ス即チ強壯滋養藥ヲ投ジ居テ
氣候佳良ノ地ニ轉シ鐵泉ヲ服用セシメ或ハ浴治法ヲ命ズベシ

療法

症候

迷路ノ充血

血管神經ノ障害ヨリ來ル者ニハ臭素、規尼涅等ヲ與ヘ頭部交感神經ニ平流電氣ヲ通ズ可シ
〔頭部ニ消極ヲ置ク〕

第三章 迷路ノ充血 *Hyperémie des Labyrinthes.*

迷路ノ充血ハ汎發シ或ハ局發ス

〔原因〕窒扶斯、猩紅疹等ニ由テ來リ又心臟、肺臟等ノ疾病ニテ血行障害ヲ起シ之ヲ將來ス
又甲狀腺腫、上岩様部竇、内頸靜脈等ノ血栓、下頸神經節ノ神經力微弱、腦膜炎、腦實質炎、急
慢中耳炎、種々ノ藥物例之規尼涅、撒里矢爾酸、アミールニトリット等及亞爾個保爾、煙草、
炭酸等ノ中毒ニ由テ之ヲ發スル者トス

〔症候〕充血ハ一時ナルコトアリ或ハ永ク持續スルコトアリ永ク持續スルトキハ動モスレバ迷
路膜様部ノ肥厚或ハ色素變性、加爾基變性等ヲ發シ易シトス

耳鳴、眩暈、聽力微弱、頭部壓重ノ感、頭痛、惡心等ノ諸症狀ヲ發ス

又鼓膜及外聽道耳翼等ノ充血ヲ併發スルコトアリ

重聽ハ通常一時ニシテ歇ム者アレドモ充血持續スルトキハ重聽モ亦益々増進スル者アリ

原因

症候

療法

骨質傳達ハ多少微弱トナレドモ充血ノ消退スルニ從ヒ再ビ故ニ復スル者トム
〔療法〕先ツ顛顛部ニ水蛭ヲ貼シ下劑ヲ投ジテ腸管ニ誘導シ臭素劑ノ内用ヲ命ジ諸症狀永ク持續スル者ニハ頻回顛顛部ニ芥子泥ヲ貼シ或ハ按摩法ヲ施ス可シ
血行ヲ亢進スベキ原因アルトキハ能ク注意シテ之ヲ防グ可ク血管運動神經ノ麻痺ニ因スル者ハ頸部交感神經ニ電氣ヲ通ズ可シ

迷路出血

第四章 迷路出血 *Hämorrhagie des Labyrinthes.*

トインビー氏ハ迷路ノ先天性溢血及痛風、室扶斯、猩紅疹、麻疹、耳下腺炎等ニテ迷路ノ出血ヲ來セシ者ヲ見タリト云フ
シワルゼ氏ハ一蛋白尿患者突然耳聾トナリシ者ノ兩側迷路ニ數多溢血點ノ存スルヲ見タリト報告セリ
モース氏ハ實扶的里患者ノ種々ノ神經ニ出血アルト同時ニ聽神經幹ニモ亦出血アルヲ見タリト云フ
ハンサワソ氏及ビポリセル氏ハ室扶斯患者屍體ノ前庭ニ、ルーゼ氏ハ化膿性迷路炎患者ノ半

症候

規管ニ、ヘルレル氏ハ腦脊髓膜炎患者ノ半規管及蝸牛殼ニ出血性紫斑ヲ認メタリト云フ
〔症候〕ハ急性充血ノ如ク突然劇烈ナル耳鳴、體位權衡障害、惡心、嘔吐、聽力減退等ヲ來シ重症ニ於テハ兩耳聾トナル者アリ

豫後

〔豫後〕不良ニシテ時トシテハ聽力ノ恢復スル者アリ

療法

〔療法〕先ヅ顛顛部ニ水蛭ヲ貼シ冷罨法ヲ施シ適宜ニ腸管ニ誘導ス可シ

急性迷路炎

第五章 急性迷路炎 *Die acute Entzündung des Labyrinthes.*

(又急性内耳炎 *Otitis interna acuta*)

急性迷路炎ヲ確實ニ診斷シ之ヲ説明セシ者ハ其數多カラズトス何トナレバ其發症能ク單純腦膜炎若クハ流行性腦脊髓膜炎ニ類似スレバナリ

急性迷路炎ハ第一期ニ發シ又續發ス而シテ漿液性血樣液ヲ分泌スルコアリ或ハ膿樣液ヲ分泌スルコアリ時期ニ由テ分泌物ノ性質一樣ナラズトス

モース氏ハ實扶的里及ビ麻疹患者ニ就テ迷路及顛顛骨稜形體ノ微菌侵襲ヲ確證セリハアベルマン氏ハ結核性炎ヲポリセル氏ハ白血病性炎ヲ記載セリ

鼓室ノ炎症殊ニ鼓室壁ノ骨疽及ビ骨瘍ハ屢、續發性迷路炎ノ原因トナル者ナリ

ルーゼ氏ハ一患者化膿性中耳炎ヨリ空洞ニ由テ骨様迷路ニ化膿ヲ及ボシ迷路窓モ亦共ニ侵襲セラレ、ヲ見又同氏ハ一患者右ニ述ブル如キ原因ニテ蝸牛殼ノ化膿ヲ起シコルチ氏膜肥厚シコルチ氏纖維及ビ聽櫛尙ホ存在シ時儀ヲ頭部ニ壓抵スルトキハ聽力尙存スル者ヲ報ゼリ

モース氏ハ一室扶斯患者化膿性中耳炎ノ後、迷路ノ小細胞浸潤ヲ起セシ者ヲ實驗セリト云フ

續發迷路炎ハ骨様迷路ノ披裂ニ由テ來ル者多ク延テ頭蓋腔ニ及ボス者ナリ

ポリゼル氏ホルトリニー氏等ハ頭向墜落ニ由テ悪心、嘔吐、眩暈、耳鳴、耳聾ヲ發セシニ患者ヲ剖檢セシニ迷路ノ化膿性血樣滲出物及基底腦膜炎ヲ認メタリト云フ

迷路炎ノ頭蓋腔ニ蔓延スルハ必發ノ轉歸ニアラズ内聽道ノ膜ニ由テ頭蓋腔ト限界セラレ、故ニ迷路内ノ膿汁ハ凝結シ存ス可シ

頭蓋腔ヨリ迷路ニ炎症ヲ及ボスコトハ頗ル稀有ニ屬ス

ヘルレル氏及ルウゼ氏等腦脊髄膜炎ノ患者ニ就テ迷路ノ化膿ヲ發見セリト云フ

症候

ホルトリニー氏ハ急性迷路炎ハ小兒ニ多ク大人ニ稀ナルコトヲ說ケリ

〔症候〕初期既ニ頭痛、眩暈、嘔吐、發熱等ヲ發ス智識ノ變常ハ通常少ナクシテ譫妄ハ或ハ僅ニ發シ或ハ全ク發セズ

又輕症ニ於テハ胃加答兒、消化不良等ノ如ク重症ニ於テハ腦膜炎ノ如キ症候ヲ發スルモノニシテ頗ル長ク同一ノ經過ヲ取り速ニ恢復スルコトアリ或ハ一治一發遂ニ耳聾ニ陥キル者アリ又罹病ノ第一日ニ於テ既ニ完全耳聾ニ陥キル者アリ

〔療法〕頭部殊ニ乳嘴突起部ヲ充分冷却シ或ハ誘導法ヲ施ス可シ即チ耳後ニ水銀軟膏、沃度丁幾等ヲ塗布シ適宜ノ便通ヲ催ス可シ

末期ニ至リテ炎勢消退スル者ハ電氣ヲ通シ或ハ必魯加兒必涅溶液注射法ヲ施ス可シ

第六章 慢性迷路炎 *Die chronische Entzündung des Labyrinthes.*

(又慢性内耳炎 *Otitis interna chronica*)

慢性内耳炎ハ急性症ニ比スレバ頗ル多クシテ殊ニ膜様迷路部ノ變化ヲ來ス者ナリ

ホルトリニー氏ハ一耳聾者膜様迷路ノ肥厚セル者ヲ、モース氏ハ膜様螺旋板ノ肥厚シ細胞

慢性迷路炎

療法

泌潤、膜様迷路血管ノ増生、核ノ代謝等ヲ、シワルセ氏ハ迷路ニ新生結締組織ヨリ成ル處ノ帶赤灰色ノ組織片ヲ生ゼル者ヲ、ウーバル、リール氏ハ膜様半規管ノ著シク肥厚且ツ分裂セル者ヲ、グルーベル氏ハ囊及半規管ノ肥厚セル者ヲ、モース氏ハ膜様迷路ニ加爾基變性部アルヲ、ポリゼル氏ハ十三歳ノ患者蝸牛殻ノ完全骨質閉塞セルモノヲ實驗シ、ポリゼル氏ノ患者ハ三歳ニシテ耳漏ノ後耳聾トナリ歩行ハ常ニ蹣跚タリト云ヒ、グクデニゴ氏モ亦殆ンド同様ノ患者ヲ、クンドラアト氏 *Kundrat* ハ迷路ノ全骨質閉塞セル者ヲ各精密ニ報告セラレタリ

慢性炎症ハ急性症ヨリ轉ジ梅毒、腦病、慢性中耳炎、小聽骨ノ化膿及癒着等ニ由テ起ルモノ多シ

症候

〔症候〕劇烈ナル耳鳴、眩暈、歩行蹣跚、高度ノ重聽等ノ諸症狀ヲ發シ一治一發徐々ニ増進スル者多ク豫後ハ不良ナリトス

梅毒性迷路炎ハ多クハ兩側ニ來リ同時ニ鼓室及鼓膜ニ多少ノ變常ヲ呈スル者多シ骨質傳達消失シ高音ノ感受力減弱ス豫後ハ不良ナリ殊ニ虛弱ノ者ニ於テ然リトス但シ他ノ單純炎症ニ比スレバ治療上ノ成績稍、佳良ナリトス

療法

〔療法〕梅毒性ノ炎症ハ治療上最モ效ヲ奏スルコト多キ者ニシテ汞劑塗擦法或ハ沃度内服等ヲ行ヒ同時ニ四乃至五%ノ沃度仿謨溶液一乃至二瓦數週間持續シテ鼓室内ニ注入スルトキハ大ニ效力ヲ助クル者ナリ

グーエ氏ルーゼ氏ポリゼル氏ヤアコブソン氏モース氏ウオルフ氏等ハ必魯加兒必涅ノ皮下注射ヲ賞用ス即チ二%溶液四乃至十二滴毎日或ハ一週二三回注射スルニ在リキルヒチル氏ハ第一回ハ二%ノ溶液三滴ヨリ試用ス可シト云ヘリ何トナレバ必魯加兒必涅ハ各人特異素因ニ由テ其發症頗ル甚シキモノアリテ惡心、嘔吐、眩暈、心悸亢進劇シク發スレバナリト又同氏ハ其注射ニ由テ以上述べタル諸症狀劇烈ニ發スルモノニハ硫酸亞篤羅必涅〇、〇三蒸餾水一〇、〇右二滴ヲ適宜ノ水ニ點滴シテ服用セシム可シト云ヘリ

第七章 中毒性内耳炎 *Otitis interna durch Intoxicatio.*

迷路ノ炎症ヲ發起スル化學的物質ハ規尼涅、撒里矢爾酸、*ヘノボヂウム*油等ニシテ是等ノ藥物ハ一回大量ヲ用ケルカ或ハ少量ヲ永ク連用スルキハ耳鳴其他ノ聽機障害ヲ喚起シ甚シキハ全耳聾ニ陥キルコト少ナカラズ是レ迷路ノ充血若シクハ炎症ヲ喚起スルニ外ナラズ蓋シ

中毒性内耳炎

熱性病治療中不知不識是等ノ藥物ヲ過用シ不可救ノ聽機障害ヲ喚起スル者ナシトセズ慎ムベキナリローザア氏曰ク規尼涅服用ニ由テ迷路ニ充血ヲ起スルハ同時ニ鼓室ニモ波及スルモノニシテ同氏ハ迷路充血ニ兼テ桃骨部ノ血管充漲及視神經乳頭部ノ赤色ナルヲ實驗セリト云フ

キルヒチル氏ハ規尼涅ヲ種々ノ動物ニ試験シ三回迷路ノ充血及出血ヲ認メ一猫ノ如キハ蝸牛液部ニ著シキ大出血ヲ起セリト云フ

キルヒチル氏ニ由レバ規尼涅服用ニ因スル迷路ノ充血若クハ出血ハ恐クハ呼吸器ニ障害ヲ起シ次デ血行障害ヲ來スガ故ナル可ク即チ眼ノ痙性局所貧血 *ischemic* ト同様ノ症狀ナラント云ヘリ

ライモンド氏グラデスコ氏クナップ氏グリウニング氏ミッヘル氏等ハ眼ニ於テ規尼涅中毒ノ爲メニ中樞動脈及脈絡膜等ニ痙性局所貧血ヲ起スヲ説キ

ベッケル氏ホルネル氏等ハ鹽酸規尼涅注射ノ後ニ黑内障 *Amniotaxis* ヲ起シ兼テ網膜血管ノ顯著ナル痙性局所貧血ヲ見タリト云フ

聽器ニ於ケル規尼涅ノ障害モ亦視機ニ於ケルト同一ノ理由ニ基ツク者ナル可シト雖モ吾人

ハ大量ノ規尼涅服用後全耳聾及盲眼ヲ併發セル者ヲ實驗スルコトハ甚ダ稀ナリトス二三ノ報告ヲ記スルコト左ノ如シ

ローザア氏ハ一聞歇熱患者ニ六時間内ニ規尼涅四瓦ヲ服用セシメシニ全耳聾及盲眼トナレリト

ウトホフ氏ハ六十二歳ノ婦人ニ大量ノ規尼涅ヲ二回連用セシニ眩暈發作、耳聾、耳鳴次デ人事不省トナリ次日ニハ全耳聾兼盲眼トナレリ然シテ數日ノ後諸症狀稍、輕快セルガ如キモ尙ホ強度ノ盲眼ヲ殘セリ之ヲ檢眼鏡ニテ檢スルニ乳頭部ノ痙性貧血及削瘦アリ兼テ一二ノ血管閉塞セリト云フ

グラデニコ氏ハ規尼涅ノ慢性中毒ニ由テ完全耳聾兼盲眼トナリシ一童子ヲ報ゼリ該患者ハ種々ノ生活上及養育上注目ス可キ缺點ナカリシ某醫其脈頻數及發熱ニ對シテ屢、大量ノ規尼涅ヲ投ゼリ然ルニ或ル日患者突然耳聾及盲眼ヲ來シ顔色蒼白、體力疲勞、瞳孔散大、食思缺乏、神思不穩、不眠等ヲ喚起セリ檢眼鏡検査上乳頭部ニ大水泡ヲ生ズルヲ見ルノ他、網膜血管口徑ノ減少等ハ認ムルコト能ハザリシト云フ

第八章 メニール氏病 *Ménière's Disease*

メニール氏病トハ無熱ニシテ突然劇烈ナル眩暈ヲ發シ耳鳴、嘔吐、失神狀態、重聽、耳聾、廻轉運動等ノ諸症狀ヲ伴フノ症ナリ

メニール氏病ナル名ノ出デタル理由ハ千八百六十一年メニール氏巴里醫事新聞ニ依テ此患者ヲ報告シ之ヲ説明セシニ由ル者トス今メニール氏ノ報告セシ一患者ノ病歴ヲ簡單ニ述ブレバ患者ハ一處女ニシテ感冒後突然耳聾トナリ劇烈ナル眩暈ト輕微ノ廻轉運動ノ症候ヲ供ヘ五日ノ後死亡セリ死後之ヲ解剖シ腦及脊髓ヲ點檢セシニ毫モ異常ヲ呈セザリシカ之ニ反シテ三半規管ハ赤色ヲ帶ブル液體ヲ含有スルコトヲ認メタリ茲ニ於テ氏ハ曰ク此病原ハ迷路及中耳邊ノ異常ニ歸スベシト

予思ラクメニール氏ガ當時右ノ患者ヲ解屍スルニ當リテ三半規管ヲ細檢スルニ至リシハ恐ラクハ彼ノ生理學者フロレンス氏ノ動物生理的試驗ニ基ツキタル者ナル可シ

フロレンス氏ハ千八百四十二年動物生理的試驗中三半規管ヲ切斷スルトキハ劇烈ナル眩暈、耳聾等ノ諸症狀ヲ起スコトヲ發見セリ氏ガ此試驗ヲナセシハ蓋シマゲンデー氏クレイエル氏等ノ生理的試驗與ツテ效アルベシマゲンデー氏クレイエル氏等ノ試驗トハ千八百二十八

年既ニ施行セシ法ニシテ即チワロンオ氏橋ノ橫行纖維或ハ小腦纖維ヲ四疊體ニ至ル迄切斷シ及小腦ヨリ脊髓迄切斷スルトキハ耳聾、眩暈等ノ變化ヲ起スモノナルコトヲ發見セリ
ヒルライレー氏曰ク聽神經ノ經路ニ壓迫變常アルキハメニール氏病ノ症候ヲ起スモノナル可シト

グルーベル氏曰クヒルライレー氏ノ所論甚ダ可ナリメニール氏病ハ常ニ迷路ノ疾患變常ニノミ發スルトナスハ甚ダ不可ナラン何トナレハ現今諸家ノ經驗タル皆動物試驗ナルヲ以テ此成績ニ誤リナキヲ必ス可カラサレバナリ但シ此ク論シ來ルト雖モ予モ亦此疾病ノ多數ハ迷路ノ障害アルハ疑ナシト推考スト

ホリゼル氏及ホルトリニー氏等ハ損傷ノ後メニール氏病ヲ發セシモノヲ實驗シ之ヲ解屍セシニ菱柱體ノ瘻口及腦膜迷路等ノ化膿性炎症アルヲ見タリ

千八百八十四年バッシニ氏 *Bassini* ノ耳科院ニ於テサポリニー氏 *Sapolini* ハ十三名ノメニール氏病ヲ報道シ其内一名ハ硝酸銀含有ノ染毛劑ニ因セリト云ヘリ

ワッケス氏 *Wackes* ハ交感神經下頸節ニ障害アルキハ同シクメニール氏病ヲ起ス是レ交感神經下頸節ヨリハ一方ニ脊椎動脈ニ作用ヲ及ボシ迷路ニ致ス可ク一方ニハ迷走神經枝ニ連

路ヲ通ズルヲ以テナリ下頸交感神経節ノ作用停止スルハ迷路ヨリハ重聴、耳鳴、眩暈等ヲ發シ迷走神経ヨリハ神思不振、嘔吐等ヲ發スト
ゴットスタイン氏等ハ曰ク若シ劇烈ナル眩暈、嘔吐、耳鳴、重聴等ノ諸症狀ヲ呈スルモノハメニール氏病ト看做シテ可ナリト

ブルンチル氏ハルトマン氏其他諸家ノ説ニ依レバ通常該症ノ原因ヲ三種ニ分ツ

- 第一 中耳ノ作用ニ因ス
- 第二 迷路ノ疾病ニ因ス
- 第三 腦ノ疾病ニ因ス

第一 中耳ノ作用ニ因スル者トハ即チ中耳ノ炎症、通氣法、耳洗等ニ由テ發スル者ナリ但シ此際ニ於テハ諸症狀甚ダ輕易ニシテ敢テメニール氏病ノ名ヲ附スルヲ要セザルナリ

第二 迷路ノ疾病ニ因スル者ハ最も多クシテ動物試験ニ徴シ又諸家ノ解屍報告ニ由テ明カナリトス

第三 腦ノ疾病ニ因スルモノハ殊ニ小腦部ニ障害アルハ之ヲ發スルコト多シトスウヰルフ氏ハ趣味アル一患者ヲ報告セリ即チ腦腫瘍ニ由テメニール氏病ヲ發セシ者はナリ患者初メ

劇烈ナル眩暈、耳鳴、重聴、嘔吐等ノ諸症狀ヲ呈シ二年ノ經過中諸症狀徐々ニ輕快ニ向ヒ之ニ代ルニ腦ノ症狀即チ瞳孔散大、高度ノ頭痛、精神障害、顔面神経麻痺、舌咽神経ノ障害等ヲ來シ次デ口蓋部麻痺ノ爲メニ呼吸状態ノ障害ヲ惹起シテ死セリ解剖上小腦扁桃體部ニ櫻實大ノ小腫瘍ヲ生ズルヲ見ル而シテ其腫瘍ハ聽神経ノ通路ヲ壓迫セリ其他又腦皮膜ニ一小瘍アリテ處々炎性滲出物アルヲ發見セリト

以上述ブル如クメニール氏病ハ中耳變常、迷路ノ變常、腦ノ變常ニ因ストナシ諸家一般ニ之ヲ信スレドモ第一中耳ノ疾病ヨリ來ル者ハ甚ダ輕易ニシテ敢テメニール氏病ノ名ヲ附スルヲ要セザル可ク第三腦ノ疾病ヨリ來ルトナス者モ多クハ聽神経ノ經路ヲ壓迫セラル、カ若シクハ迷路裝置等ニ多少ノ障害ヲ及ボス者ノ解屍的變化多キヲ見ル然ラバ最も重キヲ迷路ノ變常ニ歸ス可キ乎多クノ解剖上報告ハ殊ニ蝸牛殼前庭等ニ溢血、高度ノ炎症、滲出物成形等アルヲ見ルヲ以テ察スレバ蓋シ十中ノ八九ハ迷路近傍ノ變常ニ因スルト云フモ不可ナカル可シ

ブルンチル氏其他ニ由ルニ迷路ノ壓迫ノ爲メニ淋巴管及淋巴管分枝ノ排泄路ヲ妨ケラレテ(即チ狹窄若シクハ閉塞)之ヲ發スルナルベシト

症状

ハルトマン氏曰クメニール氏病ハ小兒ニ來ルコト頗ル多シ恐クハ腦膜炎ニ關係ヲ有ス可シト予思ラク是レ敢テ腦膜炎ニ關係アルニ非ズシテ迷路其他小腦部ニ炎症ヲ及ボスガ爲メニ之ヲ發生スルナラン決シテ腦膜炎ト直接ニ關係アルモノニアラザルベシト信ズルナリ
メニール氏病ハ初期ニ於テ迷路炎ト誤ルコト屢之アリ但シ發熱狀態其他經過等ノ關係ニ察セバ之ヲ區別スルコト決シテ難カラズト又頭部充血、腦膜充血、腦腫瘍ト誤リ易シ腦脊髄病ト簡單ナル鑑別ハメニール氏病ハ麻痺症狀ヲ呈スルコトナシ此疾病ハ突然發起スルモノニシテ或ハ卒中性ニ來リ劇烈ナル眩暈、精神不和、嘔吐、耳鳴等ヲ發ス辨識ハ多ク存在スレニ驚怖ノ後等ニ來ルモノハ一時失神狀態ヲ呈スルモノアリ

〔症狀〕發作時間ハ種々ニシテ一二分間或ハ數時間、一日間、數週間稀ニ透迤月餘、歲餘ニ及ブ者アリ經過中炎症療法ニ由テ癒ユルモノナキニアラザルモ甚ダ稀ナリトス時トシテ諸症狀間歇性ニ發作シ或ハ久時ニテ發シ或ハ短時之ヲ發スルモノアリ
此症狀ノ發作間、眼球震盪 *Nistagmus* ヲ起スコトアリ而シテ其發症止ムトキハ眼球震盪モ亦止ム者トス
當時メニール氏病ヲ論ズルモノ議論殆ンド一致セリ左ニ簡單ニ一二ヲ擧ゲン

- (1) ブルンチル氏曰ク本病ハ即チ一ノ症候ニシテ之ヲメニール氏病 *Morbus N. T. C.* フハ穩當ナラズ宜シクメニール氏眩暈 *Vertigo N. T.* ト稱スルヲ可トスト
 - (2) 該病ハ無熱ニシテ高度ノ眩暈、耳鳴、重聽、耳聾等ヲ發スルモノトス
 - (3) 腦ノ病的變化殊ニ小腦ノ變常ニ於テ誤リ易シ又之ト確實ナル類症鑑別ヲ爲スコト難シトス殊ニ聽力障害アルモノニ於テ然リ
 - (4) 該病ハ通常迷路ノ病體變化ト共ニ第一期ニ來リ又第二期ニ來ル
 - (5) 本病ノ重症ハ多クハ迷路溢血ニシテ輕症ハ多クハ血管運動神經ノ異常ニ歸スベシ
 - (6) 該病ノ多數ハ迷路ノ病的壓迫ニ依テ淋巴管或ハ淋巴管枝ノ排出口閉塞若クハ狹窄セル者多シト知ル可シ
 - (7) 眼科醫ガ大量ノ規尼涅ヲ用キルトキハ網膜ニ痙攣性局所貧血ヲ起スガ如ク迷路ニモ同様ノ變化ヲ生ズルモノトス是レシャルコー氏ブルンチル氏キルヒチル氏ローザ氏等ノ報道セシ處ナリトス
- 以上反復論ズルガ如ク該病ハ迷路裝置近傍ノ變化ニ因スルノ說最モ力多シ是ニ由テ之ヲ觀

レバ該病ハ断然耳科醫ノ領分ニ屬スルト云フモ過言ニアラザルベシ但尙百方研究シテ論旨ノ一方ニ歸スルマデハ飽クマデ之ヲ講究スルコト吾人ノ務ナリトス

〔豫後〕ハ通常不良ニシテ治癒ニ趣クコト甚ダ稀ニ多クハ完全耳聾ヲ來スモノトス

〔療法〕第一原因療法ヲ必要トス又此發作アルキハ靜止セシメ腸管ニ誘導シ又耳後ニ誘導シ其他總テ不快ナル合併症ヲ防禦スベシ

藥劑ハ第一規尼涅療法ナリトス即チ一日〇、五乃至一、〇ヲ用キルキハ大ニ輕快ヲ覺フル者ナキニアラズト雖モグルウベル氏ニ由レバ若シ三日間之ヲ服用セシメテ眩暈止マズ又聽力益、退歩スル如キモノハ之ヲ停止スルヲ要ス何トナレバ反テ諸症狀増盛シ又ハ諸症益、消退セザルニ至ルヲ以テナリ

アルト氏 *Alto* 曰ク一人ノ健全ナル婦人數年間慢性中耳炎ヲ患ヒシガ遂ニメニール氏病ヲ發起セリ爰ニ於テ一際規尼涅ノ内服一日一瓦ヲ二日間用キシニ三日間ニ疼痛性綠内障ヲ發シ虹彩切除術ヲ要スルニ至レリト此藥劑ヲ用キルニ注意ヲ要スルコトハ一般諸家ノ唱道スル處ナリ

通常諸家ノ用キル藥劑ハ規尼涅〇、一乃至〇、二一日數回、沃度加里一日〇、五乃至二、〇、一

豫後
療法

迷路ノ骨瘍
及骨疽

原因

二週日ノ後ハ必魯加兒必涅注射及内用ヲ試ム其法二%必魯加兒必涅半筒乃至一筒ヲ注射シ内服ニハ一日〇、〇一乃至〇、〇二ナリ
其他ボリゼル氏法「カテーテル」法ヲ施シ一乃至二%沃度加里水ヲ「カテーテル」ニテ注入シ又鼓膜按摩法ヲ施スベク次デ電氣療法ヲ注意シテ持長スルヲ要ス其他ハ海濱、温泉等ノ氣候療法ヲ施行ス可シ
ウルバンチツチ氏ハ番木甞越幾斯或ハ丁幾、臭素那篤留謀等ノ内服效ヲ奏スルコトヲ説キハルトマン氏ハ「ザロール」ヲ賞用ス

第九章 迷路ノ骨瘍及骨疽 *Caries und Necrosis des Labyrinth*

Moss

〔原因〕結核、腺病、梅毒、急性傳染病(殊ニ猩紅疹、實扶的里等ニ由テ發スル者多ク又顯微骨ノ骨疽或ハ近隣諸部ノ炎症ヨリ蔓延スルモノ少ナカラズ
此症ハ大人ニ於ケルヨリハ小兒ニ於テ遙ニ多ク男性ハ女性ヨリ多シ
迷路ハ全體或ハ局部ニ壞疽ヲ起ス例之蝸牛殼、二半規管共ニ發生スルコトアリ或ハ蝸牛殼若

症候

豫後

療法

迷路ノ新生物

クハ三半規管ノミニ發生スルコアリ
 迷路ノ壞疽ニ陥キリタル部ハ鼓室ノ迷路壁及聽道ヲ通シテ彌蔓シ乳嘴突起或ハ鼻腔ニ穿孔スルコアリ
 [症候] 甚シキ聽力障害、顔面神經麻痺、眩暈、蹣跚タル歩行、耳鳴、疼痛、鼓室及乳嘴突起ノ化膿性炎等ノ諸症狀ヲ發起ス
 [豫後] ベツオールド氏ニ由レバ死亡數ハ二十%ナリト云フ多クハ腦ノ諸病若クハ竇靜脈炎ヲ喚起シテ斃レ易キ者トス
 [療法] 先ヅ外聽道及鼓室ノ制腐法ヲ施シ肉芽組織ヲ抓把シ、乳嘴突起ノ壞疽ヲ起ス者ハワイルド氏ノ截開ヲ施シ或ハ乳嘴突起ヲ穿開シテ壞疽セル骨片ヲ切除シ清淨ニ保持ス可シ

第十章 迷路ノ新生物 *Neubildungen des Labyrinthes.*

迷路ノ新生物ハ迷路ニ原發スル者甚ダ少クシテ通常續發スル者トス
 結締織新生物ハシワルゼ氏之ヲ前庭ニ、レウエク、ラソルス氏之ヲ内聽道口ニ發見セリ
 ホルトリニー氏ハ蝸牛殼穹窿ニ於テ纖維筋腫ヲ、モース氏及ブルックハルド、マリアン氏等ハ

聽神經成形不能

第十一章 聽神經成形不能 *Bildungsanomalie des Nervus acusticus.*

前庭部ニ骨質新生及外骨腫ヲ、ホリゼル氏ハ兩側蝸牛殼ニ癌腫ヲ、モース氏ハ梅毒腫ヲ、ハアベルマン氏ハ結核性腫瘍ヲ何レモ迷路内ニ發見シ之ヲ報告セリ
 聽神經ハ悉ク缺損シ若クハ成形不能ナルコアリ又一二ノ神經缺損若クハ成形不能ナルコアリワルサルワ氏ヒルトル氏等ハ前庭神經及蝸牛殼神經ノ成形不能ヲ實驗セリト云フ
 聽神經厚徑ノ變常 *Anomalie der Dicke* ニ就テ主要ナルモノハ削瘦トス
 聽神經削瘦 *Atrophie des N. acusticus* 神經壓迫ニ原因シ或ハ神經ニ營養ヲ供給スヘキ血管ノ荒蕪スルキハ之ヲ發シ又同神經中樞部及末梢部ノ疾患ニ由テモ削瘦スヘシ
 ベットヘル氏ハ肉腫ノ爲メニ壓迫削瘦 *Druckatrophie* ヲボリゼル氏ハ頭蓋底ヨリ顯露骨ニ及ボセル脈管腫ノ爲メニ聽神經及顔面神經ノ壓迫削瘦ヲ起セル者ヲ報告セリグウル氏(三)オグレエ氏 *Oyle* 及グリーシングル氏 *Grisinger* 等ハ基礎動脈ノ動脈瘤ノ爲メニ迷路及聽神經ノ動脈閉塞ヲ起シ以テ聽神經ノ削瘦セル者ヲ報告セリ

中樞ノ疾患ノ爲メニ來ル削瘦ハ殊ニ延髓及小腦ノ疾病ニ於テ見ル者多シモース氏ハ出血性硬腦膜炎ニ因スル聽神經削瘦ヲ記載セリ

エルブ氏ハ脊髓癆ニ由テ聽神經削瘦ヲ發セシ者ヲ見タリト云フ
聽神經削瘦ハ聾啞ニ就キ頗ル多ク諸家ノ實驗報道セル所ナリ

ハアベルマン氏ハ蝸牛殼神經ノ局所削瘦ヲ記載セリ頗ル珍奇ナリトス

〔療法〕第一體質ニ於テ營養不良ノ者ニハ滋養強壯法ヲ施シ第二他ノ疾病アル者ハ之ガ處置ヲナシ第三内按摩法、電氣療法等ヲ施シ第四強神變革劑ヲ投ス

聽神經炎

第十二章 聽神經炎 *Entzündung des N. acusticus.*

聽神經ノ炎症ニ罹ルキハ發赤、腫脹、出血、化膿、軟化等ヲ來シ途ニハ變性スル者トス

聽神經炎ハ原發シ或ハ頭蓋腔迷路ノ炎症ニ併發ス

又單純腦膜炎、腦脊髓膜炎等アルキハ聽神經炎ヲ來シ若クハ滲出物ニ由テ聽神經ヲ壓迫スル者トス

モース氏ハ一患者ノ實扶的里後ニ聽神經炎ヲ起セル者ヲ報道セリ

療法

療法

中樞性聽神經纖維障害

〔療法〕身體ヲ安靜ニシテ精神ヲ和ラケ頭部ニ氷巻法ヲ施シ下劑ヲ投シテ腸管ニ誘導ス可シ

第十三章 中樞性聽神經纖維ノ障害 *Affektion der centralen Acusticusfasern.*

in den Acusticusfasern.

聽神經中樞ハ腦ノ障害ニ由テ他ノ諸中樞ニ比スルニ多ク共ニ侵サレ易キ位置ヲ占ムル者ナリ即チ腦ノ種々ノ部分ニ腫瘍其他ノ變常アルキハ聽器ノ障害ヲ被ムルコト少ナカラズ其多少ニ就テハ諸家ノ調査一樣ナラズカルマイル氏 *Carroll* ハ腦腫瘍患者ノ九分一ハ聽神經障害ヲ起スコトヲ、レーベルト氏ハ四十五人ノ腦腫瘍患者中十一人ハ聽官障害ヲ、ラダメ氏 *Ladame* ミハ七十七人ノ小腦腫瘍中七回、二十七人ノ腦中葉腫瘍中三人、聽官障害ヲ起シ腦前葉腦瘍二十七人、腦後葉十四人、斜方窩四人、何レモ聽官障害ヲ起サソリシコトヲ各實驗調査セラレタリ

基礎動脈動脈硬化

シワルゼ氏ハ腦腫瘍ニ由テ腦萎縮ト共ニ馬鏡骨ノ關節癒着セル者ヲ屢々實驗セリト云フ
聽官障害ハ基礎動脈動脈瘤ニ由テ發起シ易キ者ニシテ且ツ頗ル多シトス

基礎動脈脈瘤診断ノ要點ハクリーゼンゲル氏ハ左ノ如ク定メタリ即チ關節及泌尿ノ障害四肢ノ軟弱、癱瘓 *Paralysis* (即橋部障害) 半身不隨、後頭部脈動等ナリト
 ソルレントラップ氏 *Turnbough* ハ五十一歳ノ婦人突然神思不和、後頭痛、耳鳴、重聽、四肢ノ震慄及軟弱ヲ起シ十三日ノ後死去セリ之ヲ解剖セシニ基礎動脈瘤ヲ起シ橋ヲ壓スルヲ見タリト云フ

レーベルト氏ハ耳聾ト舌咽神經障害即チ嚥下困難トヲ合併セル者及迷走神經麻痺ノ症候即チ呼吸困難脈搏ノ變常等ヲ來ス者ヲ實驗シタリト云フ

卒中

卒中ト耳聾トノ關係ニ就テハ諸家ノ頗ル多ク報道セル所ナリモース氏ハ橋部ノ半側出血ニ於テ最モ多ク聽官障害ヲ起スヲ實驗セラレタリフエツテル氏ハ卒中ニ由テ交叉性耳聾ヲ起セシ者ヲ報告セリ即チ左側水晶體核ノ前部及内脛ノ後部ニ出血竈アリシ者右側耳聾ヲ發セシト云フ又カウフマン氏ハ右側ノ腦出血ニ左側ノ耳聾ヲ發セシ者ヲ報告セリシワル氏ハボリセル氏等ハ小腦ノ出血ニ就テ亦同様ノ報告ヲナセリ

急性腦水腫

ウルバンチツチ氏ハ一患者、急性、腦、水、腫、ニテ、卒然耳聾及盲眼ヲ來セシ者ヲ剖檢セシニ二人共ニ聽神經幹ニハ變化ナカリシト云フ而シテ暫時性ノ盲眼及耳聾ハ一時水腫ヲ聽神經及視神

尿崩、衄血

經中樞ニ及ボスモノナル可シト説明セリ
 尿崩症モ又稀ニ聽管障害ヲ來ス者ナリウルバンチツチ氏ハ衄血後聽神經麻痺ヲ起セシ者ヲ報ゼリ

癲癇

デンチルト氏ビユルクテル氏等ハ癲癇ノ後耳聾ヲ發セシ者ウルバンチツチ氏モ又癲癇ノ後聽神經麻痺ヲ起シ二年ノ後再ビ癲癇發作アリテ益々耳聾ヲ増進シタルモノヲ報ゼリ

癲狂

デルブリツク氏 *Delbick* ハ癲狂者ノ暴狂發作後、聽官及語官ヲ失セル者再ヒ回復セルヲ報ゼリ即チ二十歳ノ男子聽官及語官ノ機能障害ヲ來シ八日間右側耳鳴ヲ發シテ聽力回復シ左侧モ亦耳鳴進行ト共ニ聽力回復セリト云フ

間歇疹

エタル氏ハ間歇熱ノ後ニ耳聾ヲ發セシ者ヲ報告セリ

ブライト氏病

ブライト氏病ニ聽神經麻痺ヲ續發セシコハデオエラフ、オ、イ、氏、ビ、ッ、ソ、オ、ト、氏、等、之、ヲ、述、ベ、タ、リ

猩紅疹

フオス氏ハ猩紅疹ノ後腎臟炎ヲ起シ重聽ヲ併發セル者ヲ實驗セリ

質扶的里

モース氏ハ質扶的里ニ由テ耳聾ヲ起スヲ詳細ニ調査シ迷路ニ微菌ノ侵入セル者タルヲ發見セリ

白血病

白血病ニ由テ耳聾ヲ起セシコハヘルリン氏 *Hermann* フリードレンダー氏ボリセル氏ゴットス

血管運動神
經ノ障害

移動性耳聾

クイン氏フラウ氏グラデニゴ氏等ノ報道セル所ナリ
 血管運動神經ノ障害ニ由テ聽神經中樞ニ障害ヲ及ボスコトハ殊ニ血管痙攣ニ於テ見ル處ニシ
 テ半頭痛ニ兼テ聽力過敏若シクハ麻痺ヲ來ス者ナリ
 移動性耳聾 *Mehrschubheit* ハシマルツ氏チエムスセン氏ダールバイ氏等之ヲ實驗セリウルバ
 シチツチ氏ノ一患者ハ突然左耳高度ノ重聽、耳鳴、嗅覺、味覺及觸覺ノ消失等ヲ發シ以テ視
 界黒斑 *Scotom* 及視力減弱ヲ來セリ依テ「アミールニトリット」ノ吸入ヲ施セシニ顔面ノ右
 側著シク發赤シ左側モ亦稍赤色ヲ呈セリト云フ同氏之ヲ説明シテ曰ク是レ恐クハ五官機
 能ノ障害ニ因スル者ニシテ五官ノ中樞ニ於テ血管痙攣ヲ起スニ由ルナル可シト
 ノルリス氏 *Norris* ハ一患者移動性耳聾ニ罹リシ者二十一年後自然發症ノ消失セル者ヲ報
 セリ

藥物

藥物ニテハ煙草、嗎啡仿謨、規尼涅、撒里矢爾酸等ハ聽力障害ヲ起ス者ニシテ殊ニ撒里矢爾
 酸ハ聽力障害ト共ニ腦ノ刺戟症狀ヲ發起シ易キ者ニシテ即チ是等ノ藥物ハ皆腦症ト共ニ聽
 力障害ヲ發起スル者ナリ

聾啞

聾啞 *Taubstumheit*

聽官ノ機能廢絶スル者之ヲ聾 *Taubheit* ト云ヒ語官ノ機能廢絶スル者之ヲ啞 *Stummheit* ト
 云ヒ聽官及語官ノ機能共ニ廢絶スル者之ヲ聾啞 *Taubstumheit* ト云フナリ
 聾啞ニ二種アリ先天性聾啞 *angeborene Taubstumheit* 後天性聾啞 *erworbene Taubstumheit*
 即チ是ナリ

七歳以下ニシテ聽官ノ疾病ニ罹リ聾トナリタル者ハ言語ノ發達尙ホ完全ナラザルヲ以テ啞
 ヲ兼テ易ク十四五歳以上ノ者ニ於テハ聽官ノ機能ヲ失スルモ言語ノ發達既ニ完全ナルヲ以
 テ語官ノ機能ヲ失フコトナシトス

聾啞ハ歐洲ニ於テモ統計上各國種々ノ差等アリ例之瑞西ハ十萬人中二四五ニシテ和蘭ハ三
 四ノ大差ナルガ如シ今歐洲各國ノ統計調査ヲ左ニ示スコシ

歐洲各國聾啞統計表

國名	調査ノ年	各國人口	聾啞者ノ數	十萬人中聾啞者ノ數		男	女	男聾啞百人 ニ付女聾啞 ノ比
				聾	啞			
瑞	西一八七〇	二六六九一四七	六五四四	二四五	—	—	—	—

佛	サ	暹	希	葡	エ	バ	露	フ	ブ	瑞	ウ	エ	パ	ウ	埃
蘭	ツ	マ	臘	萄	ル	イ	威	イ	ロ	典	ル	ス	ア	ン	太
西	ク	嗎	臘	牙	リ	エ	威	ン	エ	典	ス	ス	ア	ガ	利
	セ	嗎	臘	牙	ン	ル	威	ン	セ	典	ス	ス	ア	ル	利
一八七六	一八八〇	一八八六	一八七九	一八七六	一八八一	一八七一	一八八六	一八八〇	一八八〇	一八八〇	一八六一	一八七一	一八七一	一八八一	一八八〇
三六九〇五七八八	二九七二八〇五	一九六九〇三九	一六七九五五一	四一六一九八〇	五一七四八三六	四八六三四五〇	一九二二一〇五	二〇六〇七八二	二七二七九一一	四五五六六六八	一七二〇七〇八	一五四九五八七	一四六一五六二	一五六四二一〇二	二二一四四二四四
二二三九五	一七四七	一二五五	一〇八五	三一〇九	三九九三	四三八一	一八二六	二〇九八	二七七九四	四八三四	一九一〇	一七二四	一七八四	一九八七四	二八九五八
五八	五九	六四	六五	七五	七七	九〇	九五	一〇二	一〇二	一〇六	一一一	一一一	一二二	一二七	一三一
一一四六〇	九四一	六四五	一	一七九九	二一六三	二三五二	一〇二九	一一八三	一一六八	二六八一	一〇一九	九七七	九四二	一〇五八九	一五九三五
九九三五	八〇六	六一〇	一	一三一〇	一八三〇	二二二九	七九七	九一五	二二六八	二一五三	八九一	七四七	八四二	九二八五	二三〇二三
八七	八六	九五	一	七三	八七	九四	七七	七七	八三	八〇	八七	七六	八九	八八	八二

之ニ		北	亞	米	利	加
ヲ加フレバ全總計左ノ如シ		一八八六	五〇一五五七八三	三三八七六	六八	一八五六七
マイエル氏ノ調査ニ由レハ斐陸ノ比例ハ一萬人中七、四ハルトマン氏ニ由レハ七、七七ナリト云フ		二七二八〇三三二七二一〇三四	七七一〇七七九一六二六	八二、七二		
シ	ヨ	ト	ラ	ン	ド	
一八八一	三九三三三〇〇	二二四二	五七	一一四九	九九三	八六
一八八一	二八四六一六八一	一五三〇〇	五四	八七〇七	六五九三	七六
一八八一	二五九七四四三九	一三二九五	五一	七一〇一	六一八四	八七
一八七七	一六六二三三八四	七六二九	四六	四六二五	三〇〇四	六五
一八七五	五三三六一八五	二二八〇	四三	一一〇八	一〇七二	八九
一八七九	三五七五〇八〇	一一九九	三四	六二九	五七〇	九一
總	數	二二二六四六五三四	一七六一五六	七九	九二二二七六三一五	八二、七

土地ノ關係

土地ノ關係 瘰癧ハ各國其數一様ナラザルコト右ノ表ニ示スガ如ク然リ殊ニ有名ナル瘰癧生産地タル瑞西ノ連山ニ於テモカントン、アッペンツエル、ガルレン、ゲラルス、シウイッ等ニハ一萬人中八乃至十五人之ニ反シテホツホアルペン例之ベルンハ四十二、ルゼルンハ四十四、ワルリスハ四十九等ノ割合ナリトス

瘰癧ノ平地ニ於ケルヨリハ連山ニ於テ多キ理ニ就テハ諸説アリ飲料水説、血族結婚説等是ナリ

瑞西連山ニ流行スル一奇病「クレチニスムス」 *Cretinismus* モ其原因未ダ分明ナラザレモ古來飲料水ニ因スベシト稱フルモノ多ク而シテ「クレチニスムス」ノ多キ土地殊ニ其家族ニ瘰癧ノ亦多キヲ以テ觀レバ疑ヲ飲料水ニ歸スルモ決シテ不當ナラザルガ如シ

「クレチニスムス」トハアルペン山近傍ニ限局シテ發スル處ノ奇病ニシテ甲状腺腫脹、頭骨内三角軟骨ノ化骨、鼻翼扁平廣濶、頭大、體軀矮小、精神痴呆等ノ諸症狀ヲ發ス

アルペン連山地方ハ外人ノ居住スルコト少ナク祖先以來固有ノ人々居住スル者多ク且ツ常ニ他國トノ交通稀ナルヲ以テ血族結婚ノ已ムヲ得ザルニ至ル者多シト是レ血族結婚説ノ起ル所以ナリ

遺傳ノ關係

遺傳ノ關係 遺傳ハ先天性瘰癧ニ非常ノ關係ヲ有スル者ナルコトハ既ニ諸家ノ稱フル處ニシテ二世三世ニ傳ヘ或ハ尙ホ末世ニ傳フベシ又兩親ノ内一人瘰癧ナルモ健全ノ兒ヲ生ズルコト往々之アリ予ハ夫、瘰癧ニシテ妻、健全ナル者ノ間ニ四人ノ健全ナル兒ヲ舉ゲタル者ヲ實驗セリ又夫妻共ニ瘰癧ニシテ健全ナル兒ヲ舉グルコトアリハルトマン氏ハ夫妻先天性瘰癧ナル者五人ノ子ヲ生ミ四人ハ瘰癧ノ女子ニシテ一人ハ健全ナル男子ナリシト云フ

又ハルトマン氏ノ調査ニ由レバ瘰癧者八千三十七人ノ内十七對ノ夫妻瘰癧者アリテ二十八人ノ兒ヲ舉ゲシニ悉ク健全ニシテ一人ノ瘰癧ヲ舉ゲズ又二百六十七對ノ夫妻ハ妻ノ瘰癧者ヨリ四百二十七人ノ兒ヲ舉ゲ其中僅ニ十一人瘰癧ナリシト云フ

ワイルド氏ミゲエ氏等ハ瘰癧ハ父ヨリ遺傳スルコト母ヨリスル者ヨリモ多シト唱ヘシガシマルツ氏ガサツクセンニテ調査セシ處ニ依レバ其差異ヲ見出ス能ハザリシト云フ

クラメル氏ハ一家族十一人ノ兒女アリ内男六人女五人而シテ男六人ハ皆瘰癧ニシテ女五人ハ之ニ反シテ完全ナル聽力ヲ有スル者及一家族八人ノ男女悉ク瘰癧ナリシ者ヲ報告セリ父母ニ精神病、酒毒、過勞其他種々虛弱ナル状態アルトキハ子孫ニ瘰癧ヲ遺スコトハ人ノ稱フル處ニシテ又吾人ノ屢々實驗スル處ナリトス

男女兩性ノ關係

男女兩性ノ關係 男性ハ女性ニ比シ雙啞多キハ既ニ諸家ノ實驗スル處ニシテ前記雙啞統計表ニ由ルモ埃太利ニテハ男百人ニ女八十二人、プロエセンニテハ男百人ニ女八十三人、佛蘭西ニテハ男百人ニ女八十七人、伊太利ニテハ男百人ニ女七十六人、北亞米利加ニテハ男百人ニ女八十二人ノ比例ナルガ如シハルトマン氏ハ男百人ニ就キ女八五、一人、シマルツ氏ハ男百人ニ女八五、六人ナルヲ檢出シワイルド氏ハ先天性雙啞ニテハ男百人ニ就キ女七四、五人、後天性雙啞ニテハ男九十三人ニ付女九十六人ノ比例ナルヲ檢セリト云フ

年齡ノ關係

年齡ノ關係 ワイルド氏ハ五百三人ノ雙啞ニ就テ年齡ノ關係ヲ調査セシニ百二十人ハ二歳以內ニシテ殊ニ二歳ニ多ク百九人ハ三歳乃至四歳ノ間、七十六人ハ四歳、三十八人ハ五歳、三十六人ハ六歳、三十二人ハ七歳、二十一人ハ八歳、十一人ハ九歳、十五人ハ十歳、三十三人ハ十歳乃至十五歳、十二人ハ十五歳ノ後ニ發セリト云フ

兩性血族結婚ノ關係

兩親血族ノ結婚ニ由テ生シタルノ兒ハ精神病、腺病、結核等ヲ發シ易キガ如ク雙啞ニ於テモ亦大ナル關係ヲ有スル者ナルヲハメニール氏マイエル氏等ノ既ニ詳述セル處ニシテ他國トノ交通甚ダ少ナキ僻陬ノ地ニハ血族結婚行ハレ從テ雙啞ノ多キヲ以テモ之ヲ推知スルコトヲ得ベシ

血族結婚ニ因スル雙啞ノ%數

血族結婚ニ因スル雙啞ノ%數

番號	調査人	地	名	年	號	雙啞	血族結婚ニ由テ生シタル雙啞	%	數
一	シヤツツアライ	ポ	ポ	一八五九	八九	二七	三〇、三		
二	ブー	ポ	ポ	一八六二	六七	一九	二八、三		
三	メツケル	ナ	ナ	一八六四	二二八	三一	一三、六		
四	アリソグス	グ	グ	一八六七	一六三	二〇	一一、三		
五	コ	ア	ア	一八六九	五七	九	一一、八		
六	レン	ケ	ケ	一八六九	一六六〇	八	四、九		

予ハ東京ニ於テ叔姪ノ夫妻四子ヲ舉ゲ第一子第三子第四子雙啞ニシテ第二子獨リ健全ナル者ヲ實驗セリ

血族結婚ニ由テ雙啞ヲ生ズルヲハブージー氏ハ二五%ミトシエル氏ハ六%ハルトマン氏ハ八%ナルコトヲ檢出セリ

左ニ諸家ノ調査セル%數ヲ畧表トシテ示ス可シ

先天性及後天性聾啞ノ關係

先天性聾啞及後天性聾啞ノ關係 先天性聾啞及後天性聾啞ノ多少ハ土地及調査セル人ニ由

七	エルランドノ統計表	エルランド	一八七一	三五〇三	二八七	八、二
八	ワイルヘルミ	マダデアルグ	一八七一	二八四	三三	一一、七
九	フアルク	伯林	一八七二	六九	七	一〇、二
一〇	ベツケ	ベス	一八七三	一六	〇	〇、〇
一一	ウイヘルミ	ボムメルン	一八七五	五九二	一〇五	一七、七
一二	ウイヘルミ	エルフルト	一八七五	一六八	一〇	五、〇
一三	ラカッサン	巴里	一八七七	一〇七	一七	一五、八
一四	ハルトマン	伯林	一八七七	四五	八	一七、七
一五	ミゲ	コツメンハアゲン	一八七九	一一五	一二	一〇、四
一六	ヘーシנגエル	ワウルンベルグ及ニアゲン	一八八二	一八一	五	二、七
一七	モス	自家「クリニツク」	一八八二	四〇	一三	三二、五
一八	シマールツ	サツクセ	一八八四	六七	二五	三、七
一九	ミギン	嘘	一八八六	一二五	一八	一四、〇
二〇	ミギン	マイエル氏「クリニツク」	一八八八	五四	一二	二二、二

聾啞

三八六

先天性及後天性聾啞ノ比較表

テ一様ナラズ左ニ記スル表ハ能ク其關係ヲ知ルコトヲ得ベシ

各國聾啞院ニ於ケル表

各國聾啞院ニ於ケル表

國名	年號	調査人	先天性	後天性
ボムメルン	一八七四ヨリ	ワイルヘルミ及	五九二	一〇三一
エルフルト	一八七五ヨリ	同上	一六八	九九
佛蘭西	一八七五	同調査	一六一二七	五二六八
サクセ	一八八〇	シマールツ	六三六	六四九
プロエセン	一八八〇	國調査	九四六八	七一九六
エルランド	一八八一	同上	三〇九二	七五三
シヨットランド	一八八一	同上	一〇七八	一〇六四
ノルウェゲン	一八八六	ウツヘルマン	九三三	八八五
總數			三二〇九四	一六九四五

聾啞

三八七

ウエルデンアルグ	一八八一	同上	一一七	一一一
埃 太 利	一八八四		八二二	四八〇
カドワイヒルスト	一八八五	レムツケエ	二〇	三七
ノルウエゲン	一八八五	カツヘルマン	一三二	二〇四
エタリ	一八八七		七九八	四七一
總 數			二〇六〇	一五三七

右ノ表ニ由テ觀ルニ佛蘭西サクセン等ノ調査ニテハ後天性雙啞ノ數先天性雙啞ノ數ニ超過スレドモ全總數ニ就テ算スルトキハ後天性雙啞ハ先天性雙啞ノ半ニ過ギズ是ヲ以テ觀レバ小數ノ統計ニ由テ先天ノ雙啞ハ後天ノ雙啞ヨリ少ナシト説クガ如キハ過チナシト云フベカラズ

種々ノ先天性及後天性雙啞ト全雙トノ關係 雙啞必シモ全雙ナル者ニアラズ空氣傳達若クハ骨質傳達ノ尙ホ多少存在スル者アリ而シテ此關係ハ先天性雙啞ニ於ケルヨリハ後天性雙啞ニ於テ全雙トナル者多シ左ニ諸家ノ調査セル者ヲ「プロセント」數トシテ示ス可シ

先天性及後天性雙啞ト全雙トノ%表

雙啞ト全雙トノ%數

雙啞ト全雙トノ關係

調査人	地名	先天性	先天性全雙	%	後天性	後天性全雙	%
トインビー	龍 動	三三三	一七二	五四、九	九八	九三	七四、四
クラメル	?	二七	一〇	三七、〇	一八	一三	七二、二
?	バアア	六〇	二七	四五、〇	一三一	一〇五	八〇、一
ハルトマン	伯 林	五一	二四	四七、〇	一四九	八六	五七、七
シマルツ	ドレスデン	三九	一四	二八、二	一四八	二四	六一、五
レムツケエ	カドワイヒルスト	二〇	四	二〇、〇	三七	七	一九、一
ウッヘルマン	ノルウエゲン	一三二	四一	三一、〇	二〇一	六一	三〇、〇

其他ノ原因ニ就テハ先天性雙啞ハ胎兒腦膜炎、神經中樞及聽器各機關ノ成形異常等主ナル者ニシテ又毫モ確實ナル原因ヲ探求スル能ハザルコトアリ後天性雙啞ハ腦中樞裝置、迷路及傳音裝置等ノ種々ノ疾患即チ腦膜炎、腦脊髓膜炎、迷路ノ炎症等ニ由リテ來リ又急性諸傳染病殊ニ猩紅疹、麻疹、窒扶斯等ニ由テ之ヲ來ス者ナリ

〔病理解剖〕雙啞ノ解剖セラレタル者ハコッペンハアゲン府ノミギンド氏カ千八百九十二年四月調査セシ處ニ由レバ大凡百五十件ナリトス予ハ其主ナル者ヲ表トナシ左ニ示ス

病理解剖

聾啞剖檢略表

可シ		聾啞剖檢畧表		可シ	
番號	發見人	年號	中	耳	摘
一	メルセンマン	一六七九	砧骨缺亡	耳	先天性聾、性及年齡不明
二	ボチト	一六七九	砧骨缺亡	耳	先天性聾、性及年齡不明
三	パイリ	一六七九	全小聽骨三分一大	耳	先天性聾、男性、三歲
四	モンザニ	一七九一	前庭導水管著シク廣潤 蝸牛殼一週轉半	耳	先天性聾、男性、八歲、 足趾ノ損傷性壞疽ニテ 死ス
五	ハイトン	一七九二	全迷路乾酪樣物ヲ以テ 充填セラル、聽神經亦 常ヨリ小	耳	先天性聾、男性、三十歲

六	アツケルマン	一八〇五	小聽骨缺損、鼓室ハ粘 液ヲ以テ充タサル	及經過異常	後天性聾啞 肋膜炎ニテ斃ル
七	モンタイン	一八一九	迷路缺損	前庭導水管著シク廣 潤、螺旋板發育不全	先天性聾、男性、衰乏ニ テ斃ル
八	マツケブラング	一八二六	前庭導水管著シク廣 潤、螺旋板發育不全	前庭導水管著シク廣 潤、螺旋板發育不全	聾啞、女性、十五歲
九	同上	一八二六	前庭導水管著シク廣 潤	前庭導水管著シク廣 潤	先天性聾、男性、十七 歲、姉ハ聾、母、精神病
一〇	同上	一八二七	馬鐙骨小ニシテ成形異 常	全迷路缺損、內聽道甚 ク狹小	先天性聾、男性、八歲、 姉妹聾啞
一一	クロムアホルツ	一八二七	三半規管、蝸牛殼ノ骨 壁甚ク薄ク胎兒ノ如シ	內聽道著シク狹小	聾啞、性及年齡不明
一二	マツケブラング	一八二九	內聽道著シク狹小	內聽道著シク狹小	先天性聾、女性、十二歲
一三	同上	一八二九	前庭導水管缺損	前庭導水管缺損	先天性聾、男性、十五歲
一四	同上	一八二九	前庭導水管廣潤、蝸牛 殼螺旋板及軸第一週轉	前庭導水管廣潤、蝸牛 殼螺旋板及軸第一週轉	先天性聾、男性、八歲

一五	同上	一八三〇	小聽骨缺損、鼓室著シ 々狹小、歐氏管、鼓室口 閉塞	ニ在リ、第二及第三廻 轉ノ間壁缺損 前庭導水管廣潤、半規 管狹小、蝸牛殻ハ一廻 轉半、前庭道廣潤	先天性聾、男性、九歳
一六	同上	一八三〇	同上	半規管部處々化骨ス	先天性聾、男性、十歳
一七	同上	一八三一	同上	半規管處々加爾基ヲ以 テ充填セラル 前庭導水管廣潤、蝸牛 殻一廻轉半、骨軸短小、 前庭道廣潤、小柱缺損 螺旋板痕跡ヲ止ム、右 側蝸牛殻第一及第二廻 轉ノ間開口	先天性聾、女性、十三歳 兄モ亦先天性聾
一八	同上		同上	前庭導水管廣潤、蝸牛 殻一廻轉半	先天性聾、男性、十六 歳、兄モ亦聾啞

一九	同上	一八三四	外聽道狹窄、鼓膜缺損、 小聽骨缺損、	前庭導水管廣潤、蝸牛 殻一廻轉半	聾啞、性及年齡不明
二〇	ダシリンプル	一八三四	右馬鐙骨及卵圓窓癒 着、正圓窓缺損、左正 圓窓甚々狹小	前庭導水管廣潤ニシテ 中等大消息子ヲ通ズ可 シ	先天性聾、女性、二十 七年丹毒後壞疽ニ陷キ リテ斃レタル者
二二	ダ ル テ ル	一八六四	鼓室粘膜炎厚、正圓窓 ハ骨質閉塞、右鼓膜上 皮膚甚々肥厚、全小聽 骨癒着、左鼓膜牽縮、 髓骨粘骨關節稍運動 シ其他ハ癒着ス	蝸牛殻ノ鼓室道前庭ニ 開口ス	先天性聾、女性、二十九 歳、結核及結核性膿膜炎 ニテ斃ル
二三	モ ー ス	一八七六	同上	耳石及「コロロイド」體 頗ル多シ	先天性聾、男性、五十 六歳、氣管枝肺炎ニテ 斃ル
二二	バ ラ ト ウ	一八八一	同上	コルチ氏機關缺損、聽 神經處々削瘦 前庭神經ハ平常	同上

二四	ホリゼル	一八八二	正副乳腺著シク菲薄ニシテ能ク運動ス 砒骨長脚過長ニシテ中央屈折、馬鞍骨ハ結締組織ヲ以テ固着セララル 右鼓膜癆瘵機變性、砒骨體ハ結締組織ニ固着セララル、左鼓膜穿孔ス	聽力ノ發育不充分、左聽神經幹、ゲラチン性ス	先天性聾、男性、六十一歳、解剖上診斷、慢性膿水腫及慢性腹膜炎
二五	同上	一八八二	同上	同上	先天性聾、女性、十一歳

診斷

〔診斷〕雙啞ノ診斷ハ一歳以下ノ小兒ニ於テハ通常頗ル困難ナル者ニシテ唯兩親乳母等ノ陳述ニ依頼スルカ若クハ鐘、喇叭、笛等ノ音ヲ發シテ其舉動ヲ察ス可キ而已
 三歳以上ノ小兒ニテハ音叉検査法ヲ施スニ之ニ感スル片ハ稍、笑顔ヲ帶ビ若シ感セサル片ハ變常ヲ呈セザル等ヲ熟視シテ推察ス可キ者トス
 年齢稍、長スル者ニ於テハ附添人ニ就キ既性症ヲ詳細ニ尋問シ種々ノ手段ヲ盡シテ之ヲ検査シ以テ確實ニ診斷スルヲ得可シ

豫後

雙、雙啞、失語症、重聽等ノ區別ハ頗ル要用ナル者ナレハ宜シク一般ノ検査法ニ由リテ確實ニ診定スルヲ要ス又初生兒ノ失語症ニシテ雙ヲ兼テサル者ハ甚ダ稀有ニ屬スル者ナルコトハ豫メ丁知セサル可ラス
 〔豫後〕クラメル氏曰ク雙啞ノ治療セシ者ナシ否此疾病ハ治療ス可キ者ニアラスト諸家合同一致此説ヲ繼續スル者多シ然ルニ維也納ノボリゼル氏及コツペンハアゲンノミリンゴ氏等ハ治療セシ患者ヲ報告セリ今左ニボリゼル氏ノ報告セル一例ヲ舉ケン
 男兒、二歳
 千八百六十二年ボリゼル氏ノ診察所ニ來リ治ヲ乞フ之ヲ檢スルニ雙啞ニシテ更ニ音響ニ感セス
 六歳ニシテ其母再ヒ携ヘ來リテ曰ク一年前ヨリ聽力徐々ニ恢復シテ今日ノ状態ニ來ルト之ヲ詳檢スルニ聽力尋常ニ言語ハ尙不充分ニシテ不明ナリシ
 ハルトマン氏ハ一女子先天性聾ナリシカ偶然聽力ヲ得耳邊ニ口ヲ接シテ談スル片ハ之ヲ聽取スルニ至リシ者ヲ報セリ
 已上ノ報告ニ由ルモ古來諸家ノ所説ノ如ク必ス放棄ス可キ者ニアラザル可シ殊ニ中耳ノ疾

療法

病ノ爲メニ雙啞トナリシ者ノ快癒セシ例ハ二三ノ報告ニ由テ明カナリ
 ポリゼル氏ハ先天性雙啞ハ後天性雙啞ニ比スルニ豫後良ナリト云ヘリ
 [療法] 雙啞豫後法ニ種々アリ血族結婚禁止、父母攝養、初生兒ノ保護、既發耳病治療法等
 是ナリ
 血族結婚禁止ノ雙啞豫防ニ必用ナルハ前記種々ノ統計ニ由テ察ス可ク又血族結婚ノ惡弊少
 ナキ土地ニ雙啞ノ數少ナキヲ以テモ之ヲ證スルヲ得可シ
 父母攝養モ亦雙啞豫防ニ重大ノ關係アルモノニシテ飲酒過多、精神過勞等殊ニ注目ス可キ
 ノ點ナリトス
 初生兒保護トハ初生兒養育中ノ保護ニシテ腦膜炎、急性傳染病等ニ侵襲セラレサラシムル
 ニ在リ
 既發ノ耳病治療法ハ殊ニ幼兒ニ於テ要用ナル者ニシテ幼兒若シ聽管ノ機能廢絶シテ聾トナ
 ルハ必ス聾ヲ兼テ雙啞トナルヲ屢論スルカ如クナレハ幼兒ノ耳病ハ慎ンテ診斷治療
 シ又既ニ雙啞ト診斷ヲ下ス者モ可成的之カ救濟ノ方法ヲ講究セザル可ラサル者トス何トナ
 レバ雙啞ト見做シタル患者ニシテ些細ノ療法ノ爲メニ恢復シ常人トナリタル例ハ往々之ア

レバナリ左ニローレル氏ノ報道セル一例ヲ擧ケン

一女子 五歳

千八百八十九年十二月ローレル氏ニ診ラレテ

患者遺傳ノ記ス可キナク二歳ニシテ麻疹ヲ患ヒタル他、疾病ニ罹リシヲナシ然ルニ
 生來雙啞ニシテ一語ヲ發セシヲナシト之ヲ檢スルニ左右鼓膜高度ノ牽縮歐氏管狹窄
 アリ

〔處置〕ポリゼル氏法及「カテーテル」通氣法「ブーシー」用法

鼻咽腔ニ二%硝酸銀溶液塗布、鼻腔ニ沃度兒末撒布

沃度鐵舍利別、ローレル氏水内服

食鹽水全身拭布

右ノ方法ヲ施スヲ久シク千八百九十年五月一日再ヒ來ル

之ヲ檢スルニ圖ラサリキニ百「センチメートル」ノ高音ノ聽力ヲ得ルニ至レリト

幼兒ニシテ既ニ聾トナリ救治ノ道ナキ者ハ既ニ習ヒ得タル言語ヲ忘レサラシメンカ爲メニ
 可成的談話ヲ多カラシムルヲ要ス幼兒聾トナルハ言語ヲ忘レ易ク爲メニ雙啞ニ陥キル者

ナルコト既ニ屢ニ論述スル如クナレハナリ
諸般ノ試験ノ後、既ニ聾啞ト診定セル者ハ速ニ聾啞教育法 *Taubstummenunterricht* ヲ施ス
必要ナリ

聾啞教育法ハ談話スルコト能ハサル不具者ヲ教訓シテ滔々是非曲直ヲ演述スルヲ得セシムル
ノ方法ニシテ吾人ハ發明者タルベド、ボンス氏ニ對シテ深ク謝セサル可カラズ

聾啞教育法ハ千五百七十年即チ今ヨリ三百三十四年前西班牙ノ「ベチデクト」宗ノ大僧ベド
ロ・ボンス氏 *Benedictinerpater Pedro Ponce*ノ發見スル處ニシテ實ニ空前絶後ノ大事業ナリトス

次テ千六百五十二年オツキスフォルドノワルリス氏 *Wills* 千六百九十二年アムステルダム
ノヨハン・コンラード・アムマン氏 *Johann Conrad Amman* 等發語法ヲ講セリ

獨逸國ニ於テハ千七百七十七年ハイニッケ氏 *Henicke* ライプチヒニ於テ始メテ聾啞院ヲ建
設シ専ラ發語法 *Sprechmethode* ヲ以テ夥多ノ啞生ヲ教育セリ其法ハ聾啞者ヲシテ談話者ノ

發語状態ニ注意セシムル者ニシテ最良ノ方法トナス所謂獨逸法是ナリ予ハ獨逸ニ在リシ時
一啞生ノ能ク此法ヲ習熟シ其談話辨識殆ント常人ト異ナル所ナキ者ヲ見タリ

佛蘭西ニ於テハ千七百七十八年アベエド・レブエ氏 *Abbe de l'Epée* 巴里ニ於テ始メテ聾啞

院ヲ建設シ専ラ示指法 *Dactylogie* ヲ以テ夥多ノ啞生ヲ教育セリ其方法ハ指ヲ以テ種々ノ
形容ヲナシ之ヲ理解セシムルノ方法ニシテ所謂佛蘭西法是ナリ

獨逸法即チ發語法及佛蘭西法即チ示指法ノ優劣ニ就テハ屢ニ諸家ノ論究セル所ニシテ甲法
ハ之ヲ習熟スレバ何人ト雖モ談話スルヲ得可ク乙法ハ其教師若クハ示指法ノ規則ヲ知ルノ

人ニアラザルバ理解スルコト能ハザル者トス千八百八十年マイトランドニ開キシ萬國耳科學兼
聾啞學會ニ於テハ既ニ甲法ノ優レルコトヲ證認セリ故ニ今日ニ於テハ佛蘭西ニ於テモ亦甲法
ヲ用キル者多シトス

聾啞ハ七歳ヨリ規則正シク教育シ而シテ可成の數多ノ健康人ト混居セシメ言語ヲ多カラシ
ムルヲ要ス又日々習得セル處ハ介者亦其方法ヲ習得シテ屢ニ復習セシムルヲ良トス故ニ常
ニ聾啞者ト混居スルハ復習ノ途ヲ缺クヲ以テ宜シカラストス

ウルバンチツチ氏ハ聾啞教育中ニ平流電氣ヲ通シテ效多キヲ説ケリ又語管ヲ用キテ屢ニ談
話スルハ往々其效用ヲ助クル者ナリト云フ

耳科學 下大尾

明治二十七年四月八日印刷
同年同月十四日發行

定價金七拾五錢

版權所有

纂著者

東京市日本橋區久松町四十番地

金杉英五郎

發行者

東京市神田區鍛冶町二十二番地

大柴四郎

發行所

東京市神田區鍛冶町二十二番地

朝香屋書店

印刷者

東京市日本橋區藥研堀町卅三番地

仁科衛

印刷所

東京市日本橋區藥研堀町卅三番地

厚信舍

肆 書 捌 賣

東京市日本橋區馬喰町二丁目

島 村 利 助

東京市日本橋區通三丁目

丸 善 書 店

東京市本郷區湯島切通

南 江 堂

東京市本郷區春木町二丁目

半 田 屋

大阪市中心齋橋通北久寶寺町角

三 木 佐 助

大阪市中心齋橋筋一丁目

松 村 九 兵 衛

京都市寺町通り二條下ル

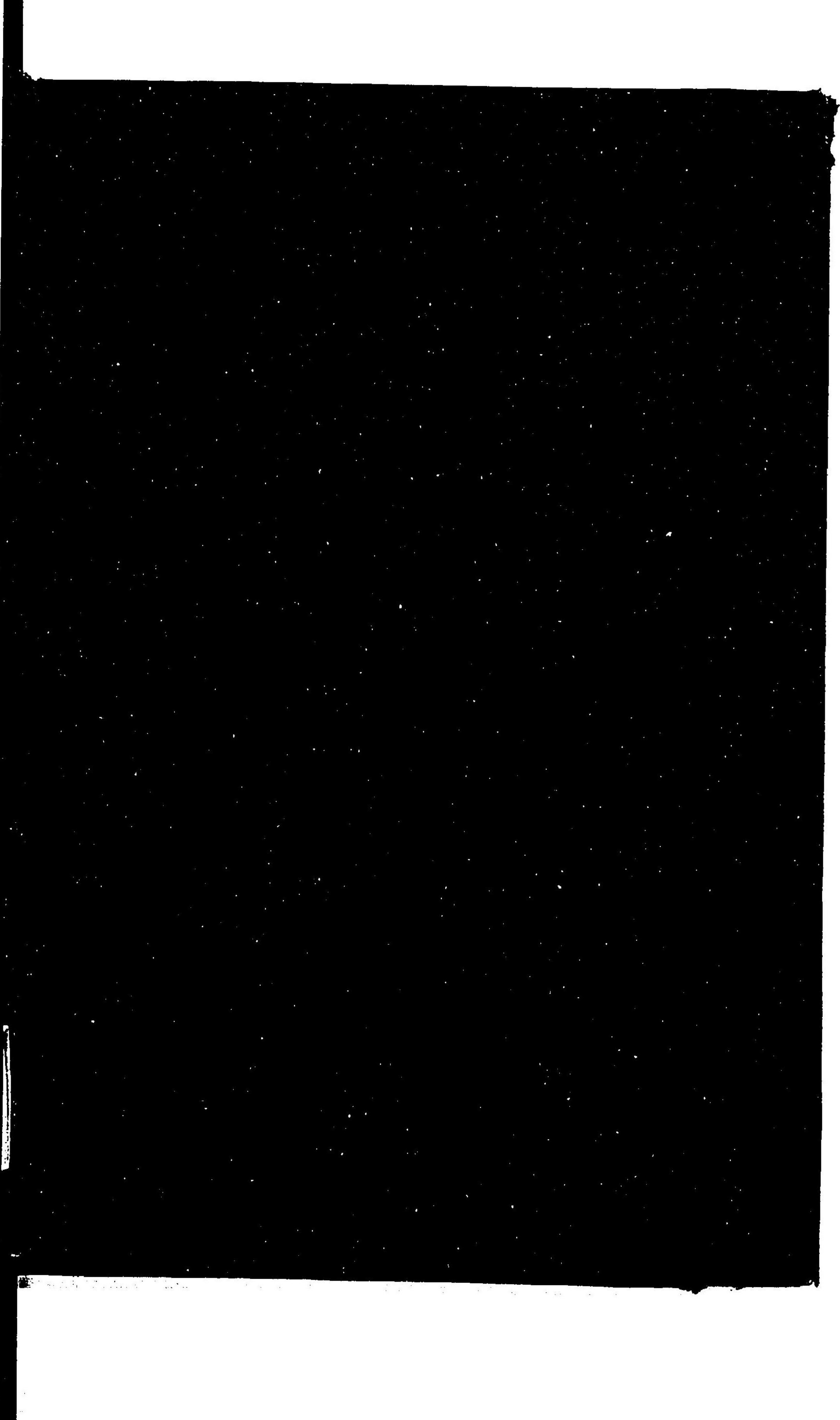
若 林 茂 一 郎

福岡市博多中島町

積 善 館 支 店

44

231



44

Z31